
【全年齢版】 好きです、付き合ってください。

透風真白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【全年齢版】好きです、付き合ってください。

【Nコード】

N1799Z

【作者名】

透風真白

【あらすじ】

可愛い顔立ちでふわふわの茶髪、猫っ毛の彼は、学校でちょっとした有名人。そんな彼から告白をされました。どうしてだろう。だって私は、女なのに。同性愛の言葉が作中出てきますが、直接的な描写はありません。当作品はボーイズラブではございません。ご了承ください。※ムーンライトノベルズにて連載中の同タイトル作品の全年齢版になっております。同じ作者の作品なので無断転載ではございません。

第1話（前書き）

こちらだけ読まれていた方は、お久しぶりでございます。お待ち致しました。楽しんでいただけましたら幸いです。

第1話

「好きです、付き合ってください」

お決まりの文句を言われ、はあ、と短く反射で声を発した。

どうしたものだろうか。目の前の光景は実に信じ難い。というよりも、信じなくて良い。と、誰かが告げている。いや、私の頭には特に何も住んではないが、いわゆるあれだ、自分会議というか。そのようなものだ。

昼休みに呼び出され赴いたのは人気のない校舎裏。ここまでくれば大抵の人間はどんな用向きか察しはつくのだが、目の前の人間を前にして、それはありえないだろう、と結論を下した。

それは私自身が異性に好意を示された事が皆無であるからだとか、容姿、人格共にごくごく一般的かそれより多少下ではないかと自負しているからであるとか、高校2年生にもなって発した言葉の意味を正しく理解していないほど純情であるとか、そういった私自身の問題で結論を下したわけではないとどうかご理解いただきたい。

緊張した面持ちで私を見つめる彼、在籍クラスはどこか忘れたけれど、ひだまり同学年の佐藤昂君。

接点は恐らくほとんどないだろう。同じクラスになったこともなければ、何かの係で同席した覚えもない。どういうきっかけで私を知ったか。そういった細かい事はひとまず置いておこう。

何故、私が彼を知っているか。

それは、彼が学校内の有名人であるからだ。

「……じゃあ、帰りはいっしょにかえろう」

「へっ」

頭の中で色々と整理していたら、目の前の彼が満面の笑みでそ

んなことを発言してきた。

おや、どうしたことだろう。なんだか彼がひどく輝いて見える。頬を染め瞳を潤ませ、まるで乙女のようににはにかんでいる。この瞬間を写真に収めたならば、男女問わず買ってくれそうだ。佐藤ブロマイド、一枚いくらだろうか。儲かるだろうか。

「それじゃあ、またあとでね！」

嬉しそうに手を振って去って行く彼に慌てて声をかけようとしたが、驚きのが勝って、これは最初の返答で男女交際を承諾したととられているなどわかってはいたのだが、私はそれほど真剣に呼び止める事をしなかった。そもそも、彼も本気なわけではないのだから、誤解をといてあげようと親切心を発揮してやる気にもあまりなれなかった。

だって彼は、男性しか愛せない人間であるはずなのだから。

ふうむ、と顎に手をやりながら私は校舎へと戻る。あまりぼんやりしていると、昼食を喰いっぱぐれる可能性がある。正直、空腹をほっておいてまで挑むべき疑問ではない。

図書室へと戻れば、すでに弁当を広げている友人が興味があるのか、戻って来た私に話しかけてきた。

「佐藤君、なんだって？」

当然くるであろう質問に、私は困った顔でお弁当を広げつつ、首を傾げた。

「うーん……わかんない」

期待はずれな私の答えが不満だったらしく、ぴくり、と片眉を上

げ、ふうん、と声をあげる友人に、付き合ってくださいとは言われたんだけど、と正直に話した。すると友人はよほど驚いたのか、口をあんぐりと開けて固まった。なんとも珍しい姿である。

数秒待ってもそのままなので、食欲旺盛な私は友人の弁当箱にあるウインナーへ手をつけた。律儀にタコ型になっているそれを見て、友人の母はちよっとした所で芸が細かいな、と感心する。全体的に女の子のお弁当といった風情でとても可愛らしい。自作している私の今日の内容はのり弁当だ。弁当屋に並んでいたら美味しそうにうつるだろうが、女子高生のそれとしては少々彩りが少ないかもしれない。

戦利品を口に含んで咀嚼した所で、やっと我に返った友人は私を無言で睨みつけると一気に冷気をあびせてきたがさもありなん。絶対そうだとは言わないが、所詮この世は弱肉強食、と断言してしまった人もいたではないか。

とはいえ好奇心が勝ってやらかしてしまった悪戯。さらに怒らせたくはない相手を怒らせてしまったのは事実。私が無言で卵焼きをさしだせば、友人はころりと機嫌を直した。

「……でも、それってありえないでしょ？」

まだおかずが入った状態のまま喋るのは少々行儀が悪いが、話の流れを切ってまで今それを指摘する必要性を感じなかったので私は心に留め素直に頷いた。

「まあね」

「千絵子ちえこはなんて返事したの」

「そこ」

友人の質問に、私はか、と目を開く。

そう、つまりはそれが問題だ。先程たいした問題じゃないと一蹴

したがそこはそれ。空腹の前には瑣末な事柄であつたがもりもりと腹を満たしていけば冷静な思考も戻るというものだ。相手が本気でないにせよ、承諾してしまった以上面倒な方向へ転がる可能性は高い。

難しい顔をして弁当を貪りつつ説明すれば、なるほど、と友人が頷いた。

「つまり、なんとなく声出したらそれがイエスという意味にとらえられた、と」

「そう、それ」

「変なところで抜けてるのよね、あんた」

苦笑して私の頭をやりわり叩く友人の大人びた表情に一瞬見惚れながら、この友人はとても美人なのである、私はぼんやりと考える。とにかく、告白がまがいものであるのは間違いがない。だからそこを指摘すればいい。そうすれば私は解放されるはずだから。

解放。はて、私は一体全体何にとらわれたというのだろうか。

首を傾げながら物思いに耽る私は、とりあえず食べちゃえば、という友人の声に反応して食事を再開した。

先程の友人との会話でわかるとおり、佐藤昴氏のそういった恋愛観は、実は学校中に知れ渡っている。なぜかといえば、ある日ある女子から告白をされた佐藤君が、にっこりと微笑んで「僕は男性しか愛せないからごめんね」というお断りの返事をしたのである。

それから新たな噂が流れ、どうやら佐藤君は同じクラスの幼なじみである男にずっと懸想しているらしい、と知ってから、一部すきものの女子はそれに興奮を覚え、その他の人間も変に面白がって学校全体がそのふたりを応援する図が成立してしまっている。

「……あれ、てことは私は邪魔者になるのか？」

昼食を終え歩く廊下で、腕を組みつつ眉間に皺を寄せる。

学校全体の敵にも成り得てしまう状況に、私はちよつと心穏やかではない。ひよつとするとこれは思った以上に深刻なのだろうか。

これはあくまでも仮定だが、たとえば、たとえば何か、私に声をかけねばならぬ事情があった。私ではなくても良かったのかもしれない。とにかく、異性に告白せねばならない窮地に佐藤君が立たされてしまったでしょう。そうして、告白された私が、「いいよ」と、誤解にせよそうやって返答してしまったという事実が今はある。当然、佐藤君はお付き合いをするしかない。みずから告白したのに、了承されて手の平を返すのはおかしい話だからだ。

そもそも、断られる前提だったのかもしれない。全校生徒が噂を知っているのだから、断られると思うか、疑問を呈すだろうと予想するのが普通だ。ひよつとすると、想定外の結果に私以上に彼が狼狽しているかもしれない。

そこまで思い至って、なんとなく悪い事をしてしまったか、と氣になった。

いや、多分この場合、悪いのは佐藤君になるのだが、のっぴきならない事情があるのなら私はそれを聞くくらいの見解は持ち合わせている。気はそうそう短いほうでもないし、今現在私に想い人がいないのも一因だ。誤解されて困る相手がいなければ、焦る必要もない。

ひよつとすると、好きな男性に何か言われたのかもしれない。へんな賭け事でもしたのかもしれない。あるいは。

とにかく、現段階ではあれこれと思考を広げすぎても仕方がない。ある程度の想定をして準備をし、彼の話を聞くのではないか。

教室に戻って席に着いた私は、そういった方向性で話を纏めていた。

「野田さん」
のだ

放課後の教室にわざわざ迎えに来てくれたらしい佐藤君を見て、クラスメイトが不思議そうな顔をそれぞれ私に向けてくる。今まで接点など何もなくあったのだからそれはそうだ。

佐藤君は、とても可愛らしい顔立ちと茶髪の柔らかい猫っ毛から、どこかなにかの動物を連想させる。背はそれほど低くもないが、見た目通り性格もひととなつこい雰囲気があるからか、皆に愛でられている傾向がある。

恐らく、彼が同性愛者であると公言しなければ、もっと頻繁に告白をされていただろうし、女性をちぎってはなげ、なんてことも出来ただろう。本人がそれを望むのかはわからないが。いや、男性だって、付き合いを了承するひとはたくさんいるかもしれない。

そんなしょうもないことを考えつつ、名前を呼ばれ無言で彼の前まで歩いていくと、佐藤君は微笑みながら私の手を取った。

少し驚いて身体を強張らせると、目の前の佐藤君が表情を曇らせた。

彼に動物のような尻尾が付いていたならば、きっとしょぼん、と萎れていたに違いない。泣き出しそうな顔をしつつ、弱弱い声で私に問いかける。

「嫌だった……？」

哀しそうなその声に、私は無言で首を振る。そもそも、強く拒絶する理由も見当たらない。別に私は彼を嫌いではないし、手を握るくらいで頬を染めるほど男性を意識してしまうわけでもない。

それにしても、解せないのはこの行動だ。

嫌々付き合っているのなら、こんなことするのだろうか。私の言動に一喜一憂するのだろうか。それとも、これもなにかの条件で、演技をしなければならぬ理由があるのだろうか。

考えつつ辿り着いた昇降口で、靴を履き替える。つながれていた手が離れて安堵の息を吐き出したということは、なんだかんだ多少

緊張していたということだろうか。心に余裕が出来た所で、私は口を開いた。

「佐藤君」

「なあに？」

相変わらず微笑んだまま、靴を履き替えた私の手を再度取る佐藤君。こうやって異性に触るのは、彼は嫌ではないのだろうか。

「まずちよつと謝罪しておきたいんだけど。私はあなたとのお付き合いを了承したつもりはないの」

「え？」

「そもそも、佐藤君は私が女性だと知ってるはずでしょう？あなたは異性を恋愛対象として見れないんじゃないの？」

無言で固まる佐藤君の前に、私はとりあえず頭の中であれこれ考えていたことを口にしてみる。

「私、佐藤君が言ったことにびっくりして思わず声あげちゃったんだけど、それを勘違いして了承の返事にとっちゃったんだよね？それは謝罪させて、ごめんなさい。ただ、何か事情があるんなら、聞くのはかまわない。罰ゲームとかで告白しなきゃいけなかったとかそういうのなら、今すぐこの場で終わらせよう。好きでもないのに付き合ったりするのは苦痛だろうし、佐藤君が好意を寄せてる人に色々と誤解されたら嫌でしょう？」

伝えたいことをとりあえず伝えて、彼の反応を待つ。すると何かを思案しているように顎に手をやり黙り込んだ佐藤君は、しかし一分もかからないうちに顔を正面に戻した。真剣な表情で私をみつめる。

「わかった。本当は……何も言わないでおこうと思っていたんだけど、それは卑怯だね、ごめん。覚悟して事情を全部話すよ」

真剣な表情になった彼につられて、私はごくり、と唾を飲み込んだ。

「でも、ここでは話せないから……場所を変えよう」

頷きながら私は彼にひかれ歩き出す。しかし、やっぱり手は離さなくていいのかな。私は気になって訊ねると、そのままでもいいんだ、と微笑んで答えられた。

ひょっとして、事情とやらにこれの理由も含まれているのだろうか。少しずつ好奇心が、多少彼の言葉を急かすけれど、話してもらえることにかわりはないのだから、と無言で彼と帰り道を歩いていた。

第2話

季節は初冬だけれど、今日は春のように暖かい。小春日和というのは、一体いつからいつの言葉であったかわからないから、心の中でも使ったらいけないかわかんないし、なんて思っていたら、目的地に着いたらしい。少し前を歩く佐藤君の足がぴたりと止まった。

見れば、なんの変哲もない公園だった。遊具もそんなには多くないからか、夕日がぽっかりと浮かぶ空のこの時間帯にはもう子どもはいなかった。カップルが訪れるにしてはまだ早いかもしれない時間で、つまりは誰も居ない空間のベンチに、すすめられるまま私は隣りあわせて腰かけた。

離された手を一瞬視界に留めてから、佐藤君へと視線を向ける。

佐藤君は、正面を向いてなにやら考え込んでいた。

恐らく今は声をあげないほうがいい。彼の言葉をじっと待った。

「……知ってた、んだね」

「？」

ぽつ、と呟かれたその意味が一瞬わからなくて、思わず短い返事のような声を発してしまう。そんな私の曖昧な音に困ったのだろう。疑問符を浮かべた顔でこちらを見てくる佐藤君に少し慌ててごめん、と返した。

「意味がわからなくてだね。ええと、知ってたとは？」

「あ、そういう喋り方が素なんだね。そっちのほうがくだけた感じで僕は嬉しいな」

いや、今そんな話じゃなかったはずですけど！？と、思わず脳内でつつこんでしまったが、口に出していないから問題はなからう。

確かに、先程は少々気取った話し方ではあったろう。けれどもほぼ初対面でありながら巻き込んだ責任感からなのか、彼は私に重大な何かを話そうとしてくれている。それならば、私も本来の姿で臨むのが礼儀であろう。と、思わなくもない。

いいや、単に勝手に素うどんな私が出ただけである。言ってるうどんなのだらうか、とやはり自身に問いかけたが、所謂その場の勢いであって、深い意味はないよ、と回答された。そうですか、わかりました。

夕日に照らされる空を一瞬見上げ、美味しそうな色である、と食欲ばかりに結び付けたがる思考を少々叱りつつ、私は佐藤君へと向き直った。

「素とか素でないとか、今は置いとかんかね？とりあえず、さっきの。どういう意味なの？知ってたんだねって何が？」

私の言い様にしょぼんとしながらも、再度の質問に佐藤君はああ、と頷く。

いや別に、本当の私なんて知らないくせに、とか素とか素でないとかそんなの知らないよ、とかそんな風に思っていたわけでは決してないんだ。そんなに情けない顔をしないでくれまいか。悪い事をしてしまったみたいだ。ただ、目の前にぶらさがったままの疑問を優先させてしまっただけなのに。言い方が少しきつかったらうか。

ああ、と言ってから、彼の言葉がどうにも続かないので、私はぱたぱたと左手を上下に振った。あらいやだ奥さん、とかおばちゃんやってる仕草そのものだ。それにたいして別に若人である私はなら抵抗を感じない。ちなみになぜ左手なのかと言ったら私が右、佐藤君が左側に座ったからだ。

「あのさ、佐藤君。別に私は言われて憤慨したわけではないのだよ？ただ、さっきの言葉が気になっちゃっただけでさ。この喋り方が

お気に召してくれたんなら私としても気が楽だよ。かしこまんなく
ていいってことなんだし」

わはは、と笑い声も付けながら言えば、佐藤君は萎れたしっぽを
ぶんぶんと振り出した、ように見えた、実際に彼の尻から尻尾が生
え出したわけではない、ので、私は安堵の息を吐く。

というわけで、仕切りなおしだ。なんだかなかなか先に進まない
ではないか。

「知ってたんだって言うのは、僕の恋愛対象が、その」

言い淀む佐藤君の言葉を引き継いで、私は声をあげる。

「同性愛者？」

「……知らないんだと思ってた」

「学校内で知らないひとはいないと思うけど」

苦笑する彼に、私は頬をかく。どうしてそんなに、まいったなあ、
って顔をしているんだろう。でもそうか。ということは、彼は私が
佐藤君が男性が恋愛対象であるってことを知らないと思ってたわけ
だ。そして今、彼はその事実直面してどうやら困っている。何か
を隠したまま、私とお付き合いを継続させたかったんだろうか。そ
れは一体なんだろう。きっと、その理由はこれから話してくれるの
だろうけれど。

そんな事を思っていたからだろうか。佐藤君が意を決したかのよ
うに正面に向いていた顔をこちらにぐるり、とまわしてきた。

近くで見ると、やはり整った顔をしている。その整った顔は今、
私を真剣に見つめているのだと思うと、妙な緊張感が生まれてきた。
口元を注意深く見つめていれば、元々ゆっくりとだったからなの
か私の目の錯覚だったのかはわからないけれど、佐藤君が唇を開く

瞬間がまるでスローモーション映像のように私の瞳にはうつった。

唇の形すら、綺麗だ。

そう思ったのと、彼の声が耳に届いたのは同時だった。

「わからないんだ」

「え？」

反射的に聞き返すと、佐藤君はまた正面を向いてしまった。ああ、私は彼の可愛らしい顔を真正面から見たいとどこかで思っていたようだ。無意識下の自分に少し驚く。

「僕は、本当は女性が苦手なだけなんじゃないのかなって。ひよつとすると、男性が好きなんじゃなくて、ある種の恐怖症のようになってるのかもしれない」

佐藤君の告白に私は目を丸くする。ええと、それはつまり。

私は頭の中で考えを整理していく。

女性不信、女性恐怖症。女性に嫌悪感を抱く。まあ、とりあえずなんでもいいが、そういった感情を女性に抱きがちな男性がいたでしょう。しかしそれじゃあ、その男性が同性愛者なのかといったらそれはまるで違う話になるだろう。それは、女性に当てはめれば何かのきっかけ、たとえば某かの行為、痴漢であるとか、で、男性全般が恐怖の対象になってしまった。として、その女性は同性愛者か？やはり違うと言えるだろう。

私たちは、まだ16、7そこそこの小坊主、小娘、俗っぽく言えばガキ、である。と同時にとても多感なお年頃だ。不安定で、思い込みも激しいところがあるし、まだまだ自分の考えに確固たる何かを見出せる年齢とはとてもではないが言い難い。そんな我々が、そういう感情を勘違いしてしまう事は、決して有り得ない話ではなからう、とこの時私は結論を下した。

でも、とここで私は疑問を抱いた。

「あの、気分を害さないで聞いてほしいんだけど。今現在の想い人って、あくまでも噂だけれど、同性の幼なじみなんでしょ？その人の事は、どうなの？佐藤君は好きじゃないの？そうじゃなくとも今まで好きになった相手は？」

私の質問に、佐藤君は特に不快感を抱かなかったようだ。顎に手をやり、そこなんだ、と声をあげる。

「僕は、ずっとそう思い込んでいたから、幼なじみの事もそういう対象としてみていると思ってた。でもね、少し前に言われた一言で、僕は何もかもわからなくなった」

ほほう。その一言とは一体なんぞや。

心で呟いたすぐあと、彼から答えが返ってくる。

「お前が俺に抱く感情は、友情とどう違うんだ、って」

「！　ほう、それはそれは」

「……とっさに、言い返せなくて。思えば、恋人同士でするような事を今まで好きになった人たちとしたいと思ってなかったかもなっ
て」

恋人同士でするような事。

その一文を聞いて頭の中を流れたあれやこれやは、まあ外れてはいないんだろう。そういうことを、佐藤君は今までしていないということか。

私も誰かと交際した経験がないからわからないけれど、きっと好きな人とはそういった行為もしたくなるのだろう。自然と、求める心も生まれてくる、はずだ、恐らく。

物質的な何かを求めるのは、そもそも若ければ若いほどそういう衝動は大きいんじゃないのだろうか。男性側は特に。わからないけれど。さっきからわからないけど言い過ぎているけれど。

戸惑いつつも、好奇心からなのか。私は気付けば口を開いていた。「キスとかもあまりしたいと思わないっていうこと？ またはしたことがない？」

さすがにこれには答え辛かったんだろう。一拍置いてから、佐藤君が見る見る頬を染めていった。瞳を潤ませて戸惑うその表情は、そんなつもりがなくともなんだか変な気分になる。別に私はどこぞの中年ではないのであるが。可愛すぎる君がいけないんだ、という男前なセリフが私の脳を突き抜けていった。もちろん、声に出して言うほどハッピーな人間ではない。

「その、したことは……」

「！ あるんですな」

なんか若干変な言葉遣いだけど気にしてはいけない。動揺が隠しきれなかったのかもしれないし、単に興味津々になってしまったのかもしれない。案外私も野次馬根性が盛んであったのか。

真っ赤になってうつむく可愛い男の子にどうしたらいいかわからずしばらく無言でいたが、やがて佐藤君はぽつぽつと呟くように話し出してくれた。

「その、なんていうか、僕からというよりも向こうから半ば無理やりっていうか。その時も、気持ち悪いまではいかなかったけど、かといって良くもなく。手を繋ぐくらいで十分だと思えたし、それもたまにじゃれあいたいのがあればそれでいいな、って」

「ああ……なんか男子ってたまにアグレッシブな遊びをやったのけ

てますのう、そういえば」

なるほどなるほど、と頷きつつ、彼の言葉を聞く。そうか、それならば確かに……微妙、といえるかもしれない。いや、男性を愛する気持ちはあるが、ひよっとすると女性も特別に無理、というわけではないのかもしれないという可能性もある。つまりはどちらも、という人々。そこらへんは詳しくわからないけれど、いずれにせよ、佐藤君が言いたかった真実を大体把握できた。出来た、けれども。はて。

「……私は、なぜあなたと付き合わなければならんの？」

首をこてん、と傾げつつ佐藤君の方を向く。

私の言葉に佐藤君がば、と俯いていた顔をあげる。興奮状態なのか、立ち上がって何かを言おうとした、矢先。

私のお腹が、暴君の如く痙攣を起こした。

「……とても元気な腹の虫だね」

佐藤君が気を遣って言葉を選んでくれる。でも、その綺麗な顔は引き攣っていた。私は気にせず自然に微笑んでみせる。

「優しい言葉をありがとう。……ふむ、現在時刻は17時。暗くなってきたしそろそろ帰るか場所を移動するのがよろしかろうて」

「？ 移動」

「腹が減ると人間それを最優先させる傾向にあるから、どうにも思考が短絡的になっていけない。であるから、空腹は満たすべき。真剣な話し合いをする前ならば尚更。というわけで佐藤君、この後のご予約は？」

とくとくと語る私に、面食らったのだろう。

目を丸くした佐藤君は、立った状態のまま勢いを失って戸惑いの表情を見せた。

「いや、特にありません」

多少情けない声音になっている。なんだか申し訳ないが、目下、最優先事項はこの腹減りをどうにかすることである。

「お家で誰かがご飯を用意していたりは」

「いや、僕の家、両親共働きで、母親がけっこう作り置きしてくれてはいるんだけど、今日は外食用のお金をもらってるんだ」

「それはそれは。ではおいでませ」

「？ おいでませ、ってどこに」

佐藤君の問いかけに、私は微笑んだ。

野田という表札が出ている一軒家。所謂住宅街にあるそれは、ごくごく平凡なものだ。しかし私の隣に立つ男の子は、それをとてもしんしい何かのようにまじまじと口を開いてみつめていた。

なんだかその反応がおかしくて、笑った。

「佐藤君、固まってないで入りなよ」

「……えっ、いやでも」

「別に遠慮しないでどうぞ。誰もいないから」

「ええっ!？」

私の返答に更に驚く佐藤君。なんなのだろうか。とにかく私は早くこの空腹をどうにかしたいのだ。

「いいからほら。タダメシ食らうからには手伝ってもらおうからそう気にしなさんな。早くはやく」

「お、おじゃま、します」

私の言葉に観念したのか、観念という言葉もなにやらおかしいが、佐藤君は戸惑いつつも玄関へと足を踏み入れた。

リビングを通して、少しだけ待つように告げれば、私は二階の自室へと足を運ぶ。

少し急いで着替える。いつもの部屋着だ。料理するのに格好を気にするのは良くない。佐藤君はもう私の中でお客様っていう立ち位置でもないから、外見を気にかけても仕方がない。

少し早足で階段を駆け下りて、ごめんね、と佐藤君に一声かけると、佐藤君が固まった。予想はしていたけれども。

「……それ」

「中学校時代のジャージ。便利だよ、汚れても気にならないから。ほれ、これをお使い。ブレザーは脱ぎんしゃい、動き辛いだろうから」

四人がけのダイニングテーブルの上にあったエプロンを佐藤君に投げてよこせば、彼は慌ててそれを受け取った。よしよし、言うとおりに装着しましたね。

「佐藤君、料理の経験は」

「ごめんなさい、ほとんど……」

「謝らんでよろし。覚えておくと便利よー、今は男も料理作れるとポイントが高い！らしい」

「……………野田さんは、料理作れる男のが好き？」

佐藤君の質問に私は腕をまくりつつ手を洗ってうーん、と声を上

げる。特にそうだからってわけではないけれど、まったくしない人や、家事労働に抵抗のある人よりもやってくれる人のが良いのは確かだ。特に偏見かもしれないけれど、男のするものではない、と言っている種類の方は、日々のお礼を怠る傾向がある気がしてならない。たとえ全く手伝ってくれずとも、美味しいよ、ありがとう、という言葉の威力ははかりしれない。私は、物心ついた時から毎日当たり前のように家事をこなしているけれども、正直、両親の感謝の言葉がなければ、もっとひねくれていたと思うのだな。

そんな事を頭の中で反芻する家事労働と交えつつ考えながら、私は頷く。

「そうだね、私はいっしょにやってくればかなり嬉しいな」

「！ 僕でも出来ることってなにか、なにしたらいい？」

佐藤君がブレザーだけでなくネクタイも脱ぎ捨てて腕まくりをした。急にやる気を出してどうしたことだろうか。でも非協力的よりずっと嬉しい。私は微笑んでそれじゃあ、と口を開いた。

「あーあー、そんなに正確じゃなくていいんだよ、要は食べやすきやいいんだから」

「そういうもののなの？」

「そうそう。こうやって一回切るごとにくるっとまわして」

「そうやって切るんだあ！」

見本に横でにんじんを切ってみせるだけで、佐藤君は感嘆の声をあげる。なかなかどうして良い生徒だ。微笑ましい思いで私は佐藤君の手元を見やる。

「うん、うまいうまい。あ、にんにくは苦手？」

「！ ううん、むしろ好き」

「よかった。じゃああとは、サラダ作ってもらおうかな？」
「はい！」

大変良いお返事ですね。

「ごめんねー、ぜんっぜん凝った料理でもなんでもなくて。でもご飯はガーリックライスにしたから一手間かかってますよ！」

「いや、十分だよ！カレーって久しぶりかも」

「サラダは個人的な趣向でミモザサラダにしました、召し上がれ」
「へー、これってミモザサラダって言うんだ。いただきます！」

ミモザサラダ。本当は黄身だけ使うんだけど、私はもったいないので白身もいっしょに使います。美味しいよ。

サラダとカレー。なんてことない食卓だけれど、やっぱり誰かと向き合って食べるのは美味しい。両親は別に子どもに無関心な親っていうのでは全然なくて、いつも私を気にかけてくれるし時間を少しでも作ってくれようとはするけれど、出張も多いし夜は遅い事がほとんどだ。だからせめて健康的な食生活を、とふたりのぶんのお弁当も作っているし、それが苦痛ではないけれど、それでもやっぱり寂しいって感情はどこかしらあるもので。

「佐藤君の家も、ご両親忙しいんだ？」

「うん。最近は家政婦を雇おうかみたいなことも言ってたかなあ」

「へえ……」

「なんとかやってくれようとはしてたけどそろそろ限界みたい。僕もかまわないよって言ったから、近々そういう人が来るんじゃないのかな」

「そうなんだ。じゃあお母さんの料理食べれなくなるのちょっと寂しいね」

「うーん、そうだね。でも、両親にそこまで無理もさせたくはない

から、そう我儘も言っていられないし。僕は野田さんみたいに家事を一手に引き受けるとか、そういうことも出来なかったんだから、やっぱりしょうがないかな」

口ぶりから、どうやら佐藤君の家も特にご両親と険悪な状態というわけではないみたいだ。それでもやはり、仕事が忙しければどこかしら心に空間は出来るもので、なんとなく、私たちは空気でそれを感じ取った。お互いにどこか照れ臭くて、誤魔化すように微笑みあう。

「片付けは僕がやるね。ごちそうになった御礼に」

「あやー、そらありがたい。悪いねえ。なんなら明日のお弁当とか作ろうかい？」

「それじゃあきらかに僕のが御礼が足りないんじゃないかな」

「そうかねえ？食器を洗った上に拭いて棚にしまってくれたらほんとんになるんじゃないかな」

「それはそこまでしたら作ってくれるってこと？」

「別にかまわんけども。ただかわゆらしいのは作れんよ。ザ・弁当みたいなのか作れんよ」

「なにそれ」

笑う佐藤君につられて私も笑う。ひとしきり久しぶりの人と食べる晩ごはんを楽しんだ。

それから私はお弁当作りを、佐藤君は後片付けをそれぞれやって、無事佐藤君に完成品を渡し、お茶でも飲むかー、とふたつマグカップを用意した、ところで何かを忘れているような気がした。

「……千絵子さん」

「ほっ!？」

マグカップに牛乳を注いでいたところで背後から呼びかけられ、とても間拔けな声をあげてしまった。ああこれお茶ではないけれどお氣になさらず、とか口に出しつつも、なんだか少し動揺している自分がいる。

一体全体なんだというのだろう。どこか圧力のようなものを感じなくもない。冷たいシンクに手をついた彼は、背後から私を囲うようにしている。これでは牛乳が温められない。レンジの前に移動させてくれ。

しかし私の願いもむなしく、佐藤君はそのままの態勢でそう呼んでいい？と訊ねてきたので、お好きになさってくださいえ、と私は返答した。

「ねえ、千絵子さんは、さ。こんな簡単に誰も居ない家に男の子を上げちゃうの？」

「ん？んや。そんなあばずれみたいな真似はしないよ？」

「あばずれって」

私の言いようがおかしかったのか、背後でくつくつと笑い声が聞こえる。

「さっきの話を聞いてはいたけどもさ、でもふたりきりになったところで別に佐藤君が私をどうこうすると思えなかったし。だって女の子が苦手なんですよ？」

「問題は、そこなんだ」

「？　そこ」

佐藤君がシンクから手をどかしてくれたので、私は背後にいる彼へと向き直った。振り向けば思った以上に近かったその距離に多少狼狽する。顔、けっこう近いんですね。

「どうして付き合う必要があるのか。千絵子さんはそう訊いたね」

佐藤君の言葉に、私は頷く。

それを見届けたからか、佐藤君はいつかいまばたきをする、すつと口を開いた。

「僕の女性への苦手意識を、払拭する手助けをしてくれないかな。その為にも、僕と交際をしてほしい」

「……ほほう」

「名ばかりの恋人、というわけじゃない。つまりは、公園で話していたように、恋人同士がするようなことを、僕としてほしいんだ」

「それは、ええと」

「うん、手を繋いだりとか、あの、キス、とか」

あまりの出来事に面食らっていたのかわからないが、私はもう一度ほほう、と呟いていた。

というか、そんな、頬を赤らめて言わないでほしい。そこいらの女の子より美しい。

そういえば、先程一回した佐藤君のまばたきは、とてもとても綺麗だった。

まあ、どうでもいいことだけれど。

第3話

まず、頭を整理しよう。しかし、今の私には何かが足りない。はて、それはなんだろうか。そう考えて、私はひらめいた。糖分である。

私はひとり納得して頷くと、牛乳入りのマグカップを持ち上げれば、佐藤君に声をかけて通してもらい、すぐ傍にあるレンジへとふたつのそれを放り込んだ。熱々にしたいので操作盤を押して、3分温める。カップラーメンが出来る時間と同じだ。

「……行動の意味を訊いてもいいかな」

背後から聞こえてくる静かな声に振り向けば、じっとこちらを見つめる佐藤君。腕組をして私に理由を問うている。私はどうしてそんな質問をされるのかわからなくて、目を丸くした。

「当然でしょう。今の自分には理解出来ない事を言われたの。糖分が足りないからだよ！あ、佐藤君も飲むでしょ？ココア」
「……ぶっ」

私の答えの何がそんなにおかしいのか、佐藤君がついに声を上げて笑い出した。

何をそんなに笑う事がある。だって理解出来ないのに、腹は満たされておるのだから、足りないのは糖分であろう。脳にお砂糖、と言うではないか。

首を傾げて彼を見ると、私が疑問符を浮かべた顔をしているのがますますおかしかったのか、佐藤君は肩を揺らして笑う。

いや、ひょっとして、と思う事もあった。人よりも何かずれているところもあるうか、と。しかし、その齟齬はきつと些少なものだ

と今まで信じてきたし、今現在もそう思っている。けれども目の前の佐藤君の様子を見ると、つい数分前の行為は、大変面白いものであったらしい。ふむ。

温め終わったのを知らせる音がリビングに鳴り響き、私はマグカップを取り出す。

スプーンでちよいちよいと張っている膜を取り除き、ココアの粉を入れる。ぐるぐるとかき混ぜて完成。はい、と渡したら、私はリビングのソファへと腰を落ち着かせた。たすん、と隣を叩いて、佐藤君も隣に座るようながす。

おや。なぜそこで目を細めてこちらを見やるのであろうか。首を傾げるも、佐藤君は特に何を発するでもなく、無言で私に倣った。公園の時とは違い、今度は私の右隣に佐藤君が居る。

こくん、と一口飲めば、脳に糖分が行き渡る錯覚に陥った。なんだか今なら良いこともひらめきそうである。思い込みだとしても、そういった気持ちは大事なはず、だ。

マグカップをテーブルに置いた音がし終わったあと、私は一瞬呼吸を忘れた。なぜならば、物理的に呼吸を塞がれたからである。

綺麗な唇が、平凡な私の唇に吸い付いている。

触れるだけならばキスとか口付けとか、そんな言葉で済ませられるのだが、なんとなく、接吻という単語が私の頭を巡った。意味合い的には同じであろうが、日本人だからだろうか。そちらのがより深い繋がりがあるような感覚になる。

あれこれと、ほぼどうでもいいことを思考していれば、その間も無遠慮に佐藤君の唇は私の唇に好き放題触れ、ちろり、と覗かせた舌が私の下唇を舐めた。

びくん、と肩を跳ねさせて驚いてしまった反射なのか、私は薄く口を開いてしまった。それを待っていたのかはわからないけれど、佐藤君が私の後頭部に手をまわすと、そのままより深い口付けを私にほどこしてきた。

「む……ひゃによ……」

名前を呼ぼうとしたけど無理だ。呂律が回らないところの話じゃない。息苦しい。ぴちゃぴちゃとんだかいやらしい水音まで耳に響いて、私の唾液だったらなんか嫌だなあ、なんて思う。粘膜と粘膜が混ざり合うって、なんだか物凄く卑猥じゃないだろうか。

それにしても。

恐らく先程私がキスと呼ぶようなものしか彼は経験してない口ぶりなのに、どうしてこんなに手馴れている様子なのだろうか。それとも所謂、接吻を経験済みなのか。

頭の芯が痺れる。何かを注がれているみたいに、ぼんやりと思考が鈍くなる。そこまでいったところで、佐藤君がゆっくりと唇を離した。

気付けば目には涙が溜まっていて、顔が熱い。息も苦しかったから、はふはふと浅い呼吸を繰り返す。

「……うっわ、やばい」

この時の私は、彼が何を呟いていたかなんて考えられなかった。もし気付いていたならば、違う結末もあったろうか、と後になって考えたのだけれども、すぐにきつとそれはないな、と一蹴していた。やっと呼吸が落ち着いてきた私の頬に、佐藤君の右手が触れる。

彼の手の平は、温かくも冷たくもなかった。

「……真っ赤だね」

「真っ赤じゃないほうが良かった?」

「ううん、可愛い」

ふふ、と笑ってそんな事を言うあなたのがよほど可愛い顔をしていると思うのだが。けれど今はそんなことどうでもいい。さすがに

ここは憤慨するタイミングだとわかっているのだが、なんだか私はどうにもそういう気になれなかった。なぜであろう。彼にたいして同情的であるからなのか。単に綺麗な彼の顔にまいてしまったからなのか。

なにしろ突然の出来事に驚いてしまって、正しい、と言うとおかしな表現だが、反応が出来なかったのかもしれない。

「ねえ、嫌だった？」

佐藤君の言葉に私は考え込むが、生理的な嫌悪感はなかった、と告げれば、正直な感想だね、と空気で微笑む。ううん、他に思い浮かばなかった。

「僕もね、嫌じゃなかった。女の子に触れても、嫌じゃなかったんだ」

「それは。良かった、でいいのかね」

「うん、良いんじゃないかな？トラウマを克服するという意味では」
「……なるほど」

やっと思考が戻ってきた私は、ぼんやりとしてソファに沈めていた身体を起こす。

「ごめんね、突然。でも、千絵子さんさえ嫌じゃなければ、僕はそのまま千絵子さんと恋人同士でしか出来ない事をしたんだ」

「なんと。それはつまり、私で女の子に対する苦手意識をなくしたいということと相違ないね！？」

「うん、まさにそういうことです」

ふむふむ！何度も頷きつつ、私は援軍を送る心持ちでココアを飲む。

私の行動にあ、と気が付いたのか、佐藤君もいただきます、と言って用意したココアに口を付けた。美味しい、と微笑む彼はやはりとても可愛らしい。

ひょっとして、私はこの顔にどこかしら弱味があるのだろうか。でなければ、いくらなんでもろくに話したこともない彼から接吻をされて憤慨しないのはおかしい。

私もあばずれであったか。

多少悲しくなりながらも、ならば仕方ない部分もあろう、と納得する。本能は、しよせん何事にも勝るはずなのだから。

「……でも、何故私に？ 記憶が確かであるならば、私と佐藤君はまるで接点がなかったのじゃないかね」

「だから。こんな事言うのはあれだけど、接点のある子にはそんな馬鹿正直に頼めないし、そういう噂に興味がなさそうな子に声をかけてみようと思ったんだ。単純だけれど、真面目そうな人の集まる場所って図書室かなあ、と思って、そこでたびたび千絵子さんを見かけて。真面目すぎるのもやっぱり難しそうだけれど、お友達との会話を耳にしたとき、そのへんのバランスが良さそうだって勝手に思ったんだ。千絵子さんみたいな人なら、ある程度付き合って、別れられるかなと思って。ミーハーな子は後々大変そうだし」

「おや、なかなか辛辣なお言葉だね」

彼の事はまだまだわからないとはいえ、今までの様子からしてらしからぬ発言に、私は目を丸くする。

佐藤君は、申し訳なさそうに首を竦めた。

「……ごめん。僕も、やけになってたのかもしれない。好きな人に気持ちを否定されて、ましてそんなことない、って言い返せなかった自分自身が情けなかったんだ」

「そう、か。うん、そうだね……」

もしも女性が駄目だと判明したならば、いや、むしろその方が、佐藤君にとっては幸せな結末なのかもしれない。だからこそ、彼にとってこれは大袈裟かもしれないが人生を賭した最大の勝負事なのだ。

お付き合い、か。ふうむ。現状、嫌だという感情は沸かないし、私は彼に対して同情心を抱いている。おまけに、行為も最後までは至らないと約束してくれているし。

流されてる感があまりに否めないが、ここまで話を聞いてしまつて、無理ですさようなら、と言えるような強さも私にはない。操を立てる相手もないのだし、どうにもそういった部分に深いこだわりが持てなかった。

「でもさ、それなら周りには私と付き合ってるって言わないほうがいいよね。そのほうが何かと都合良いだろうし」

「！ 千絵子さん……僕と恋人になってくれるの」

返答に目を丸くした佐藤君を真正面から見据えて、私は頷いた。

「乗りかかった船って感じだね。ただ、その、無理な行為は無理っと思う。なるべく応えるようにはするけど。その、それでもいいっすか」

「そ、それは全然！むしろ、僕が悪いんだし！」

慌ててそう告げた佐藤君に良かった、と微笑めば、佐藤君も同じように微笑んだ。

「……あの、千絵子さん。もう一回、キスしても良い？」

「ほへ」

「さっきの、嫌じゃなかったって感情、勢いでパニックになっただ

けかもしれないから。冷静になった今の状態で試してみたいんだ」

「ええと、そうか。あの、じゃあ、お手柔らかにお願いします？」

「どうして疑問系なの」

「なんとなく」

ふふ、と笑んだ私に了承を取れば、佐藤君はそっと私に近付いた。先程とは違って、ゆっくりと綺麗な顔が近付いてくる。余裕が出来たからか、彼の顔をじっくりとながめられる。くりくりとした瞳の中が綺麗。伏せる睫毛も綺麗。私を驚かせた唇の柔らかさも、ついさっきの事だから、よく覚えている。

ちゅ、と触れ合う音が耳に届いた。一回目には気づかなかった発見に少し感動しながら、私はゆっくりと目を閉じる。なぜ目を閉じるのか、体験するまでわからなかったけれど、より相手を近くに感じたいからなのかもしれない。

視覚が奪われて、他の五感が冴えていく。触覚、聴覚。少しでも触れられればそのぬくもりを敏感に感じ取ることが出来る。先程とは違い、口腔内というよりも唇を味わうように、佐藤君はやっぱり私の唇を甘噛みする。その延長で、舌をちろり、と出して舐めたり、佐藤君の唇全体で挟まれて、吸われたり。

溶けてきた思考で、それが気持ち良いと感じる。私って、ひょっとして淫乱だったのかな。そんなことまで考えながら、ちろりと伸びる舌はどんな様子なのか見たくなくて、そろり、と瞳を開けてみる。

驚いた事に、てっきり閉じていると思っていた彼の瞳は、ぱっちりと開かれていた。

目を見開いた私に気付けば、瞳で笑った佐藤君は、そっと私の唇を弄んでいた舌を離す。まるで私がそれを見たがっていたことを知っているみたいだ。

ああ、やっぱり、綺麗。

ぼんやりとそんな事ばかり思っていたら、佐藤君が微笑んだ。

「昂って、そう呼んで」

「……え？」

「ふふ、まだぼんやりしてる？ かわいい」

頬に手を添えられて、優しい声音でそんなことを言う。私はそれがとても恥ずかしかったけれど、同時に冷えた手の平が気持ちよかった。いや、佐藤君の手が冷えたというよりも、私の頬が熱すぎるのだろうな。先程の行為のせいだと思ったら、なんだかますます温度が上がりそうだった。

私は何かを誤魔化すかのように、ちらり、と佐藤君を見やる。

「え、ええと、あの、す、昂君？」

「うん、そう呼んで」

わかった、と私が頷くと、佐藤君は再度微笑んだ。

それから、ココアをすべて飲み干して、佐藤君は帰った。

駅までの道がわかるのか心配だったから、いっしょに行こうか、と言ったけれど、夜は危ないから、と断られてしまった。なんとも紳士的であると同時に、そんな風に女扱いされると、気恥ずかしい。パタパタと顔を扇ぎつつリビングに戻ると、携帯電話が振動する音が響く。静かにしていると、けっこう聴こえるものである。

私はポケットからそれを取り出せば、登録した覚えのない名前に目を丸くする。通話ボタンを押すと、そこからは先程まで話していた佐藤君の声が聞こえてきた。

『無事駅に着いたよ』

その言葉に、よかった、と私が告げる。そういえば、携帯電話の番号を覚えてくれとさっき佐藤君が言っていたな。何か操作して私

の番号はわかったから、と返されたから、まさかこちらに彼の番号が登録されているとは思わなかった。佐藤昂という名前が、きちんと着信者名に出ている。

私は、彼の言葉に微笑んだ。

『そうか、それはよかった。家までも、気をつけて帰ってね』

『ありがとう。じゃあ、また明日ね、千絵子さん。これからよろしく』

その言葉にこちらこそ、と返事をして、電話を切った。

台所へと足を運べば、片付けようと思っていたマグカップは、綺麗に洗われ、あるべきところに戻されていた。きっと、佐藤君がやってくれたんだ。でも、いつの間に？

「……そういえば、あんまり顔が赤いから顔を洗ってきたらどうだって佐藤君に言われたな」

きっとその間に片付けてくれたのだろう。なんと、好青年である。気付けば私は、よくわからないかたちで終わらせてしまった初めての接吻を、特に悪い記憶として残すこともなく微笑んでいた。

第4話

携帯電話の番号とアドレスを交換し、けれど特別何かをやりとりしたわけでもない。果たして、お付き合いというものが具体的にどういったものかと考えたけれど、そもそもがお付き合いというものを正式にする必要がないのだということに気が付いた。

極端な話、女慣れする為に適度に私と会話をしたり触れたりすればいいわけで、特別に親しくする必要もないだろう。情がわけば、別れも辛くなるし、私にとってもそのほうがいいだろう。

「……ん？ あれ？」

今重大なことを心の中で呟いたよな。こんなことが過ぎるということは、ひょっとして私はすでに彼にたいして何か特別な感情を抱いたのだろうか。

嫌いではない。話しやすいし、彼の隣は居心地が悪いわけでもない。そもそもが、特別な感情、所謂、好きとはどんなものだろう。自分に問うてみたけれど、答えは出なかった。糖分が援護をしたところで、答えを出すのは無理だという事くらいはわかったけれど。

「千絵子さん」

「！ 佐藤君」

明日、と言われたけれど具体的に何も口約束をしていない状態だったから驚いた。友人と図書室へと移動する途中で、佐藤君が教室に現れた。出入り口に立つ私の隣に居る友人は目を丸くしている。

「良かった、行き違いになるところだったね」
「どうしたの？」

「せっかく作ってもらったんだし、いっしょに食べたいなんて思ってお友だちさえ良ければだけど……」

佐藤君が首を傾げて私に告げる。ああ、そうか。弁当のことか。確かに同じ場所にいて、作った相手と作ってもらった相手が別々に食べるのはどこかしら妙な感じもする。けれども、そんなに親しくして良いのだろうか。

周囲は、突然現れた私の存在に戸惑いを覚えるに違いない。佐藤君は同性愛者として有名であるとは言ったけれど、もちろん彼の容姿にだって起因しているのだ。私は恋路を邪魔する人間として、学校中から非難される可能性を孕んでいる。彼は、そのへんどう考えてるのだろうか。

「……あのさ、聞きたいんだけど」

「！ あかり」

私が思考をめぐらしていると、横に居る友人が声をあげた。横田あかり。私の数少ない友人のひとりである。ちなみに他校に恋人がいるからか、黒くまっすぐな長髪で佐藤君の隣に並べばえらく画になる彼女はしょっちゅう告白をされる。恋人がいるのだと断っても信じてもらえないことだっけしばしだ。

「ちょっと、ちー！」

「ほ？ おう！」

間の抜けた返事をしてしまったためか、拳骨を額にお見舞いされ悶絶すれば、佐藤君が千絵子さん！と名前を呼んで私の顔をあげさせる。

「だ、大丈夫？ 横田さんて噂通りのキャラクターなんだね」

む？

私は良く、人とずれてるなんて言われたりもするけれど、こういうのは敏感なのだ。

気のせいじゃない。佐藤君の言葉、私に向けるものとは違ってどこか険のある空気を出している。言いようも、何か含んだようなものだし、そんなにわかりやすいものじゃないけれどはつきりと敵意が感じられた。

なんでだかはわからんけど。なんで？……いかん、空腹では考えが纏まらん。

「あら、その噂、どんなものかお聞かせ願いたいもんだわね」

そしてこの友人である。あかりは、自分に向けられる敵意やその他の事は私以上に感じやすいだろう。はつきりと、彼の挑戦状を受け取ったようだ。でもだからなんでこのふたり険悪なわけなの。

ねめつけるような顔で腕を組みつつ、あかりは佐藤君を見やる。しかしそんな彼女の強い視線を真っ直ぐ受けているというのに、

佐藤君は春風の如くそれはそれは爽やかに微笑んで見せた。

「だったらお昼をいっしょにとりながらってどう？」

「名案だと思うわ」

にっこりと笑んで発した一言に、あかりはやはり微笑んで応えた。ふたりの間に散ってる火花の意味は一体なんなのだろう。首を傾げつつ、ちらと腕時計を見やる。おっと、こうしてはおれん。

「おふたりさん、話が纏まったんなら行こうか。早くしないと昼を喰いっぱぐれるという事態になる。部室で食べよう。佐藤君、そこで良いかな？ 教室だと色々まずかろうて」

私の言葉に佐藤君が頷くが早い、私は歩を進める。正直、この空腹は耐えがたい。とつとこの空白を埋めないことには、私は心が安まらない。

「……あの子、ほんと食事時になると性格変わるわ。私のワインナ―まで奪い去ったくらいだし」

「……すごいね」

早足で目的地へと進みだした背後では、2人が半ば呆れたように言葉をこぼしていたらしいが、今の私の耳にはもちろん届いていない。昼食をとるのが最優先事項なのだから。

部室、というのは、実は私達ふたりしか在籍していない所謂、同好会だ。文芸部、ではないので文芸同好会。反対に、漫画研究同好会は人数が多く、漫画研究部として成立している。なんとも面白い話だ。先輩が卒業してしまって2人きりになった部室は少し寂しいが、その分気楽でもある。元々、何の活動もしていなかったから人が増えようと減ろうと関係ない。

冬は少し寒い為、図書室で昼食をとるのだが、夏はこちらで食べる事も多い。同好会なので元々、資料室という名の倉庫だった教室をあてがわれており、恐らくは六畳と少し程度しかない、きちんと調べたら本当はもっとあるのかもしれないが体感的にはそう錯覚する、であろうと予想されるこの場所は、こじんまりとしたソファと机に、ひとつの棚にびっしりと過去に制作された冊子や小説が置かれている。ちなみに電気ポッドが完備だ。

私と佐藤君は隣り合って、あかりは向かいのソファにそれぞれ腰かけた。

「……それで？あなた、千絵子に交際申し込んだってホントなわけ」
「ああ、それは知っているんだ」

「昨日呼び出されたとき一緒に居たんだもの。戻ってきたら気になるし理由は訊くでしょう」

「まあ、そうだね。千絵子さんが言ったんだ？」

私をちらり、と見つめる彼の視線に少し驚いて、おかずを一瞬のどに詰まらせた。いかんいかん。お茶を飲んで無理やり流し込む。すぐ隣に座っているから、距離が近い分なんだか過敏に反応してしまう。2人きりで話しているときよりも緊張するのは、あかりの前だからだろう。

「……あかりは友だちだし、まあ。まずかったかな？」

でも、事情を話すつもりはない。あかりには申し訳ないけど、彼女に知られては色々面倒な事もあるだろうし、そもそもこの歪な関係を彼女が認めてくれるとも思えない。私だって、もしもあかりがそんな事に巻き込まれたら止めただろうし、そんなの恋人ではないだけでただならぬ関係の友達と言われてしまっても仕方がないではないか。

そう、昨日、その事実が気が付いて私は打ちひしがれた。就寝前のベッドで、ひとしきり暴れて、やがてため息を吐いた。認める他ないという現実が、妙に残酷だと感じる。

私は、何がしたいんだろう。今更そんなことを思う。そんな醜い行為をしてまで、私は彼に協力して、得るものなんてないのに。自分はこのままで、善人だったろうか。ひょっとして昴君の素敵なあれこれにあてられてのぼせ上がっているだけなのだろうか。そうなるといういよいよもってあばずれでしかない。

一度、是と言った以上、拒否するつもりはない。けれど、これで良かったのだろうかという気持ちはやはり拭えない。彼とはすでに、思い出すだけでも恥ずかしいような接吻をしたのだ。あれ以上だつてひょっとしたらするかもしれない、正直想像できない。

いつかは別れる相手。いや、始まってもない相手。こうやって昼に訪れたのは、意外だった。彼は、私と同じような考えだと思ったから。

そんな佐藤君を見つめる。一応、事情は話さないよ、と目で訴えてみた。

正しくそれを受け取ってくれたのかはわからないが、佐藤君はそんな私の視線を受けて、微笑んだ。

「実は、正式に付き合う事になったんだ。最初僕が勘違いしちゃったんだけど、昨日色々と話合った末にそういうことになって」「……そうなの？」

佐藤君が何を考えているかわからないが、怪訝な表情でこちらを見るあかりの視線を受けて、とりあえず私は調子を合わせて頷く。

「あんた、別に佐藤君のファンでもなんでもなかったでしょ。なんでまた」

「うーん、特に断る理由がなかったから、かね。確かに好きかって言われたらわからないって感覚だけど、昨日一緒に帰ってみて、話して、ああ隣に居るのはそう悪くもないなって思ってた」

私の言葉に佐藤君はしばらく目を丸くしていたけれど、やがて頬を染めて微笑めば、ありがとう、と私に告げた。満面の笑みはきらきらしていて眩しい。ああ、本当に綺麗だ。

そんな私たちの空気を一掃するように、ごほん、とひとつ咳払いをしたあかりは、呆れ顔で私を見たあとに、目を眇めて佐藤君へと向き直った。

「佐藤君。もはや噂でもなんでもなく、あなたが同性愛者って事は公然の事実だったと思ったけれど」

ううん、やっぱりそうくるよね。佐藤君、どうするつもりなんだろう。

多少、好奇心の混じった目で彼をみつめていれば、彼はさらりと衝撃的なことを言っただけだ。

「僕はゲイなんじゃない。バイなんだ」

さすがのあかりも驚いたのだろう。口をあぐりとあけて、間拔けな声をあげる。

「……はあ？」

「でもどちらかというとゲイ寄りだと思うよ。好きになる人は男性が多かったし。あと女の子は集団で騒ぐ子が多くて年代はちょっと苦手なんだ。だから何人かに好意を告げられた時、もしかたそういう子があらわれたら申し訳ないと思ってそう言った。僕も予想外だったんだ、同年代、学校で好きな女の子ができるなんて」

言って、微笑みながら私を見つめる彼の瞳はとても甘ったるい。そんな顔で見られると、真実ではないとわかっていてもなんだか気恥ずかしかった。

私は思わず、難色を示そうと声をあげる。

「っあの、佐藤君、ちょっとこのタイミングで見ないでくれないかね」

「そうそう、それ」

なぜか私がやめろ、と言おうとしていたのに、佐藤君のがよほど不機嫌顔でこちらを睨むようにさらに見つめてきた。なんだというのか。

「どうして戻ってるの？ 昂って、そう呼んでって言ったじゃない」
「え、あ、ごめん。あのときはその……なんかよくわからない感じで」

「あのとき？」

私の言葉に間髪入れずにあかりがつっこんできた。しまった、口が滑った。

しかし私が慌てて口ごもる前に、昂君はひょうひょうとあかりの疑問に答えた。

「改めて告白したときだよ。あの時は、顔が真っ赤ですごく可愛かったんだ」

「ちょ、えと、す、昂君」

ふふ、と笑って私の頬を撫でる手は、昨日より少し冷たい。というか、あの時っていつのこと言ってるんだろう。もしかしてむにやむにやした時のことじゃないのか。

考えれば考えるほど、私は混乱してしまう。

きつと、今もあの時と同じくらい顔が赤いんだろう。彼の言っているあの時と、私の思うあの時が合っていればこそたえではあるが。

「……ふうん。ま、どこまでが本当かどうかはわからないけど、佐藤君が千絵子を好きだっていう点だけはどうかやら本当みたいね」

あかりの言葉に、昂君は当然だよ、と言って微笑む。私は、少し胸の奥が痛んだ。友人を騙してしまった。それに、平然と言っているのはいるけれど、昂君だって好きな人に対する裏切り行為を今宣言してしまったようなものなのに。

私が悶々とそんなことを考えていると、それで、と昂君が真剣な表情で口を開いた。

「実は、お願いがあるんだけど。僕らのこと、口外しないでもらえると助かる」

「まあ、そのほうがいいでしょうね」

ため息を吐いたあかりは、一言ですべてを把握したらしい。まあ、それはそうなんだよね。

今は学校全体が昂君と幼なじみ、名前はそういえばなんだったろうか、を応援している雰囲気だし、そこにきてぼつと出の私が彼女になりました、なんて。色々な人間を敵にまわしそうだ。それに。

昂君は正直、とても女性に好意を寄せられる機会が多い人間だ。端的に言えばモテる男の子。これだけ可愛い容姿と人柄ならばそうなるのもうなずける。であるからこそ、彼が今、女性とも関係を持てると表明してしまえば、外野はますます騒がしくなるだろう。私達のことは表立って言わないのが無難である。そもそものが、偽りの恋人なのだし、必要性を感じない。

「……でもいいの？ 佐藤君。この子、別に箸にも棒にもかからないような子じゃないわよ」

「それはもちろん、わかってるよ。だから、大々的に僕らと仲良くなってもらおうかと思ってね」

「僕ら？ どういう意味？」

「僕と奏^{かなで}。それぞれ同時に接触してもらえれば反発もそう起きない」

ふたりの話がいよいよ見えなくなってきたところに、昂君はこちらを振り返って微笑む。

「千絵子さんは知ってるかな？ 僕の幼なじみ、奏たかって言うんだ。高柳奏やなぎ。そいつと僕と四人で仲良くなれば、そうそう怪しまれない」

「……え、でも」

「大丈夫。理由はもう用意されてるよ。ねえ、横田さん？」

ますます微笑みを強くする昴君を私は心配になってみつめる。そういう意味じゃないよ、わかってるでしょう！ でも、昴君は何も言わないし、この状況じゃ言えない。

そのときだ。

昴君が、私の手をきゅ、と握った。私は、驚いて一瞬反応してしまったけれど、昴君の顔はあかりに向かっていたので、あかりは氣付いていない。

私はなんとなく、その手を握り返す。すると昴君も、今までよりも強い力で私の手を握ってくれた。

忘れていた先程の彼の言葉を反芻して、私はあかりに顔を向ける。目の前の友人は、なんだか悔しそうに唇を噛んでいた。

「……あかり、どうしたの？」

「……少し前に話したでしょう、私の兄が結婚するって」

その言葉に、私はああ、と頷く。あかりは、けっこう自他共に認めるブラコンで、結婚話が決まった時多少荒れた。けれど、相手の女性がとても良い人らしく、最近は晴れ晴れとした様子で敗北宣言をしていたものであったが。それがどうしたというのだろうか。

「実はね、奏のお姉さんも、近々結婚するんだ」

「へー、それはまためでたい。……っておいおい、まさか」

その言葉の意味をわからない私ではない。今は満腹だしな！

「そのまさかよ。……まさか、高柳君があなたの幼なじみだったなんて」

「元々、学校でも話しかけようとしていたみたいだし、接触してるのは時間の問題だったと思うよ」

憂鬱そうなあかりに、昴君が楽しそうに微笑む。どうしてあかりは、こんなに嫌そうな顔をしているのだろう。

「なんつか苦手なのよあの人。妙に明るいしなれなれしいし。他人との距離感を正しく取れない人間はどうにも疲れて」

「でも口実が出来れば、僕は他への牽制ができるから正直ありがたい」

「……私にメリットは何もないんだけど」

「僕は、強硬手段に出る事だって考えてる。確かに、女子がどんな反応を起こすかは予想の範疇をそれこそ超えてしまうかもしれないけど、千絵子を無防備にしておくよりはずっといい」

千絵子って、ま、また名前呼ばれた。

どきりとして、繋いだままだった手を離そうとすれば、昴君はそれを許してくれない。

ただ握っていただけの手が、一本いっぽんの指を使って絡みとられる。指と指を交差して私達の手は先程よりも深く繋がると、昴君は指の腹をつかって私の手をゆっくりと撫でてくる。なんだかいやらしい手つきに、私は声をあげそうになった。

というかなんなのだろう。この手つきは。すごく抗議したい。

混乱に陥れられた私は、この時2人の会話の意味を全く考えられなくなり、話自体もあまりきちんと聞いていられなかった。終始小刻みに動く彼の手が、どうにも気になってしまつて。

あかりが鋭い瞳で昴君を睨みつけていた事も、それを受けて昴君が微笑んでいた事も、やはり全く気付いていなかった。

「……脅すつもり？」

「穏便に済ませたいだけなんだよ。僕だって、彼女を守りたい。傷付いてほしくはない。けれどそれ以上に嫌なんだ、他の男が千絵子を見るのが」

「まさか、そんなに独占欲が強い男だなんて思わなかったわ」

「どうしても、だめかな」

「……はー。わかった、わかったわよ。どっちみち、これから親戚付き合いもしなくちゃいけないだろうし、まあ、今から交流を深めて苦手意識をなくす努力をするのも悪くないわ」

「よかった」

にっこりと微笑んだ昴君の手が、やっと私から離れた頃には、2人の会話は終わっていた。

「……って千絵子。顔真っ赤よ、大丈夫？」

「へいっ!？」

あかりの指摘にいったいいっぱいになった私は、ますます顔を真っ赤に染め上げてしまったらしい。覗き込んだ昴君が可愛い、と微笑むその顔に、ついに昴君のが綺麗だよ、と声に出して言ってしまったのは醜態以外のなにものでもなかった。

第5話

「まさか、あかりのお兄さんと昴君の幼なじみ……奏君だっけ？のお姉さんが結婚するなんてまたずいぶんとすごい偶然があるものなんだねえ」

「そうだね」

ほへえ、と妙な声を上げつつ話す私に相槌を打った昴君は、食べている間ずっと誉めてくれていたお弁当を食べ終え、ペットボトルのお茶を一口飲んでいいる。ちなみに私は家から持ってきたものを持参している。どうせ弁当用意するから、飲み物も一緒に用意するのはそれほど手間じゃないのだ。

あかりは何を思ったか、居心地が微妙だから先に戻るわ、と言って少し前に教室へ戻ってしまったので、今はふたりきりである。なんでだろう、さっきまでの変な緊迫感がなくなって、だはー、と長い息を吐き出してしまう。

「ずいぶん緊張してたみたい？」

「わかった？」

あはは、と苦笑を漏らして再度短く息を吐き、私は話を続けた。

「あかりは鋭い人間だから……彼女に嘘吐くってえらい緊張するんだよねえ。まあ、罪悪感とは別としてさ」

「そうだね」

私の言葉に昴君も首肯する。

「きっと横田さんは、ほとんど信じていないんじゃないかな」

彼の予想か確信かわからないその口ぶりに、しかし私は完全にそうだろうな、と考えていた。きっと、あかりは何もかも信じていないのだろう。けれど何も指摘しないでくれたのは、彼女が私を信用してくれているからだ。心配していないわけではないでは決してないのだろうに、最後の判断を私に任せて、見守る役に徹すると、きっと無言で約束してくれたのだ。

友人の気遣いに少し心が温かくなると同時に、先程口にした罪悪感からか、ちくりと胸が痛んだ。

私がしばらく無言でいると、昴君も黙って正面を向いていたが、やがて私の方へと振り返れば眉尻をきゅ、と下げて、なんとも情けない表情になった。どうしたのだろう。

「……ごめんね」

「？ 昴君」

「僕の嘘に付き合わせちゃった」

その言葉に私は目を丸くして固まる。

いいよ、と言って笑ってしまえば済んだけれど、私はそうできなかった。だって私は、全然いいよ、と思えていないのだ。そこを曲げて口に出すのは、馬鹿正直かと言われればそうだけれど出来ずに、結局無言で微笑むだけになってしまった。

決めたのは私で、けれども何がしたいのかわからないという感情はやはり同じで。

やっぱりやめる、と言うのは簡単なのだけれど、昴君の内情を思えば、どうにもそれは言えなかった。

もしも自分ならば、と。やはり考えてしまう。

私ならば、あかりに恋心を抱いてしまうようなものなのだろう。私はそんな感情抱いたことないからわからない。けれどそうなった

ら、きっと考えても答えは出せずに、いくら大好きな糖分を摂取したところで、私の思考はそれ以上すすまないのだろう。

想い人に、自身の心を否定されるのは、一体どれ程の苦痛だろうか。

君は今、傷付いているのかい？なんて、訊けるはずもない。けれど、想像してしまうんだ。ない頭で、考えてしまう。そうすると、私は息が苦しくなって、彼をそこから解放できるのならば、協力したいと願ってしまったのだ。

綺麗なその顔が、歪み病んでいくのを、どうしたって見たくなかった。

私のその表情を見て、何を思ったのか、昴君は苦しそうに顔を歪ませた。あれれ、いちばん見たくないとか思っちゃった表情さめちゃった、なんでだろう。

私は疑問符を浮かべた顔でじっと彼を見つめ返していれば、やがて昴君の右手が私に近付いてきた。

長くもなく、短くもない。はっきりと黒でもなく、茶でもない。真っ直ぐというほどでもないけれどくせっ毛まではいかない、何もかも中途半端な私の髪。

彼の手が、さらに、と私のそれに触れると、少しだけ隠していた私の顔をもっとはっきり見る為なのか、少しだけ取って私の耳にかける。

手が耳に触れた瞬間、くすぐったさに私は肩をほんの少しだけ揺らした。

「……もしも」

「え？」

「もしも、本当に僕が、千絵子さんを好きだって言ったら、どうする？」

「どうって」

「あの時、僕の噂を知らなくて、ただ純粹に告白をされていたら、

どうしてた？」

いちばん最初に、告白されたとき？

じっと見つめる彼の視線がなんともいえなくて視線をさまよわせつつも、私はなんとか口を開く。

「……断ってた、と、思うけど」

だって、理由がない。

もしも昴君が本当に私を好きだと言ってくれるならば、私も同じ気持ちを持っていない限り応えてはいけない。人として、それは守らなければならないことだと、思う。

その答えに、昴君は苦笑して、ため息を吐く。なぜ、そんな悲しそうに笑うんだい。わかんないよ、昴君。

気付けば眉間に皺を寄せて考え込んでいた私は、持参していた紅茶を一口飲み込めば、ちなみにこだわりが特にないのでなんの種類かはわからないがでかど缶に紅茶と書いていたパックになったものを購入している、なんとなく頭の中が冴えた気がした。少量だが甘味も入っている。

「……でも」

「！ 千絵子さん」

静かにつぶやくように声をあげた私を、まじまじとみつめてくる昴君の顔を、私もじっと見つめ返した。

「……今だったら、どうかな」

「え」

「断っていたかもしれないけれど……でも、そのあとたとえば、私の存在を抹消されてしまったら、悲しいと思う」

「……………」

「廊下ですれ違っても、挨拶どころか目も合わせてくれなくなって。気が付いたら小さく手を振ってくれたりとか。名前呼んでくれたりとか。そんなのが、なんもなくなったら、いやかなあ」

「千絵子さん」

「あれなんかもう友だち気取り？やだねえ、こんな図々しい奴じゃないはずなんだけど。ごめんよう、なんかきもち悪いねははは」

「千絵子」

あれ？

言葉を遮られたと思ったら、なんか気付いたら。
抱きしめられてます？

「……昂君？」

「なんなのもう……超かわいい」

「え？いやあの、す」

名前を呼ぼうとしたら、頬に唇が触れた。それに驚いて言葉を切れば、次に降りてきたのは唇へのキスだった。

キス、ではない。

でした。これは、接吻です。

息が苦しい。どうしたらいいのかわからない。じたばたしている
と、昂君が唇を離して微笑んだ。

「鼻で呼吸すればいいんだよ」

くすぐすと微笑みながらそう耳元で囁く。ちよつと、くすぐった
いですが！

というか多分そうだろうなとわかってるし苦しいからいくらかそ
うしてるんだけど足りないんだよ結局！口を塞がれるってこれほど

苦しいのだね！

「それより、あの、なんで？」

「？　なんでって」

息が整って、普通に喋れるようになった私の質問に、昂君はわからない、といった風情でこてん、と首を傾げる。やめてください、可愛いです。

「だって、どうしてキスしたの？　必要ないんじゃないの？　だってキスはもう大丈夫そうってわかった、ん、でしょ？」

「……千絵子」

「へっ」

私の言葉がお気に召さないのか。わからないけれどやれやれ、といった感じでため息を吐きつつ首を振る昂君。なんなのですか、一体。

「僕は言ったでしょう。名実共に恋人のような行為がしたいって」

「……言った、けど」

「それはただ身体を触れ合わせるって意味じゃないよ！　かわいいって言ってるのだって本心だし、抱きしめたいって思った時じゃない、僕はそういう行動に出ないよ」

ええー？　それって……なんか、よくわからない。普通の恋人とそれだとどう違うのか？

私が混乱しているのがわかったのだろう。苦笑して私の頭をゆっくりと撫でる昂君は、とても優しく微笑んでいた。

ああ、また。

彼のこういった表情のひとつで、世界は止まる。時間が流れなく

なる。

「ねえ、別れるって前提で考えるのやめない？」

そんな中、彼の発した言葉の意味を理解するのに多少時間がかかってしまった。

数秒遅れて反応すれば、狼狽して一步ずり、と後退する。

しかし、そんな私の腕を、彼がしっかりと握った。ますます狼狽した私は、ふるふると数回首を振る。

「だって、でも」

「お願い、千絵子さん。僕と恋愛の練習しよう。女の子とちゃんと付き合った事って、今までないんだ。だから、最初の相手は千絵子さんがいい」

「だから、練習なんでしょう？」

「ゴールは、別れじゃないよ。いいじゃないか、たとえばこのまま付き合っても。どちらかが他の人間を好きになりでもしたら話は別だけど。僕は、いいかげん実らない恋にも疲れたんだ。卑怯だって言われてもかまわない。忘れさせて、千絵子さん」

「昴君」

「千絵子さんの存在で、僕の奏への気持ち全部忘れさせてよ」

なんだそれ。

ええと。ええと？

「ちょっと自動販売機」

「別にココアとか買いに行かなくてもいいでしょ」

彼の言葉に、ぴくり、と反応する。立ち上がりかけた私の肩をつかんで留まらせるとは。こやつ。

「なぜわかったのかね」

「糖分、でしょ。いいじゃない難しく考えなくたって。僕らは確かに飯の恋人かもしれないけど、いつか飯の部分がなくなる可能性だってあるわけでしょ？」

「……昴君は、私のこと好きじゃないでしょうに」

「少しでも好意がなきゃ、一緒になんていたくないよ」

「ふーむ……」

眉間に皺を寄せつつ考え込む私に、にやり、と笑ってみせた彼の顔は、今までにない表情だった。

私の身体を引き寄せると、何を思ったのか私と共にどさ、とソファに倒れこむ。

所謂、押し倒されている状態になった。

「きっと、他の女の子だったら触れられないのかもしれない」

「え？ え、いやいやちよっと！」

言われた意味を把握する前に、昴君の手が私の身体をまさぐるうとする。

「昴君、ちよっと、やめて！」

「やだ」

その言葉に衝撃を覚えて目を見開く。昴君をうかがえば、真剣なその瞳と真正面から向き合ってしまったって、私はどんどん怖くなってしまう。

今は、彼の手が私の腕を力強くおさえこんでいた。

「おねがい、やめて」

かすれたような声で呟いて、もう一度彼をみつめる。すると、昂君の瞳が揺らいだ。

……なんなのさ。その哀しそうな顔は、なんでなのさ。

「……じゃあ、お願い。約束しょ？」

「……………やく、そく」

「さっきの話。僕たちは、お互いに外に好きな人が出来ない限り、恋人同士」

「でも」

「僕は、千絵子を道具として扱いたいんじゃないんだ。こんな風に、押さえ込んで、こんな行為だけを繰り返されるのなんて、嫌でしろう？」

昂君は、言って、纏め上げた私の腕を解放すれば、ひとつ息を吐き出した。わからないけれど、どこもなく自分自身に呆れているかのようなため息だ。

先程の乱暴な行為とは打って変わって、昂君は壊れ物に触るかのようにゆっくりと私の身体に触れた。それでも、さっきの記憶が残っているからか、私はついついびくり、と震えてしまう。

「……ごめん、怖かったよね。ごめん」

ごめんね、と謝罪の言葉を繰り返されながら、彼がゆっくりと私の頭を撫でる。掴まれていた手首が少し赤くなっているのを確認すると、昂君は私の手を取って赤くなった箇所を唇を寄せた。

触れるだけのそれは何度も施され、その優しい行為にますます涙が出てくる。

「昂君、私は、なんか、駄目だった？」

私の涙混じりの声に、昴君は静かに首を振ると、起きれる？と言って私の背中に腕を回すと、ゆっくりとソファに座らせてくれた。押し倒された相手に起こされるとはこれいかに。

涙がたまった情けない顔の私に困った顔を向けながら、昴君は私の眦に口付けた。なんですかね、今日は皮膚接触が多いですね。

「泣かないで」

「泣かせないで」

反射で返した私の言葉に目を見開けば、昴君はごもつとも、と呟いて項垂れた。その様子に多少は溜飲が下がる思いがすれば、私は小さく微笑む。

その表情に、昴君がやっと安心したかのように微笑を返した。

「泣かせたかったわけじゃないんだよ。ただね、さっきも言ったけれど、僕は千絵子さんを道具にしたいわけじゃないんだ」

「私は別に道具じゃないよ」

「でも、僕となるべく学校で関わらないようにしようって思ってたでしょう」

え。

「それだけじゃない。こうやって他愛もない話をしたり、お昼を食べたり放課後の時間や休日の時間を一緒に過ごそうとか、そういうことだっただけが必要がないって思っていたんじゃない？」

え。え。

ちよつとまで、なぜ知っている。

「わかるよ、反応見てればそのくらい。今日、教室に来たときだつて心底不思議そうな顔してたし、横田さんの前であまり一緒にいるところ見られたくないんだなって思ったもの」

「……そうだけでもさ。そのほうが色々都合が良いんじゃないのかい」

「だから。最初、確かに僕はいつか別れるって言ったよ、それはごめん。でもね、僕も、終わりを想定して関係を築こうと思ったら、やっぱり寂しいって思うんだ。千絵子さんがそう思ってくれたように。だから、仮とかそうじゃないとか、あまり考えすぎるのやめようって思ったんだ」

「昴君」

ぽかん、と間拔けな顔で見つめる私に微笑んで、昴君はふわりと笑めば、一瞬だけ触れる程度のキスを、私の唇に落とした。

な、ふいうちは、恥ずかしい！

真っ赤になった私の顔に、微笑んで彼が可愛い、と告げる。だからそれも恥ずかしいのだが。

「僕たちは、まだ恋人って堂々と言えない関係だと確かに思う。でも、いつか終わるんじゃない、ここから始まるって考えられないかな」

「……はじまる、ですか」

「うん。やっている行為は本当の恋人となんら変わらないんだし。行為に気持ちを追いつくように、これからゆっくりと、お互いを知っていかない？」

「昴君は、それでいいの？」

「もちろん。良くなかったらこんなこと言わないよ。千絵子さんは？」

気持ちが追いつくまで、仮の恋人。なんだかとてもややこしい話

だ。

「ちょっと」

「自販機はいいから」

ちっ。なぜわかる。

私はひとつ息を吐き出せば、覚悟するかのように、頷いた。

「わかった。そっちのほうが、ずっと健康的だもんね。うむ、どんとこーい」

「……最後の宣言がよくわかんないけど」

ふふ、と笑って、昴君は右手を差し出した。

「これから改めて、よろしく願いします、千絵子」

「！ よ、ろしく。す、昴」

私はされた行為を真似しただけなのに、呼び捨てにされた昴君は、目を見開いてなぜか頬を染め上げた。

第6話

「なにかな」

「えっ」

「訊きたいことあるんでしょう？僕に」

「あー、ごめん。あからさまに態度出てたかい？うん、あるんだけど訊いたらいいのかわからない」

並んで歩いてる時に何度もちらちら視線送ってたらそうなりますよね。わかりやすすぎますよね。ええ、ごめんなさい。

ひとつため息を吐いて、私は昴君にもう一度うかがうような視線を超越す。それを受けて、昴君は首を傾げて更に優しい笑みを増すばかりだ。訊いていいよ、って合図なのはわかるのだけれど、非常に訊き辛かったのだ。

それでも、好奇心に負けてしまい、私はためらいつつも口を開いてしまった。

「あーの、ね。奏君って、どんな人なのかなあ、と」

「ああ、なんだ。そんなこと訊き辛そうにしてたの？」

からからと気持ちよく笑う昴君は、お昼に見せた少し艶のある顔とはまた違う。けれどひとつひとつの表情に魅了されているかのように、私は新しいそれらをのぞけるたびに同じように綺麗であると、心の中で呟いてしまうばかりだ。

けれど、そこまで笑わなくとも。そもそもなぜ訊き辛いかなんて、わかっておろうに。

だってさあ、と口ごもりつつ言う私の頭を、昴君は撫でる。いや、嫌ではないのだけれど、そんな頻繁に頭撫でなくたっていいんですよ？

「別に、あいつのこと訊かれたって落ち込まないよ。そもそも明日には会う事になると思うよ?」

「ああそっか。そうだね。……ねえ」

「うん?」

「あんちゃん、本当に大丈夫なのかい」

あんちゃんてなに、と噴出しながら言った昴君は、一頻り笑ったあと、真顔になる。

「僕が落ち込んだら、悲しい?」

「? 当たり前でしょうよ」

そんな今更な質問の意味がわからん、と眉根を寄せつつ言えば、昴君は満面の笑みで私の腕を掴むと、早足で歩き始める。なんだか急に。見たい番組でもあるのかい。

首を傾げつつ私が昴君?と名を呼べば、昴君は一度止まって、ぐるん、と少し後ろを歩く私へと振り返った。

「落ち込んだら、なぐさめてくれる?」

「……はあ、まあ」

「じゃあまたキスさせて」

「はい?」

「僕の家でも良いし、千絵子さんの家でも良いよ。なんならその他の場所でも」

「何の話を」

ぐい、と腕を引っ張られれば、気付けば私は彼の腕の中。これでもかというくらい目を見開く私の耳元で、昴君は囁く。

「千絵子に、いっぱい触れさせて」

「！　ちょ、おい」

「早く帰ろう」

拒否したかったけれど、なんだかんだ押しきられた私はあばずれなのか。ああもう、考えるといちいち落ち込むから嫌だ。

次の日の、まさか朝に向こうから接触があるとは思わずに、いつものようにぼんやりと教室で席に着いていた私は、視界に昴君の存在が飛び込んできて驚いた。驚いた結果。

昨夜の破廉恥なあれこれを思い起こしてしまったわけである。

顔赤くないだろうか。にっこりと微笑んで手を振る昴君に、私も手を振るけれど、顔は無表情に留まってしまった。

「おはよう、あかりちゃん！」

声を大きく張り上げ腕が千切れんばかりに振り上げれば、満面の笑みでこちらへ駆け寄ってくる。呼ばれた当の本人はうんざりした顔をしているけれど観念しているのか、逃走するつもりはないらしかった。

高柳奏。賑々しい彼こそが、昴君の幼なじみにして、彼の想い人。そしてあかりと縁戚になる人だ。

ちら、ともう一度私の前に座るあかりを見たけれど、呆れた顔でため息を吐いているが、おや。思ったほど嫌でもなさそうだ。

あかりは、本当に嫌いな人間にはここまで露骨にこっちくんな、っていう雰囲気を出したりしないのだ。きっと、距離をはかっている最中なのだろうな。

「千絵子さん、おはよう」

「おはよう昴君」

今度こそ微笑んで私は告げる。まだ少し早い時間帯だから人はまばらだ。私たちの隣にあたる席のクラスメイトもまだ登校していない。

昂君は繊細な動作で、奏君はなんとも豪快な立ち居振る舞いをしつつそれぞれが席に着いた。

「えっと、はじめまして！あかりちゃんのお友達、千絵子ちゃん」
「あ、こちらこそ初めまして。ええと、奏君」

奏君は私の名を呼んで頭を下げたので、私もそれにならってお辞儀をする。日本人の礼儀だ。

しかし無防備な姿を晒していた奏君になんたる仕打ちなのか。何を思ったのか昂君は想い人の頭を思い切り叩いたのだ。何か道具を使って叩いたわけでもないのに、とても耳に心地よい音がした。叩かれた奏君は、とても痛そうではあるけれども。

目を丸くして彼らの行く末を見守っていたけれど、昂君は不機嫌な顔を彼に向けている。なんだ、どうした。

「奏は野田さんって呼びなさい」

「えー？そんな他人行儀なの嫌じゃん、千絵子ちゃんて名前かわいいし。あ、じゃあちーちゃん」

「馬鹿なの？そんなのもっと駄目に決まってるじゃない」

なんだか険悪な雰囲気慌ててしまい、私は2人の会話に割って入る。

「別にかまわんよ？ちーちゃんでもなんでも。私は奏君て呼ばせてもらって良いかね？」

「！千絵子さんっ」

「おーむしろ呼んで呼んで！俺、下で呼ばれるほうがいいから、あ

だっ」

「お前調子乗んじゃないぞ……」

ゆらり、と彼の後ろに漂う何かが揺れた気がする。というか、あれれ？

「す、昴君？」

なんだか随分とくだけた物言い……というか、好きな人にそんな感じでいいのですか？多少驚いてまじまじと彼を見つめていると、昴君はにっこりと微笑んだ。

「千絵子さん、千絵子さんも奏の事は下の名前で呼ばないようにしてね」

「……なんでだね？」

「なんでも」

言い切りに、胸の奥が少し痛んだ。

そうか、そうだよな。好きな人が、他の子に名前呼ばれるの嫌だし、その逆だって、嫌だよな。私としたことが。そのへんの気遣いをすっかり失念していたようだ。

私は、小さくわかった、と返答する。

でも、でもだな。

なんだか、理不尽さを感じたりはしないかい。

言ったじゃないか。忘れたい、と。忘れさせてくれ、と。だと言うならば、こんな些細な事で嫉妬してどうする。彼を独占しようとするばするほど、あなたはより苦しくなるのではないのか。

自分に生まれた今の感情に、名前を付けられるほど私は人間として豊かではなかったけれど、それでも、そのまま従うにはいささか荒れた心は、小さな反抗心を鈍いふりして隠してみせた。

微笑んで、私は口を開く。

「じゃあ、私はやなぎんと呼ばせてもらおうかね」

「ああ、なるほど！じゃあ俺は野田っちで！」

「おお、かまわないともさ」

「じゃあ改めてよろしく、野田っち」

「こちらこそよろしくね、やなぎん」

にこにこ微笑み合って、握手を交わす。さあ、これで我々の自己紹介は終わりだ。

それで、と更に話を続けようとした、が。

どうしたのか。ものすごい不機嫌オーラをその身に纏いつつ、ゆっくりと昂君が席を立った。まあ、当然か。わざわざ苗字で呼べと言ったのに、親しさを強調するかのようにあだ名を付け合ったのだ。彼を独占したい心が強ければ強いほど、私にたいして苛立つのは無理からぬことである。

据わった目と低い声。

呆れたことに、私は表面的にも心の中でもそんな彼に怯えていたのに、初めての表情に、またしても綺麗だ、と無意識下で私の内に過ぎった。

「……部室の鍵、どっちかが持っていたりする？」

響いた声に、どんな意味で心拍数を上げているのか、混乱してわからなくなってくる。

千絵子さん、と名前を呼ばれて、私は馬鹿正直に持っている、と返答してしまった。無言で私の鞆を持ち上げ、更に私の腕を昂君は掴む。

心配顔のあかりと目が合って、私はとっさにへらり、と笑んだ。あかりは少し表情を和らげてくれたけれど、それでもまだ不安そう

だった。

「というか、ふたりきりで話をさせてしまうことになるけれど、それはいいんだろうか。」

私はぐいぐいと引っ張られる力強さに、その乱暴さにどこか芯が冷える思いがした。部室の前に着いても、黙って従う事もしたくなくて、足が止まった時点で思い切りその腕を振り払った。

昂君は一瞬その行動に面食らっていたけれど、すぐに鋭い視線を取り戻せば、鍵は、と短く呟く。

「……持ってない」

「さっき持ってるって言ったでしょ」

「ふたりきりになって、何するの？」

私の言葉に先程よりも苛立ちが増したのか、無断で私の鞆を開くと、ごそごそと漁りだした。行動に驚いて抗議しようとする、昂君の手にはもうすでに鍵があった。

くそ。たいがいああいうのって外側のポケットか中の小さいポケットに入れてあるからな。すぐわかってしまったか。

私は焦って走り去ろうとしたけれど、やはり彼のが早い。腕を掴まれた状態で開錠され、そのままずると部室へ引きずられてしまった。

かちん、と施錠される音がやけに部屋全体に響く。授業とか、そういうことは当然ながら目の前の男は考えていないのだろうな。

「……何そんなに怒ってるのかわからない」

私の言葉に、昂君は眉を顰める。半ば無理やり座らされたソファのぎりぎり端っこまで寄ったって、昂君がこちらに近付いてきたら意味はない。わかっていたけれど、本能的にそうしてしまった。

「どうして、奏とそんな親しくなりたいの？」

「別に、そういうわけでは」

「僕の事は、最初は他人行儀に呼んでたし、口調だってしばらく素で話してなかった」

「だって昴君の好きな人だったら、その、信用できる人だから」

「それだけ？」

ぐい、と両腕を引っ張られて昴君のほうへと倒れ込む。この学校は一般的な公立高校だが、男子のブレザーにはネクタイがあり、一応は着用が義務付けられている。ほとんどの生徒はしてきていないが。かっちりと制服を着るのは、一部の優等生だ。公立はそうそう校則も厳しくないのも、教師もそこまでうるさくない。

そう、だから、ネクタイを着けるような生徒は、表向きだけかもしれない。優等生、なのである。

「あの、昴君？」

私は、どうして掴まれた右腕にネクタイをひっかけられているのですか。ひょっとして、拘束されている？

固まっている間に、昴君は何故か私の右手首と彼の左手首をぐるぐると巻きつけて縛り上げてしまった。どういうことだ、これ。混乱して彼を見ると、びっくりするくらいの無表情がそこにある。

「す、すすす」

「もう一度訊くよ？ どうして、奏と親しくなりたいの」

「え？ べ、べつに」

「好きなのか、あいつのこと」

睨むように、挑むように言われた言葉の意味を考えるには、時間がまるで足りなかった。

固まった無言になった私を見て、それが肯定の意を示していると思っただろう。ますます険のある空気を醸しながら、昂君の右手が私の膝小僧をつつ、となぞった。

びくり、と震えた身体がひどく汚いものに見えて、全て投げ捨ててしまえばいいと思った。けれど彼はやわやわと触るその手をどかしてはくれない。

「あっ……！」

ついに小さくだけれど声をあげてしまった私を、昂君は軽蔑するかのようには笑う。

「僕に触られて、感じてるの？」

「おねが、やめ、て……」

「声、色っぽくなってきてる」

「やあっ！」

ふいに、耳になにかが触れる。

昂君の舌だとわかったのは、そろり、と耳朵をなぞられた時だった。

特に恥ずかしい場所ではないはずなのに、今まで誰かに触れられたことのない部分を、男の人に舐められている。その事実が信じられなくて、私は必死で首を竦めた。

「やあ、おねが、やめてえっ！」

「快樂でもなんでもいい。僕から離れられない身体になっちゃえばいいんだ」

「……っな、んで」

「まだそんなこと言うの？ 僕よりも奏がいいのに、こんなに反応して」

その言葉に、私の中で何かが爆発した。

「高柳君に、こんなことされたいわけじゃないじゃん！」

「！……………千絵子」

「す……………ばる、く……………が、いや、なんでしょお……………？」

嗚咽混じりでなかなか言葉にならないけれど、それでも私の声に反応して、昴君は次に進もうとしちた行為をぴたり、と止めた。

私は、無言で私を見下ろす彼の顔も見れないくらい、ぼろぼろと涙を零し続けていた。

「昴君は、高柳君が、私に近付くのが、嫌、なん、でしょ」

「……………ああ」

「たか、やな、く、が、昴君より、私と仲良くするのが、や、だ、から」

「……………はっ？」

次に発したことが予想外だったのか、昴君は妙に間拔けな声を上げて、私の頬を拘束されていない右手で包み込む。

「ちょっとまった、千絵子。おまえアレの事が好きなんじゃないのか」

「あれって、どれえ……………」

「奏だよ！ 高柳君！」

「好きでも嫌いでも、ないよおおお……………」

「はあ！？ じゃあなんで」

「だって、やなぎんと、仲良くするの嫌がって、そんなに、やなぎ

んのこと、大切なのかって、思うじゃんよう……つく……」

私の言葉に、しばらくぼかん、と口を開けて固まっていた昴君は、やがて我に返ったのか、私を拘束していたネクタイを外すと、短く息を吐き出した。

「……てっきり奏に一目惚れでもしたのかと思った」

「なんでそうなるのさ！意味わからないよ！」

「そっちの思考こそ意味わかんないよ！なんで今更、千絵子さんをあいつから遠ざけたいの？あいつは同性愛者じゃない。僕には可能性なんて方にひとつもないんだ！」

じゃあ、どうして？どうして私の事を怒ったの。こんな事したの。

口には出さずに、けれど空気でそれを感じ取ったのだろう。昴君は私を見下ろしながらぼつりと呟いた。

「僕が嫌だったのは、千絵子に奏をとられることじゃなくて、奏に千絵子をとられることだったんだよ」

「……………はあ？」

ちょっと、自動販売機に行ってきたでもいいでしょうか。

第7話

「僕にとって、千絵子さんの存在はもうけっこう大きくなってる」

「……奏君が、好きなんでしょう？」

「そればかり。今の僕は、千絵子さんの恋人なんだよ？」

「そう、かもしれないけど」

「だから、奏と千絵子さんはそもそも大切な種類が違うの」

「だけど昴君にとっての奏君は」

それ以上、言葉を重ねる私に苛立ったのか、昴君は一瞬眉を顰め、次には私の唇を彼のそれでふさいでしまった。

ま、またも接吻です。苦しい。

けれどもなぜなのか。今まで感じた事のなかった、どこかの何かが揺さぶられているような。

唇が重なった瞬間、沸いた感情は、なんなのだろう。

『歓喜』

浮かんだ言葉に、しかし何故なのか、と首を傾げたくなったが、今の私はいにく後頭部を彼の左手によってつかまれ、頬には彼の右手が寄せられている。重なる唇の間からこぼれる吐息や水音が、沸く感情をより強く認識して、ついにわけがわからなくなった。

好きなのか、私のことが、少しでも。

私は、どうなのだ。彼のことが、好きなのか。恋慕する、想いがあるのか。

少しでも。

苛烈ともいえるその行為がやっと終わると、私は肩で息をする。どうやら、先程の表現は間違っていない。どこかしら残虐な気持ちがあったに違いない。苦しがる私を見て、昴君が見たことのない

種類の笑みを浮かべている。

悪の親玉って、こんな顔をよくしているよな。じゃあ私は、ピンチになったヒーローだろうか。あいにく、地球を守る器を持ち合わせてはいないが。

「まったく、変な所で普通の女の子っぽいんだから」

息切れしてまだうまく喋れない私は、問うように視線でその意味を訊ねる。昴君の言葉は、時々てんでわからない。難解なパズルを解かなきゃいけないときみたいだ。

昴君は私の表情を見て、ふ、と微笑むと、頭のとっぺんから髪の毛までをゆっくりと撫でる。その手つきは、ひどく心地よい。

「今はまだ、気付かなくていい。だけど覚えておいて。僕は、君が大切だ。失いたくない。たとえば、奏を失ったとしてもね」

たとえばなでをうしなっただとしても？

反芻して、咀嚼してみる。しかしそんなことをしても、理解できるはずがない。

私が口を開き声を発しても、それを邪魔するものはない。気付けば私の呼吸は落ち着いていたらしい。

「……………なぜ」

「はいはい、質問ばかりしないの。あとは宿題！自力で答えが出せる時がきたら、ちゃんと聞いてあげる」

すんなりと出た言葉も、しかし昴君はそれにたいして何も答えてはくれなくて。

悶々とした気分が残ったけれど、言われた真の意味はわからずとも、単純に考えたってすぐだったかった。

大切。今現在の想い人であるはずの、奏君よりも、私のことが。それが、どんな意味でなのかはわからない。それでも、その言葉が、私には嬉しかった。

「……お帰り。一時間目見事に終わったわよ」

「うん、わかってる。ただいま」

「手に持ってるそれ、ココア？」

「糖分」

四角い紙パックに刺さるストローから、茶色い液体をずず、と吸いつつ答える。

昴君とは、教室の手前でわかれた。手を振って、一応は笑顔で、私も戻る。内心は色々複雑であるが。

自動販売機でココアを買った時は笑われた。なんでそう笑うんだ。上戸か、上戸なのか？

席に着いた私にあかりが言ったように、一時間目をまるまるさぼってしまった。教師にそれを指摘されると面倒だな、と思っていたが、あかりが適当に誤魔化しておいてくれたらしい。気分が悪くトイレに行ったが、ひよっとしたら保健室に向かったかもしれない、と。

少し苦しいといえそうだが、担任はそこまでつつこんでくる性格でもないので大丈夫だろう。目の前の彼女に礼を言くと、あかりは目を眇めてぽつりと呟いた。

「……あんだ、そのうち痛い目に遭っても知らないわよ」

言われた意味を、私は必死で考えた。……糖分を、もっと摂取したほうが良いだろうか、と思いつつ。

「野田っち！」

「おう、やなぎん。どしたん？」

「いやせつかくだから。お昼いっしょに食べようよ」

廊下に出た所で声をかけられ、隣に立つあかりが嫌そうな顔をした。そういえば訊かなかったが、ふたりきりになったとき、どんな会話を交わしたのだろう。

にこにこ笑うやなぎんこと奏君と、隣に立つ昴君。昴君は背が小さいわけでもないけど、やなぎんのが高い。というか、やなぎんの背が高いのだな。短髪の金に近い髪は、活発な彼の性格をよくあらわしている。良くも悪くも主張が激しい、というか。いや、今時金色の髪もそうそう珍しくはないけれど。

目は奥二重なのかな。よくみると線が見える。目は大きすぎないけど、糸目ではない。万人から平均よりも格好良い顔と言われそう。嫌いじゃないけれど。

と、私はやなぎんに注目していた視線を、昴君へとうつしてみる。茶のふわふわなくせっ毛。長い睫毛。ぱっちりとした二重に、唇は厚いまでいかないが、薄くはないな。

うん、やっぱり、昴君は、綺麗だ。

「……千絵子さん、どうかした？」

「どうしたとは」

まじまじと彼を見つめる視線はそのままに訊ね返すと、昴君は狼狽しつつも頬を染める。あまり見ないで、と言われたので、一言謝罪して観察するような力強い視線を送るのはやめた。

「……じゃあ、また部室に行くかい？」

「いや、図書室に行こう」

問いかけた私に即答した昴君が不思議で、私は首を傾げる。しか

し何か質問する前に隣のあかりからため息が漏れたのに気が付けば、彼女のほうへと視線をやった。

「そうじゃなければ意味がないものね。行くわよ、ちー」

「？ 意味がないとは」

「部室には人がいないでしょ」

「その何が悪いと言うのか」

重なる私の質問に、呆れたようにあかりが再度ため息を吐く。

「そんなくらい自分で考えなさい」

言って、すたすたと歩き始める友人。

どうしてあかりも昴君も似たようなことを言うのだ。前を歩くあかりの隣にちゃっかり小走りで並んだ奏君は、あかりに足を思い切り踏んづけられていた。あれは痛い。

「置いてかれちゃうよ、いこう」

「……昴君も、やっぱり教えてくれないの」

「お昼を食べるのが、第一優先じゃないの？」

くす、と笑って私に再度歩みをうながした昴君の顔は、どこか悪戯っ子のようなだった。

なんなのだ、一体。

もうおわりの通り、我が校は図書室での飲食を禁止していない。ただし、カップラーメンは別である。液体は本を汚す恐れがあるし、残ったスープをどこに捨てるかで一度問題になった。図書室を出てすぐのトイレは、よく手洗い場の排水溝が詰まってしまっていたから。そういう経緯があり、図書室はカップラーメン厳禁である。

「……この前もそうだったけど、昴君のお弁当、それ千絵子の自作よね」

「ほんとだ。中身いっしょだね」

あかりの言葉に、やなぎさんが同じく私と昴君のお弁当を覗き込む。ちなみに、私とあかりが隣同士に座った。やなぎさんはあかりの隣が良かったみたいだけど、全力であかりが阻止したのだ。

私の向かいに昴君が座っているので、自然とふたつのお弁当を見比べる為に昴君のほうへとやなぎんの身体がたおされる。

ふに。

眉間に触れたのは、昴君の人さし指だった。

急に感触がしたらびっくりするじゃないか。一体なんだというのか。

「千絵子さん、どうしたの？皺」

「……しわ？」

ぐにぐにとほぐすように触られて、やっと自分が顰め面していると自覚した。

おや？一体全体これはどういうことかね。理由を考えようにも、無意識だったからさっぱりわからない。

「ごめん、なんでもない」

「野田っち大丈夫？はらいた？」

「ちよっと、女子に腹痛とか訊くのやめなさいよ、こういう神経してるのあなた」

私よりも更に眉間に皺を寄せあかりが指摘すると、ごめんなさい！と慌ててやなぎさんが謝罪する。いや、別に気にしないけれども。

「ごめんね。こいつ、そういうの本当無神経なんだ。まあ、良くも悪くも単純というか」

「昂、それフォローになってないじゃん」

「してないよ。何、擁護してもらってる気だったの？意味がわからないね」

辛辣な言葉に、やなぎんは、意地悪するなよ！と涙目になる。ああ、ふたりは、すっごく仲良しなのだ。美しい彼と、格好良い彼。静謐な彼と、快活な彼。柔らかい彼と、豪快な彼。

静と動。まるで凸凹がかっちりと組み合わせるみたい、ぴったりのふたり。

彼を失っても、私のが？嘘ばかりだ。昂君は、優しい顔をして、毒を吐く。見え隠れする本性みたいなもの、少しだけれどわかってきた。彼は、きつと嘘が上手な人種なのだ。

私を、道具として扱いたくないのは、彼が少しでも罪悪感を軽くしたいからなのかもしれないし、それこそ、高柳奏という人間の呪縛から解放されたいからなのかもしれない。

けれど。

目の前で繰り広げられる会話に。楽しそうに笑う昂君に。

私は、早々に、そんなわけがない、と思い至った。

無理じゃないか。私が、彼をそこから救い出すなんて。ああ、なんだろう。無力だなと、思う。

同時に沸きあがる哀しさは、なんなのだろう。せめて友人として、隣に立てたならば、こんな気持ちにはならなかったろうか。

形ばかりの恋人は、この先も虚しさが付き纏うのだろうと、楽しそうにふたりをみていて、改めて、私の胸を突き刺した事実だった。

「あかりちゃん、いつになったら俺の事名前と呼んでくれるの？」

「別にいいじゃないのどうだって」

「でもほら、我が家は全員高柳なわけだしさ、結婚式のとときとか、

下の名前で呼ばないと不便じゃない？」

「だったら結婚式の時限定であんたのこと名前で呼ぶわよ」

「うう……俺、負けない」

ぺたん、と机に突っ伏すやなぎんは、本当に真っ直ぐな男なのだな、と感じる。

言動がすべて、素直すぎる。この年齢で、こんなに素直すぎるとそろそろ不便な面もたくさん出てくるのではなからうか。変なところを心配してしまつて、そんな自分がおかしくなる。

ある意味私も、昴君も、彼によって苦しめられているのに。そんな彼は驚く程憎しみを持ってないようなキャラクターだった。これでは、昴君も気持ちを持て余したって仕方がないだろう。

あかりに何度詰られても立ち向かう彼の愚かさは、見ていてとても気持ちがよかった。

もちろん、変な意味とか、悪い意味ではなくて。

「ちょっと、あんた大丈夫なの」

「へ」

「薄気味悪い愛想笑いずっとくっつけて。お昼、味しなかったんじゃない」

教室に戻って来たとき言われた言葉に、私は苦笑するしかなかった。

なにもかもその通りすぎて、やっぱりあかりにはかなわないなあ、と思わざるをえない。まあ、私もわかりやすいというか、顔に出やすいからな。

これから先、何度もああいふたりを見ていくのだろうと思うと、胸中は複雑だった。

でも、ほんっと、いいやつ、だなあ。やなぎんは。友達多いんだろうな。なんか、見ていてすごくまぶしいや。

達観できれば、ちよつとは違うんだろうか。

昂君が、いつも綺麗な顔をしていてくれれば、私は哀しくならな
いはずだけど、あんまりにも私を置いて嬉しそうにされてしまうと、
ちよつと、じゃない、かなり寂しい。

買ってきたいちご牛乳を飲みつつ、私はまた気付けば眉間に皺を
寄せていた。

自分の今の心はなんだか難解で、誰かに教えてほしいとさえ考え
ていた。

「野田っちー」

放課後になり、さあ帰ろう、という矢先。あかりは今日は何やら
用事があるらしく、私が帰り支度をしている間に慌しく下校してし
まった。

マイペースに身支度をしていたら、明るい声で再度教室に訪れ
たやなぎんに、私は首を傾げる。

「どうしたの」

「うん、ちよつとお話があつてさ。いいかな」

「かまわんけど……ん？ 昂君は？」

「昂は今日生徒会に顔出してゐるから、遅くなるんじゃない？」

「なんと。昂君は生徒会役員であつたか」

「いや、正式にじゃないけど。たまに手が回らなくなると泣きつか
れるんだ。生徒会の顧問から」

生徒会の顧問。私はまったく興味のない部分だったので、それが
誰かもわからずまたまた首を傾げた。

そんな様子にやなぎんが目を丸くする。

「野田っち、なんにも知らないんだね。ふたりって恋人なんじゃな

いの？」

後半部分は声を潜めて言った彼に、私はえ、と固まる。知ってたのか。

それと同時に、胸を抉られた。

何も知らない。私は、昴君のことを、なにひとつ。

「生徒会顧問てさ、佐藤先生なんだけど。平凡な苗字だから皆気付かないけど、昴のお父さんの弟さんなんだよ。つまり叔父さん」

「なんと」

「野田っち、反応が面白い」

豪快に笑って私の背中をぼんばんと叩く彼に、やはり先程傷付けられたとを考えてしまった発言も、気にならなくなる。無神経かもしれないが、それをも吹き飛ばす彼の屈託ない行動は、やはり人を惹きつける何かがたくさんある。

私は、げほ、とむせながらも、そうかね、と声をあげた。

「そうだ、話とは？あまり人前では話せないのならば部室へ行こうか」

「ん？ああ……いや、ここでいいよ。もうちょっと人が少なくなったら話そ？」

「？ かまわんけども……部室は嫌なの」

私が疑問符を浮かべた声をあげると、半ば呆れたようなため息を吐き出して、やなぎんは私の頭を軽く叩いた。痛くはないけど、なんなのだね。

「野田っち！簡単に密室で男とふたりきりになろうとしないの！」

めっ！とそんな声までおまけにくつつけられ、私は目を見開く。
だって、いや、そんな。君は、昴君の友達なのに。どうしてそんな風に、警戒せねばなるまい。

「まったく、昴があんだけ束縛しようとするのもわかるなあ。危なっかしくて見てられないよ。野田っちって、無意識に男の好意をへし折るタイプでしょ。そのくせ、遊び人には簡単に利用されちゃうの」

「……やなぎんまでなぜそんな難しい事を。大体、私はそうそう異性に好意を寄せられる人間ではないのだよ？何をどう警戒しろと？」

私の言葉にこれだよ、と肩を竦めるやなぎんが、今までの印象とは違い、おとなの男性のようんで、なんだか悔しい。私も、昴君やあかりや彼のように、皆が知っていて私の知らない理をわかりたい。どうやったら、もう一段階おとなになれるのだろうか。

「まあ、とにかく。無闇に男性とふたりきりになっちゃだめだよ？」
「了解した。でも、やなぎんの事は警戒しなくていいのでしょ？」
「……うん、いや、良いん、だけだね。俺もなー、まあ、言われなきゃわかんない程度には鈍いからさあ。初対面の際は本当ごめんね！あの時はまだ知らなくて」

知らなくてというのは、多分、一応、私と昴君が付き合っているという事実だろう。そういえば昴君が言っていた、あまり親しくするなという言葉の意味も、結局わからないままだ。

「あんまり野田っちと仲良くすると昴が嫉妬して大変なことになるし。俺も、あのあと超しめられたもん、昴に。珍しいよあいつ、他人にそう執着する人間でもないのに。愛されてるなー、野田っち」

話している間に教室には誰もいなくなったからか、やなぎんは声の調子を落とすことなく、笑う。

「というか、ん？」

「待ってください。」

「……やなぎん、どういう意味だね」

「？ なにが」

「嫉妬、とは」

「だからあ。俺と野田っちが仲良くなりすぎるのが嫌なんだよ、昂は。野田っちのこと愛しちゃってるから」

「そ、それは逆じゃないの？ ええと、なんというか、昔からの幼なじみを私に取られるのが嫌で」

「んなわけないじゃん！ 昂、俺の胸倉掴んでなんて言ったと思う？」

笑って、おいでおいで、とやなぎんが手を振る。私は、机を挟んでいたが出来る限り彼に顔を寄せると、秘密の話をするように、やなぎんが耳元でひっそりと囁いた。

「必要以上に千絵子に近付くな、少しでも触れたら殺すぞ」

その時。私は一瞬思考停止した。これはちよつと、糖分が必要だな。うん、そうだ。

「……ちよつと、甘いものが欲しいので」

「あ、俺飴持ってるよ、はいあげる」

む。

昂君といいやなぎんといい、私がココアもしくは甘いなにかを買いに行くのをよく阻止してくるな。しかしこれは、美味しそうなソーダ飴である。もらっておこう。

綺麗な水色のそれを口の中にころん、と放れば、中でしゅしゅわと弾けた。この刺激もまた格別。脳が覚醒しそうである。

にしても、昴君は、意味がわからん。想い人の胸倉掴んで、こころす、だど？なんと物騒な。しかもやなぎんの言葉が本当ならば、まるで。

私に、じゃなく、やなぎんに嫉妬してるみたいではないか。

そこまで考えて、必死でそれを振り払う。そんなはずがないのだから。

「…………やなぎん。件の相談事だが。一体何かね」

「あれ、見事に話題そらしたね。照れてるの？」

にやにや笑いながら言う彼に、いいから、と再度うながせば、今度は彼のほうが恥ずかしそうに少し頬を染めて、後頭部をかり、とひっかいた。

「うーん。その、さ、噂で、あかりちゃんて他校に彼氏がいるって話なんだけど、本当なのかな」

「ん？ああ。私はつつこんで訊いたことないけど、いると言っているからいるんじゃないかな」

しかし改めて問われて、考えたら私は彼氏とやらにそういえば一回もお目にかかったことがないと気が付いた。どころか、愚痴やらのろけやら、なんでもいいが彼の話題を耳にしたことすらない。

あれ。ひょっとして昴君の方便と同じで、あかりも断るのが面倒でそう触れ回っているだけなのだろうか。私も、もう少しきちんと訊いておけばよかっただろうか。少し自信がなくなってきた。

考え込む私に、やなぎんはそっか、と悲しそうな声でこぼす。

「？ やなぎん、もしかして」

「……あ、わかつちやう？」

えへ、と微笑む彼に、私は確信した。

「あかりが、好きなのか」

私の質問に首肯する彼に、私は思わずなんと、と呟いた。

第8話

ころころと、ソーダ味の飴が舌の上で転がるたび、しびれた。

その刺激に脳が反応する為か、私の思考は残念ながら停止するどころか稼働率がいつも以上に上がっている気がする。

先程の言葉をどんな角度から考えてみても、答えは同じ。実にシンプルなものだ。

私は、どうしたらいいだろう。いや、そもそも。彼のこれから話す内容が、予想できて怖い。そして、その予想が当たっていれば、なおのこと、怖い。

「……それで。具体的に、話っているのは」

少しかすれた自分の声が、情けない。その先は、訊きたくはなかったけれど、先送りにしたって仕方がない。私は無意識に歯を食いしばっていたらしい。

がり、と音がして、飴玉が口内で砕けた。

「うん、その。仲を取り持ってくれないか、とか極端な話ではなくてさ。ただ、知っておいてもらおっかなーって」

てつきりあれこれしてほしいという要求がくるのかと思ったら違うらしい。瞳を揺らして、やなぎんをみつめれば、彼は苦笑した。

「俺が嫌がるあかりちゃんに食い下がる理由はそういうことだから。少しでも免罪符にならないかなって思ってたさ。野田っちだって、面白がって友達に変な奴が付く纏ってるって思うよりずっといいかなって思ってた。まあ、ついでにちよっとでも応援してくれたら嬉しいけど」

えへへ、と笑う彼は、なんと好青年であろう。

私に、過度な情報を期待することもなく、ただ好きなのだと宣言をして。

人の気持ちに、鍵をかけることなど、できない。ましてや自分ではなく他人の気持ちを、どうにかしようなどとできるはずがない。そもそも、私にはわからなかった。

彼の恋が、成就するのか、破れるのか。

そのどちらが、幸せなのだろう。昴君に、とって。

あかりは？ 恋人がいるのだろうか。いないのだろうか。いなかったとして、やなぎんみたいな人間は苦手だと話していた。

私自身は、どうすればいいのだろうか、どうしたいのだろうか。

名残のソーダ味もそのうち完全に口の中から消えた頃、少し遠くから声が聞こえる。

「……野田っち？ 大丈夫？」

「！ あ、ああ。ちよつとびっくり。恋人の有無さえはつきりさせられなくてごめん。役立たずだな」

「いやいやいや！ そんな、情報得る為に今だって話してるわけじゃないし！ 俺個人としても、野田っちと色々話してみたかったんだ」

混乱する私の頭に、更なる言葉が重なり逆に先程の答えは先延ばしにしようと思えた。現時点で悩んでも仕方がない。悩むにしても、とりあえず帰宅してからでよいだろう。

切り替えて、私はやなぎんの言葉にどういう意味なのかと問うてみれば、彼はくすくすと笑い声をあげる。

なぜだろう。なにかを慈しむかのような優しさを感じた。

「昂ってさあ、なんていうのかな。けっこう女関係で色々苦勞してるんだよね、あの齡で。変な話、女性不信じゃないけど」

女性不信。

それは、昴君自身からも聞いた話だ。私は黙ってやなぎんの話に耳を傾ける。

「まあ、だからかなあ。ほら、俺との噂、知ってるでしょ？ 昴が俺の事好きでってやつ。野田っちは知ってると思うけどぜーんぶ嘘なわけ。でもそのまま放置してるのは、昴には好都合だからなんだよ」
「好都合……」

「うん。言い寄られるの面倒だからって。まーったく、モテない男たちからしたら嫌味だよなあ。でも、よかった」

「どうして？」

「異性にたいして、っていうか恋愛全般かな。にたいして、冷めるとこあったから。野田っちみたいな存在が昴にできて幼なじみの俺としては嬉しいかぎりなんですよ」

へへ、と笑いながら話すやなぎんの、優しい顔。私もついつい、笑顔になる。

しかし、嘘というのは、どういうことなのだろうか。

昴君は、ひょっとしてきちんとやなぎんに想いを伝えられていないのだろうか。それとも、やなぎんの言っていることは、真実なのか？

同性愛者だという可能性を幼なじみに隠しているという可能性だ。ってあるし、一方の言葉だけを信じるのは危険だが……。

でも、もしやなぎんの言葉が本当だとしたら。昴君は特に男性を好きなわけではないということになる。ということは、私は嘘をつかれていたと結論付けねばなるまい。しかし、女性不信だというのはどうやら本当のようだ。

考えてみれば、昴君と始めた恋人未満なこの関係はひどく不確かで、曖昧な部分が大きい。まるまる彼の言葉を信じてはいたし、垣

間見える表情も、真実だと思えていたけれど……。

嘘の部分と本当の部分。それはあるのかもしれない。

そして、まだ彼が話してくれていない秘密……。

ひよっとしたら、そんな真実が、隠れているのかもしれない、私はまでも俯いて考え込んでしまっていた。

「おおーい、野田っちー？大丈夫かー」

「……やなぎん」

私の顔を覗き込むやなぎんの顔を、私はきつと、情けない顔で見ているのだろう。目の前の人好きな性格の男は、どうしたの、と優しい声で訊いてくる。多少の困り顔で。

心がふにゃ、とやわらかくなって、私は気付けば口開いていた。

「昂君にとって、私って、なんなのかな……」

ぽつ、と呟いた私の言葉に、目を丸くしたやなぎんは、野田っち、と呟きながら私の頭に手を伸ばしてきた。恐らく、頭を撫でようとしてくれただけで、他意はない。しかし、彼の手が私に触れるか触れないかの距離感で、やなぎんの動きはぴたりと止まった。

「何やってるのかな」

穏やかそうでいて、しかし彼とある程度触れたことのある人間ならばわかる程度の不機嫌さを声色にのせながら、教室の出入り口で腕を組んだ昂君が真っ直ぐにこちらを見て声を上げた。

顔には、満面の笑みをたたえつつ。

どうした昂君、もう全体的に怖いぞ。

「昂。生徒会終わったの？」

「……なにしてた」

にこにこ笑いながら席を立つやなぎんを、今度こそ笑顔を消して昂君が睨みつける。

「あかりちゃんの事を話してただけだって。伝えたほうがいいかなと思って」

「そんなことはどうでもいい。千絵子に触るなって言わなかった？」

「おい、人の恋路をどうでもいいで片付けるなよ」

あまりの言いように、ふてくされたような顔と声色でやなぎんが言えば、こちらへと歩いてきた昂君がやなぎんを一瞥して低い声をあげる。目線は、そのままやなぎんを見ていてくれたらしいのに、なぜか私に移っていた。鋭い眼光で射抜かれるようにみつめられ、私はびくり、と身体を揺らしてしまう。

「失恋したらそれはお前の責任だろう。せいぜい頑張れ。……で？ 話してただけなのになんであんなに距離が近かったの、千絵子さん？」

しゃがんで、立っていた昂君が私の眼前にその顔を持ってくる。ものすごく近い距離感に戸惑い、私は視線をさまよわせる。

「そ、その、なんで近かったんだろう、ね？」

「……奏」

空転して思考がまわらない私は、あろうことかやなぎんに助けの意をこめて視線を投げたが、それが、彼が勝手に私に近付いたと解釈したのか、実際そうといえそうですが語弊がありすぎる表現である、やなぎんを睨みつけ、低い声で彼の名を呼んだ。

もちろん、予想外だったやなぎんは思い切り焦っている。

「ええ！？ち、違うって！なんか途中、ぼんやりと考え事しだしたみたいだったから心配になって！それこそ具合悪いのかなって思ったからちよつと顔色を見ようと」

「詰めたんだな、距離を」

「そうかもしれないけど」

「奏。言っておくけど二度目はないよ。千絵子に安易に触るな」

「……はい」

こわ、と呟いて、やなぎんはさっさと教室を出て行った。また明日ね、と私にひとつ微笑んで。

罪をなすりつけようとしたのは確かに申し訳なかったと思うが、この空気の中で置いていくとは、なんたる所業。やなぎん、戻ってきておくれ！

「……千絵子さんも。これはお仕置きが必要かな？」

にっこりと微笑んだ彼の言葉に、私は首を傾げる。しかし、呆ける時間はなかった。

強制的に腕を掴んで私を立ち上がらせると、昴君は無言で私を引っ張り歩きはじめる。無言の圧力が怖い。

「千絵子さん、ご両親、週末は出張だって言ってたね」

「ん？あ、ああ。父は昨日から、母は今日からだけど」

「帰りは？」

「ええーと、ふたりとも月曜だけど……？」

昨日そんな話を確かしたけれど、今どうしてそんなことを言うのだろうか。わからなくて私は首を傾げる。ちなみに今日は金曜日で

ある。そういえば、昴君のお弁当を作らなくてもいいんだ。家事は少し楽になるけれど、ちょっと寂しいのはなぜだろう。ひとりの食事が増えるからだろうか。

考えている間にも、昴君は歩を進めていく。とりあえず、我が家に向かっているというのは間違いないみたいである。

「あの、す、昴君」

「なに？」

「苛々してるのはお腹が減っているから」

「千絵子と一緒にしないでくれる？」

にっこりと微笑んで浴びせられた言葉は辛辣である。呼び捨てにも、だいぶ馴れてきた。

しかし一週間程経過して思うのだが、彼は物腰が柔らかいのと今とどちらが本来の彼なのだろう。とりあえず怖い。

話しかけると墓穴を掘りそうなので、私は家までの道程、固く口を閉ざしていた。

「千絵子さん。言ったよね、必要以上に仲良くするなって」

「？ 言っただけ」

「要約するとそういう事を僕は言ったでしょう」

呆れたような声をあげながら、昴君はため息を吐く。リビングのソファで、まず私が着替える為に二階へあがろうとしたのだけれど、昴君に止められてしまったので、仕方なく制服のまま隣り合って座っている。

しかし今更であるが、親が居ぬ間に彼氏を連れ込むとはなんというあばずれなのだろうか。親は、そういうことに特別きびしいわけでもないようだが、隠れて何かするのを嫌うし、昴君の存在は近いうちに話さなければならぬかもしれない。

「……昂君」

「何?……っていうか、僕の話をちゃんと聞いてくれた?」

「いや、そもそも昂君はどういうつもりなのかよおわからん。まさかやなぎんに嫉妬してるわけでもないでしょうに。やなぎんが私に触ると何か不都合でも」

「そうだよ」

「え?」

「だから、そうだってば」

ぽかん、と私が口を開いて彼をみつめていると、昂君は獰猛な肉食獣のような双眸で、私を射抜く。

彼の唇が、私に咬みつく前に、囁いた。

「たとえば奏であろうと、俺の千絵子に俺以外の男が触れるなんてゆるさない」

「む……!?!?」

塞がれた唇の熱さに、激しさに、私は驚いた。

呼吸さえも奪うようなその行為に、頭がくらくらする。唇を開く前に強引に舌をねじこまれ、性急に吸われる。根っこからもぎとられてしまうかと思っただけ、執拗な責めだった。

ぴちゃ、といやらしい水音が耳に届くと、羞恥と同時に快楽が身体全体に流れ込むようで、そんな自分が嫌だと思ふ半面、こんな風に私を誘う昂君を詰りたくなる。もちろん、そんな感情が一時過ぎるだけで、私は結局はこういった事を許してしまっているんだと思うのだけだ。

しばらく、私がいっぱいいっぱいになるまで、昂君はあれやこれやをお仕置きと称して私に施した。しかし後半から、これはどうい

った意味合いがあるのだろうか、と問いたくなるものまであって、そんな彼を少し責めるように見つめれば、にっこりと微笑んで昂君は言う。

「千絵子は今、誰の恋人なのかな？」

不服ではあるけれど、仮をなるべくなくそう、という彼の言葉にうなずいたのは事実で、私はそれもわかっていながら不承不承でも昂君だ、と答えてみせる。昂君はその言葉に満足そうではあったけれど、私の態度が気に入らないのか、続行、と言ってお仕置きなるものを再開した。

やがて脳が正常に機能しなくなり、わけのわからない疲労感が襲ってくる、遠くからそれでいいんだよ、と声が響いてくる。

一体、何が良いというのだろう。

意識は朦朧としているし、目の前に誰がいるのかもだんだんわからなくなってきた、今ここで私に触れているのは誰なのだけ、と考えてしまう。

思考が空転してくると、しかしすかさず昂君が僕を見て、と言うから、かろうじて私は忘れずに済んでいる状態なのだけ。

「それでいい。僕だけを見て、認識して」

今、君に触れているのは誰。

昂君。

小さく、呟くように、返答する。昂君はにっこりと微笑む。

ああ、そろそろ限界みたいだ。意識が遠のいてくる。

「……千絵子さん、君は僕の恋人なんだ。いいことから、忘れちゃだめだよ」

微笑む彼の声に、無意識にゆっくりと頷いて、私はそのまま意識を手放した。

第9話

頭がふわふわしてるのはなぜであろう。

気のせいでなければ、激しい空腹感が私を襲っている。けれども意識を浮上させたくないのは、私がこのあたたかい温もりから自身を引き剥がしたくないからだろうか。

とても、心地よい眠り。ああ、でも、どうしよう。

「はらへった……」

ぶは。

すぐ傍で激しく空気を吐き出す音が聞こえて、私は目をぱちりと開く。

しばらくはぼんやりとしていたけれど、やがてははっきりしてきた感覚に、私は目を見開いた。

目の前に、昴君の、顔？

驚きに固まる私を知ってか知らずか、昴君は私を覗き込み、にっこりと微笑んだ。

「おはよう。けっこう長く眠ってたね」

「……え？」

「ああ、おぼえてない？」

「いや、おぼえてるので言わなくていい。今何時ですか」

即答してさえぎれば、ぶは、と先程聞こえたのと同じ音。ああ、あれは昴君の笑い声だったんですね。

というか。

今気付いたけれど、この状態。もしかしくとも昴君にソファの上で膝枕してもらってる状態ですね。しかもなんか頭をずっと撫で

られております。やめてください、心地よいです。

「ええと……19時くらいかな。けっこう眠ってたね」
「なんと！」

どうりで腹減りなわけである。私の腹が轟音をあげたとて仕方あるまい。

ゆっくりと身体を起こそうとすると、昂君が素早く背中を支えてくれた。かたじけない。って声には出さないけれどね。こうなった原因はあなたですしね。

「ご飯、簡単なものでいい？食べていくでしょう？」

「え、いいよこんなときまで！」

「どっちにしろ私はお腹減ってるから食べるし」

ふらり、と面倒なので制服姿のままエプロンを付ける。冷蔵庫を開くと、昨日の残りの肉じゃががある。ふむ。

「昂君、ええと……あったあった。これを、木っ端微塵にしてくれるかい」

す、と私が台所下の収納からみじん切りを簡単に出来る優れものな機械を取り出すと、昂君は一瞬固まって、え？と戸惑いの声をあげる。

「これは……ええと、コンセントつけて……」

「カッターは装着してから食材を入れてね。じゃないと混ぜられないから」

「は、はい」

神妙な顔つきで返事をする昴君は、相変わらず料理中はすっかり謙虚な生徒だ。恐らく今までやってこなかっただけで、料理自体は決して下手ではなからう。

たまに、なぜか無茶苦茶な味付けをしたり、斬新さばかりを求めて食べ物をおもちゃにするような方はいるけれど、昴君はそれに該当しない。きちんと基本の調味料を覚えて、どれをどう加えればどのような味になるか。それらを勉強している最中だ。

今日みたいに料理を楽しむ道具はあまり、というかやはり使った事がないのだろう。

恐る恐る、昨日残った肉じゃがを機械の中に投入していた。その様子はどこか可愛くて、ちょっと笑ってしまいそうになる。

「スイッチはね、こう、蓋をぎゅ、と押し込めば刃が回るようになってるから。お願いします」

「どのくらいやればいい？」

「うーん、みじん切りくらいになればいいかな。やりすぎちゃってもいいよ。食感あまりしなくなるかもしれないけど、まずはならないし」

にっこりと微笑んだ私の顔に、わかった、と頷いて、昴君はごくり、と唾を飲み込んだ。

なんだか、作業中の自分も緊張してくる。

彼がやっている間に卵をといて、青葱を刻む。本当なら副菜も作りたいところだけど、まだ身体がだるい。私は豆腐とわかめのみそ汁だけ作る事に決めた。

高速で何かが回転するモーターのような音が響く。たまに何かか詰まったような音。まあ、そのまま肉じゃが細かく粉碎しているわけだから、時々はそうなるであろうな。

「このくらい？」

何度も押して離してを繰り返しつつ、慎重に肉じゃがを粉微塵に
していった昴君からたずねられる。蓋を開いて中身を確認すれば、
うむ、と頷いた。

「いい塩梅。じゃあ昴君にはおみそ汁任そうかな。豆腐とわかめは
切っておいたから、はい」

その言葉に何を思ったのか、昴君はまたも真剣な表情ではい、と
答える。なんで料理中はいつもこういった反応なのだろう。まるで
自分が鬼教官のように思えてくるのではないか。

真剣な面持ちで小鍋に水を入れ火にかける彼を横目でみつつ、私
はフライパンを熱する。本当は、卵って泡立てないほうが良いらし
いのだけれど、私はどうしてもふわふわなのが好きなので形が崩れ
てもとにかくふわふわにしたい人間なのである。

粉碎した肉じゃがを軽く炒めて、さっとお皿にあげる。刻んだ葱
はそのままパラパラとそこに散らす。で、溶き卵で肉じゃがを包む
薄焼き卵を作れば完成なんだけど、よく失敗する私はちょっとスク
ランブルエッグっぽく形を崩して上にのつける。そうすると形を保
つ為についつい火を通しすぎかたくなるのを防げるから。どうして
もふわふわ食感がほしいのです！

「……って昴君。一応言っておくけれども、君それは味噌を入れす
ぎじゃないのかね」

「え、そうなの？」

お玉めいっぱい味噌を掬った彼を見て多少狼狽したが、慌てて
止めるには今私は忙しい。うむ、まずはひとつ、卵が完成した。

お皿に盛りつつ、そうだよ、と声をあげる。

「そもそもだし入れなさいよ。ほれ、ここに和風だしがあるでしよう。粉だからといって馬鹿にしちゃいかんよ。無論、きちんとだしをとるほうが美味しいがこれだって日々食すのにはじゅうぶん」
「わかったから、とりあえず手順教えてほしいんだけど」

む。話をさえぎられた。

そういえばあまり詳細を話さずよろしく、と言ってそのまま彼に渡してしまったが、みそ汁くらいいくらなんでも作れるであろうというのは私の中の常識であり、彼にとっては常識ではない。

その事実をすっかり忘れ、私はちらと彼が持つ鍋の中身を見やる。もうすでに具材がぷかりと浮かんでいるではないか。なんと。手順がめちゃくちゃである。

豆腐はどのタイミングでもまあ問題はない、私は沸騰する前に味噌溶かしてその後入れる派であるが、が、しかしわかめは別である。火を通しすぎるとろん、と力をなくしたわかめが猛威をふるい、みそ汁ならぬ美味しい青汁になってしまう。

「もっときちんと教えればよかったね、ごめん」

言って、私は次に作る時にはわかめは最後に入れるようにしてくれと説明し、手順を教える。まあ、多少てろんとしてしまっても豆腐とわかめのみそ汁はそうそう不味くはならない。辛くなってしまうたらお湯を足せばいい。ということで、適量も教え、再度彼にうながす。

緊張した面持ちで完成させたのはなんの変哲もない、それこそ小さい子でも作れるような一品ではあったが、最終的にちょうどいい塩加減のみそ汁が出来上がって、昴君は大変うれしそうであった。

そんな彼の顔を見ると、ほんわか温かい何かが流れ込んでくるのはなぜだろう。首を傾げながらも、次には出来上がったオムレットとみそ汁を早く食べたくてそればかりに意識がいった。やはり空

腹はいかん。

「千絵子さん、また色々料理教えてね」

「かまわないけど。どうしてそんなに料理作りたいの？」

「将来的に千絵子さんと結婚できる確率が増えるから」

「は!？」

驚いて昴君が洗って更に拭いてくれた食器を棚にしまうコップを落としてしまった。

食器棚はダイニングテーブルのすぐ近くなので、幸い床に落ちて割る事態は避けられたが、冗談にびっくりするなんて情けない。

「大丈夫？」

「あ、はははは」

何を誤魔化しているのかわからない笑いに、昴君は不思議そうに首を傾げた。

「ねえ、千絵子さん。今度、ご両親にあいさつさせてくれないかな」
「! 昴君」

晩ごはんを食べ終わり、時刻は21時をまわったところ。そろそろ帰ろうとソファから立ち上がった昴君に、駅まで送ると言ったが家の前まででいいと断られた。彼とわかれてから我が家までの私の帰り道が心配なのだそうだ。

なんともいえない女の子扱いに、体がうずうずしてしまう。そういえば前もそうだったな。恋人というのは、こういうものなのか。ああ、頬が赤くなっていないだろうか。

「それで、いいかな? さっきの話。彼氏として僕のこと、紹介して

くれる？」

「え、あ、ああ！いいよ！」

ぼんやりと考え事をしていたせいか、咄嗟につい是と返答してしまふ。

てちよつとまった。

「よかった。それじゃあ、また月曜日に」

微笑んで、昴君が玄関扉を開く。閉じられたその音が耳に届いた時、固まっていた思考がようやくほどけた。

いや、ちよつと。確かに、少し前思ったさ。昴君のこと、両親に言うべきだと。けれどそれは、その。彼氏です、とか、そういうことではなく。

「そもそもだね、両親に恋人ができたって報告するってのはだよ」

無意識に私の手は冷蔵庫を開く。取り出したのは一枚の板チョコである。

包丁とまな板を用意し、チョコレートの包みを剥がした。

ざく、とチョコに刃が突き刺さる音が響く。

「そういう、なんだ、その、あれだ」

ざくざくと音が響いて、気付けばチョコレートは綺麗に碎かれていた。

再度冷蔵庫を開き、牛乳を取り出す。閉めた音が若干勢いがあったのは、今の私が極端に力加減がへたになったからだ。

「公認の、仲って言うに変な、あれだけでも！あれなのか！」

鍋に牛乳を注ぎ、火をつける。換気扇も忘れずにまわした。火加減は弱火。

「あああもう！どういうこった！！」

ついでにみつけた香り付け用に買ったブレンダーの小瓶も取り出して、たらす。ざざざ、と刻んだチョコレートを勢い良く流し込んだ。

「昴君は！私と恋人なんじゃなからうて！仮って付くはずじゃないのか！」

ぐるぐるとかきまぜる。泡だて器を使っているからか、がしやがしやと音が鳴ってうるさい。

「あああああもう！わからんわからんわからん！」

かち、とスイッチを押して火を止めれば、用意していたマグカップに出来上がった液体を注ぎ込んだ。簡単な後片付けを済ませれば、火傷しそうなほど熱いホットチョコレートは飲み頃の温かさだ。

ソファに座って、一口啜る。

ほう、と自身の口から吐息がもれた。

「……本当に、これから先も付き合いを継続させるつもりなの？」

だとしたら、私は、君を。

過ぎった言葉の意味に気が付いて、私は身体を硬直させる。

今、何を思ったのだ、私は。いかん、糖分を多量に摂取しすぎたか！焦りつつ中身を飲み干したマグカップを洗ってから、私は風呂

に入る準備をしようとリビングをあとにした。

次の日の朝、起こされた原因は誰かからの着信によるものだった。まだ開いていない目をそのままに、必死で身体を動かせば、ベッドの先にある机へと手を伸ばす。がちゃん。おっと、いかん、電話が落ちた。

落下した携帯電話を拾い上げ、私は薄目で通話ボタンを押した。

「……どちらさまですか」

『画面に表示されてるでしょう』

くすくすと笑いながら言われて、私はそういえばそうか、と気が付いた。

いったん耳から携帯電話を離し、表示されている着信者の名前を確認する。そこには「佐藤昂」とあった。
あれ？

「……もしかしくとも昂君」

『そうだね、おはよう。まだ寝てた？意外だなあ、休日も起きるの早いのかと思ってた』

「私はものすごく寝るのが好きだからね、休日は12時間寝てもかまわなくらいだ」

『それ、寝すぎじゃないかな。もう11時だけど、昨日は何時に寝たの？』

昂君の言葉に、まだ半分ぼんやりしている頭で考える。昨日？昨日はー、何時だったろう。

「あーと……飲んでから風呂入って、髪乾かしつつ洗濯機まわして干して……ああ、日付変更後くらいかな」

『……もう12時間近く寝てるじゃない』

「そうだね、特に問題ない」

『……うん、まあいいや。ね、今日ひま？』

暇かと問われて、暇ですよと答えるのもどこか癪だが、私は本当に予定がないので暇だと答えると、昴君が電話口でじゃあさ、と続ける。

『外で会わない？ちょうどお昼時だし。ごはんいっしょに食べようよ』

「……支度に恐らく30分はかかるが」

『逆に30分で終わるのすごいよ。一時間とか言われるのかと』

「一時間も自分に時間をかけるほど私は人間ができていない」

『寝起きも面白いね千絵子さん』

声をあげて笑われたところで、やっと意識が本当に覚醒してきた。あれ、ひょっとしてこれは、休日に遊ぼうと誘われたのかな。

『じゃあ、一時間後にY駅で待ちあわせしよう。それでいい？』

「え、あ、ああ。大丈夫、だけれども」

『ふふ、初デートだね。あんまり焦って支度しないようにね、僕は待ったって怒らないから』

それじゃあ、と言って電話が切れる。

私は呆然と電話をみつめていたが、数秒後にはやがて意識を取り戻した。昨日の玄関先といい、なにやら昴君は隙について狙っているように思えてならない。

というか。

「……デートって、普通ならばどういう格好で行くのさ」

呟いた声の調子は、自分で発したわけであるがあまりにも情けなかった。

第10話

『はあ？』

不機嫌な声が耳元から響いて、私は目の前にその声を発している主がいるわけでもないのに縮こまる。自分でも、そういった反応をされる質問をしている自覚があるだけになんともいえない気分だ。しかし現状、糖分を摂取したところで答えが出ないのだから仕方がない。

「だから……普通、恋人同士が出かける時、女性はこういった格好をするものなのかと」

『初デートなの？』

「……………まあ」

あかりの質問に居た堪れない思いをしつつも、是と返答する。

数秒の沈黙が異様に長く感じられ、私は暴れたくなったが、実行に移す前に友人が簡潔に言った。

『そんなもん、足さえ出しときゃいいのよ』

足、とな。

「……それはつまり、着丈が短いものを履けということ？」

『そうね』

「スカートはこの時期寒いのでは」

『じゃあパンツでいいんじゃない』

「しかし短いズボンでも寒いのでは」

『ブーツあわせればいいでしょ』

ああ、なるほど。

その言葉を私が発したと同時に、ぶつり、と電話が途絶えた。なんともあかりらしいと思ったが、答えてくれた事には変わらないので、携帯電話を置き、正座して深々と頭を下げてみた。ありがとうございました、という意を込めて。

まあ、本人に見えないのだからまったくもって意味のない行為であるとはわかってはいたが。

着るものがある程度決まれば、それに該当する服装のものをクローゼットから出すだけだが……どうしたものか。

少し悩んで、いつだか買ったかぼちゃパンツのようなデザインのものをつ張り出す。色は赤と緑のチェック柄だ。これは太腿あたりまでしか着丈がないから、かなり短い部類だろう。上は……とりあえずセーターで良いだろうか。

ごそごそと探して、割とシンプルな灰色のセーターにした。全体的に身体の線にぴったりくっつくデザインだが、タートルネックがちょっと苦手な私は、首元だけがだぶついてるものを好んで買う。これもそういうものだ。一応中にキャミソールも一枚着ておこう。

外気温からいって、コートを取り出すほどでもないんだよな。マフラーは、まだそんな苦手ではないけれど、意識するとふとしたときに喉が詰まってしまう、と声をあげる。あの、うえ、と声をあげる瞬間が嫌なので、今日のような中途半端な寒さでは巻きたくはない。またも少し悩んで、ポンチヨがあつたことを思い出した。柄はちよつと牧羊民族の方が着そうなものだ。色は白で、柄部分が暗い青。パツと見は紺だけど、紺よりも少し青に近い。前に丸まったふたつの毛糸玉のようなものがぶらさがってるのだけれど、これの正式名称はわからない。とりあえず、この形を見ているとアメリカンクラッカーによく似ているというも思う。

ポンチヨは、木で出来た茶のボタンをみつつ留めて着る。

戸締りの確認、荷物の確認をし、玄関の靴箱にて目当てのブーツ

を探す。靴下はいつも着用している慣れ親しんだハイソックスにしたが、これで良かったろうか。まあ、ブーツを履いてしまえば隠れてしまうのでいいか。

ごそごそと探して、目当てのものをみつけた。

黒いブーツはふくらはぎあたりまでの長さのものだ。素材が面白くて気に入っている。なんの変哲もないものなのだが、上部分に切り返しのようにニット素材がくつついているのだ。ちょうど、ファーなんかをあしらったブーツがあるが、あれのファーの部分がニットになっている。ニット部分は灰色なので、セーターとおそろいの色。

一応玄関の姿見でなるべく客観的に自身をみつめてみる。若干足が寒そうではあるが、おかしな格好ではない。と思いたい。

ふむ、と一度頷いて、私は決心して玄関扉を開けた。いざゆかん。携帯電話で時刻を確認。今から駅まで歩いて電車に乗れば、10分前には到着できる。遅刻ではい事に安堵しつつ、髪型はまるで気にしていなかったがこのままで良かったのか？と一瞬過ぎった。

まあ、ちゃんと寝癖は直したわけだしいいか。

待ち合わせ場所には、もうすでに昴君が立っていた。遠くからでもスタイルが良い彼は目立つ。格好もなんというか、妙に垢抜けている気がしてしまうのはなぜであろう。

黒いカーディガンに、普通のシャツだし、パンツもちょっとお洒落な型ではあるっぽいけれど普通の灰色のパンツ。

特別気取らなくとも格好良く映ってしまう人が、本当のすごい人なのだろう。

うなずきつつ、私は彼に近寄る。

「昴君」

手を挙げて声をかければ、反応して昴君がこちらへと顔を向けた。

彼のただでさえおおきい瞳が驚愕で見開かれ、さらに大きくなった。
どうしたのだ。

わからなくて首を傾げると、昴君がぼつり、と呟いた。

「……早いね」

「早いのは昴君じゃないのかね」

「いや、だって。本当に時間通り来るとは思わなかった」

「なぜ？」

「一時間後ってさすがに無理あったでしょ。余裕が全然ないし」

「だったらもっと遅くに設定すれば良かったのでは」

「わがままかもしれないけど、早く会いたかったから」

急いで転んだりしてほしくはなかったけど、急いでほしかった。

そのぶん、早く会えるから。

そう答えた昴君の顔が、赤くて。瞳も潤んでいて。

正直、どこの乙女ですか、と心の中で思ってしまった。あと恥ずかしい。私にそんな価値ないと思うのだけれど、というかその発言は本当にどういう意味なのだろう。

昨日から、いや、彼が付き合ってくれたと言ったあときから、私は混乱の極みだ。

「……昴君？」

「え？」

え、じゃない。私の問いかけの理由をわかっているくせに、すつとぼけないでほしい。

なぜそんなにじろじろ見るんだ。穴が開くじゃないか！

この格好、何かおかしいだろうか。急激に不安になって、私は自身の身体にあちこち視線をさまよわせる。

しかし、次の瞬間。

私の左手に、温かいぬくもりが伝わってくる。

「かわいい」

「！ あ、あの」

「私服、そういうの着るんだ。かわいい」

満面の笑みで言われて、私は先程とは違った理由で焦りを覚える。なんだか、頬に熱が集まっている気がするし、昴君と繋がれた私の左手は、汗をかいていないだろうか。

振りほどきたくもなかったが、それは彼に悪い気がして、なんとか耐える。

そんないっぱいいっぱいの私を、その態度で察しているはずなのに、昴君は更に私の耳元まで唇を寄せれば、囁いた。

「僕の為に着てくれたと思うと、よりいっそうかわいい」

艶っぽいその声に、中心がどくん、と鳴った。

ありがとう、と言った声は、かすれてはいなかったろうか。

昨日から、私の中でなにかがたちを変えてしまった気がしてならない。けれども、その正体がわからなかった。

ぼんやりと考えている間にも、昴君は普段の調子で話しかけてくる。

「お昼、何を食べたい？」

「……美味しければなんでもかまわない」

私の言葉に、千絵子さんらしいと言って彼が微笑んだ。

「あそこのビルの二階、知ってる？ パンが食べ放題のお店あるんだ。焼きたてのパンがどんどん足されていくから、食べ放題なのにひと

つひとつが美味しいって評判なんだよ。メイン料理はハンバーグが多いかな。好き？」

「私は好き嫌いが無い。昴君のおすすめならば、是非行ってみたい」「よかった」

手をひかれて、歩き出す。

繋がったそれを、離れたくないと思ったのはなぜだろう。空腹だからか、やはり答えはわからなかった。

「千絵子さん、良い食べっぷりだったね」

からからと笑う昴君に、私はそういう場面ではなかうとわかってはいたが胸を張って答える。

「当然美味しいものは気の済むまでいただくに決まっているよ。いっこいっこがけっこう小さかったし、さくさくしたのとかもちもちしたのとか色々あって非常にうまかった！昴君、ありがとう。大満足のお昼ご飯だったよ」

ちよつと苦しいけど。

そう言えば、昴君はくすくすと笑いながらどこかで休憩する？と提案してくれたけれど、私は首を振った。

「しばらく歩けば消化される。せっかくだからその通り歩いていこうよ」

「地元民には定番コースだよ、ここ」

「そうだねえ。たいがいショッピングモールの所まで歩いて向かうよね」

「調べたらちょうどいい時間に上映する映画あるんだよ。せっかくだから観ない？」

ここの通りは、割とこらへんに住んでいるひとたちからすれば有名な場所で、色々な雑貨屋だったり飲食店だったり洋服屋だったりが並んでいる。それを抜けた先にあるゴールが、巨大なショッピングモールなのだ。その中には映画館もあって、休日は学生以外にも訪れる事が多い。

映画か。そういえば最近観ていないな。

「どんな内容？」

「えーとね……確かコメディだったかなあ」

話しながら歩いていると、前方からすれ違う人とぶつかりそうになる。おっと危ない。思った時には、もう昴君に肩を抱かれていた。かばうように引き寄せられて、私はそんな風にあつかわれるのは慣れていなくて、慌ててしまう。

「大丈夫？はぐれちゃうといけないね」

お店を出た時は離されていた手を、昴君はそう言って再度握ってくる。自然な成り行きといえば、そうなのかもしれないけれど。

「……」

「？ 千絵子さん」

どきどきしているのは、私だけなのかな。
そう思うと、少しだけ哀しくなるのは、なぜなのだろう。

「千絵子」

「！ え、あ、なに？」

「映画。あんまりのんびりしていると始まっちゃうから、いこっか」

「……うん」

微笑む昴君に、私も笑みを返す。2人並んで、仲良く通りを歩く。私たちはきつと、外からみれば恋人にみえるのだろうか。ん？いや、わからないか。兄妹に見えるかも。でも兄妹って手を繋ぐものかな。仲良しならば繋ぐかも……わからないな。

いや、まあいい。そこは、あまり深く考えないようにして。

もしも。私たちが、なんの問題もない恋人たちに見えたとしたら。好き合っている仲の良い男女に見えるのならば。

こないびつな事はないよね、昴君。

珍しく皮肉っぽい思考を浮かべながら、私は傍観者のように彼の隣を歩いていた。

映画は、ラブコメっぽいものだった。高校生の2人が、出会って、少しの山やら谷やらがあって、両想いになっていくまでのお話。

主役の女の子がなんともいえずにクールで、冷静すぎるその思考に苦笑する。あそこまで割り切って自身や相手を分析できたなら、どんなに楽だろうか。けれども相手役の男の子は大変そうだ。あそこまで隙がない彼女を、しかし最後は溺愛という名の力技で押しきってしまった。

放課後の人が行き交う校門でのキスシーン。きつと付き合っている男女で観に来た人々は、それぞれの想いをこの映画に投影させてながめているに違いない。

楽しかった映画が、その瞬間つまらないものに思えて、私は多少冷めた目でスクリーンをながめる。

しかし、次の瞬間、突如見えなくなった画面に声を上げそうになった。なんということはない。視界を塞がれたのだ。

眼前にあらわれたのは昴君の綺麗な顔。触れた柔らかいものは、彼の唇。

「……なぜ」

キスをされた理由がわからなくて問うてみる。
無言で体勢を戻した昴君の顔は、暗闇ではっきりとはわからなかったけれど、笑っているようだった。

「けっこう面白かったね」

「そうだね。……あの、昴君、さすがに映画代は私が」

「いいよ！本当は千絵子さんの分も払うつもりだったのに」

外に出て、発した私の第一声に昴君は唇を尖らせる。

結局、お昼代を出してもらってしまったので、私はせめて映画代を2人分払いたいと申し出たのだけれど、却下されてしまった。

なんとか食い下がって自分のぶんは払えたのだけれど、どっちにしろ昴君にお金を使わせてしまったのには変わらない。

「僕が誘った初デートだよ？費用を出すのは当然じゃないか」

「それは違う。断らなかったのは私なんだから。なにより今日一日楽しかった。ならば私だって同じ程度の負担をおってしかるべきだ」

私が睨みつけるようにそう言うと、昴君は頑固だなあ、と呆れる。

「わかった。じゃあ、晩ごはんは千絵子さんがごちそうして？」

「おお、いいとも」

「ただし、手作りのね」

「！それじゃいつもとかわらない」

「いいのー。大体、いつも千絵子さんがごはん作ってくれてるじゃない。そのお礼だと思ってよ。異論は聞かない。さ、行こう」

「昴君」

「行こう？」

微笑む彼の顔を睨みつけても、無駄だとわかった。頑固だと先程言われたが、それは彼もいっしょだ。

なんとなく。

なんとなくだけれど、今日はこれ以上いっしょにいたくないと思った。家で2人きりだなんて、なおさら。でも、そんなこと、いま彼に言えるはずがない。私は、晩ごはんをごちそうするとつい数秒前に口にしたのだから。

ため息を吐いて、昂君の手を取る。

満足そうに笑う彼の顔を視界に留めれば、私は負けた気分がして悔しかった。

第11話

頭の中で、何を作ろうと考えていれば、もう我が家に到着していた。

慣れた様子で玄関から敷地内へと入っていく彼がなんとなく嫌で、私は少し目を逸らしつつ、脱ぎにくいブーツに手をかける。覚悟したよりは易しく事は運び、私はそんなに待たせずに昴君を招き入れることができた。

「着替えてくるから、リビング座ってて」

そう告げて、二階へと上がろうとすれば、腕を引かれる。

何故なのかわからないが、ぐいぐいとリビングへ押し入られて、私は昴君と並んでソファに座らされていた。一体なんだというのか。

「……足」

「？ 足」

「どうしてこんな短い履いたの？」

どうしても言われても。足を出せと言われたからそうしたのだが、昴君にはしないほうが良かったのだろうか。わからなくて私は眉を下げる。

その私の表情を見たからなのか、少し不機嫌そうにしていた昴君の声は軟化して、厳しい顔もいくぶんかやわらいだ。

「視界に入るたび、気になっちゃって。……僕という時以外は、あまり露出の多い服を着ないで」

元々、あまり肌を見せるのは好きではないのでそれはかまわない

のであるが、昂君の発言の意味をはかりかねた私は素直にどうして、と訊ねてみる。

なんだ。

昂君は呆れた様子でため息をついた。

「……男性に声をかけられやすくなっちゃうでしょう」

「そういうものなのかい」

「そうだよ」

「普段あまりこういう格好をしないから知らなんだ。そうか、わかった」

そうか、たとえ特別に可愛くはなくとも、露出していればなにかしらの期待感は煽るものなのかもしれない。そう考えれば幾分か納得できる。……しかし、そんな普通の男性心理のようなものを、昂君はどうして理解しているのだろう。彼は本当によくわからない。考え込んでいたからなのか、昂君の顔が迫っているのに気付かず、真正面をむいてぼんやりしていた。名前を呼ばれて振り向いた時には、鼻と鼻が擦れるんじゃないかというくらい、私と彼の距離感がおかしかった。

多少顔が引き攣ってしまったのも、この際仕方あるまい。

少しかたい声で、私は彼の名を呼ぶ。すると、昂君はにっこり微笑んだ。

「普段は着ないのに今日は着たの？」

「うん……今日のこれも普段なら下にストッキングとかレギンスとか合わせるんだけど。なんか、とにかく足を出しておけて」

「ひょっとしなくてもその発言をしたのは横田さん」

「大当たりー」

えへら、と笑って言えば、昂君は少し前と同じような不機嫌顔に

なる。しまった、選択を間違えたか。神妙にそうなんだ……と情感たっぷりに言っておくべきだったか、ここは。

いや、それもおかしいだろう。

「デート中気になって仕方なかった、綺麗な足だなあって」
「え」

きれい。

ひとつの単語に、どきりとする。昴君も、何かを綺麗だと感じるのか。いや、当たり前か、人間なのだから。動く感情があれば、そんなの当たり前を抱くだろう。

でも、なんでだろう。

無機物にたいして綺麗だと言う彼を想像できても、人に対して、綺麗だ、と発言する彼を想像できなかった。だって、彼こそ綺麗で、彼こそ綺麗だと言われる存在だから。

そんな昴君が、どうして、私を綺麗だなんて言うんだろう。私の足だろうと、私の一部であることにかわりはない。

どうしてだか、それは私にとって特別なものであったようであらずくと、胸の奥で何かがうずく。わからない、不確かな、なにかが。

「……ハイソックス履いてたんだね。制服のスカートと、長さは変わらないかもしれないけど……ズボンだから形がこっちのがわかりやすい。あとやっぱり見える面積こっちのが多いのかなあ」

言って、太股に触れる昴君の指先が、なぜだか、よこしまな意思を持って動いている気がしてしまう。

気のせい、かな。自意識過剰？

少し狼狽しつつも、成り行きに身を任せていると、足を眺めていた昴君が、私を視線で射抜いた。

突然に目が合ってしまった、肩が揺れる。

どうしてそんな、怖い目でこっちを見るんだ。なんというのか、ぎらぎらしている、ように、見える。

思わず溜まった唾液を嚙下すると、昴君は無表情だった顔に満面の笑みを湛える。

「晩ごはん以外にも、お礼もらっていい？」

「へ……」

言った意味を理解する前に、昴君がなぜかソファから降りて私の正面に座り込む。どうして床に座り込むんだろう。というか、何、その体勢。

跪いてるみたいなんだけど。

疑問符を頭いっぱい浮かべた私を他所に、昴君は私の右足を軽く持ち上げると、馴れた手つきでするりとハイソックスを脱がす。それは左足も同じで、私はものの数秒で素足になった。単純に寒い。

「あの」

名前を呼ぼうとして、彼の行為に思考が停止した。

え。

今、今。いまいまいま！

気のせいでなければ、あの、昴君のく、唇が、私の足の、ゆ、指先に。

「綺麗」

「ひっ!?!」

足の指にキスされたあああああ!?!?

「や、やめて、汚い！」

「汚くないよ、綺麗」

「ななななにをやめてやめて本当にやめて！」

更に近付いて何か続きをしようとする昴君にパニックになった私は、あらん限りの力で暴れまくったのがいけなかったのだろう。ぎゃあぎゃあと呼び声をあげながら、遠ざかろうとソファから離れたそのときだ。

肘掛けからずり、と身体をのけぞらせて、私は真っ白になった。まさにパニックから我に返った瞬間、というやつだ。

「千絵子！」

昴君の声が遠くから聞こえる。

そのまま思い切り頭をぶつける、と覚悟した私はなんと。頭をぶつけてもいないのに、そのまま意識を手離してしまったのだった。実際には、すんでのところで昴君がしっかりと身体を支えてくれていたから、大事なかったのだけれど、とにかく混乱の極みだった私は、逃避もあって気絶してしまったのだろう。

「……ちよっとからかいすぎたな」

呟いた昴君の言葉に、今の私は何も答えられないけれど。後々の私には質問できただろう。

あるとき本当に冗談のつもりだったのかい、と。

ぐう。

耳に届いた意地汚い音に私はゆるゆると目を開いた。

「……お腹へった」

第一声をいいかげんなんとかしたいけれど、すいてるのだから仕方がない。

私は混濁する記憶をゆつくりとたぐりよせながら、瞳を開く。

「千絵ちゃん、お母さん久しぶりに炒飯作ったんだけど食べる？
わかめスープ付きよー」

「食べるう……」

「着替えてからにする？そのまま食べる？」

「んー……足寒いから着替えてくる」

「じゃあ温めておくわね」

「かたじけない……」

お母さんにお礼を言って、私はリビングのソファから起き上がり、ゆつくりと歩いて扉に手をかける。
っておい。

「！？ 母よ」

「なあに千絵ちゃん」

「なぜいるのだね」

「えー、お母さんお家に帰ってきちゃいけないの？寂しい事言うのね、千絵ちゃん」

「いやいやいやそういうことではなく！」

記憶違いでなければ父も母も出張で、月曜まで帰って来ない、はず、なのだ。

先程まで、いや一体どのくらいの時間が経過したのかはわからないが、していた行為を反芻して私はどうにも居た堪れない思いを抱いてしまう。罪悪感というのか、うしろめたい何かが自身を覆う。
なんならちよっと顔が真っ直ぐ見れないかもしれない。

そういえば。

昂君はどこに行ったのだろう。鉢合わせする事なく帰ってくれていたならば良いのだけれど。

「お手洗い、ありがとうございました」

「いいえー、ちょうど出来たところだし、三人でお夕飯にしましょ」
「あ、千絵子さん起きたんだ？おはよう」

がちやり、と目の前の扉が開いたかと思うと、私の真正面に立っているのは今頭に過ぎった人物だった。

「すば……」

あまりの事にさすがに声が出ずに、私は口を開いたり閉じたりしながら彼を指さす。昂君はといえば、不思議そうに首を傾げるばかり。鳩が豆鉄砲を食ったような顔というのはきつと、まさしく今の私の顔であろう。辞書の隣にどうぞ今この時この瞬間を写真に収めた私を、掲載してくれたまえ。

いやいや、そうではない。あまりに混乱しすぎて思考が明後日の方へと向かい過ぎである。

「あつ、こら千絵ちゃん！人様を指さすものじゃありません！」

めっ！と母からお叱りを受け、私は即座に申し訳ございません、と謝る。無論、謝罪のお辞儀は90度である。挨拶の時は30度だ。いやだからどうでもいい。まだ混乱はおさまらぬらしい。

ぼん、と後頭部にあたたかい温もりを感じて、私は顔をあげた。

「何をそんな深々と頭を下げてるの。やめてよ、彼女にそんなことされて嬉しい彼氏いないでしょ」

「え、あ、すいません」

「だから謝らないでってば。千絵子さん、寝惚けてるでしょう？いいから、着替えておいで」

昴君の申し出に、私はこくり、と無言で頷けば、当初の予定通り、リビングをあとにした。

「ひゅーひゅー」

「いや、奈緒子さん^{なむこ}、それはどうかと思います」

「あら、違ったかしら？」

「……問題はそこじゃないかと」

苦笑する昴君とか、茶化す母とか、ほのぼのした空気のリビングなんて知る由もなく、私はいまだ半覚醒状態の頭を必死に稼働させながらTシャツとスウェットに着替える。料理はしないのでジャージは着なくてよし。

それより、とりあえず落ち着こうじゃないか。まずは状況を整理しよう。

とりあえず、最優先事項は。

「……腹を満たすことだな」

いや。さすがにわかってますよ違うって。わかってるんだけど現実逃避したくなった私はなんて弱いんでしょう。

でも起きた時にハイソックスをちゃんと履いてたから最悪な事態は免れたわけだ。妙なシーンは見られていまい。

と、信じたい。信じてる。

無理やり自身を納得させ、頷きつつ階下へとむかう。リビングからは楽しそうな笑い声。まさか、恋人だと紹介する前にもう恋人が恋人だと宣言しているとは……ええい、恋人言い過ぎて恋人がゲシ

ユタルト崩壊するではないか。

まだまだ混乱の渦にもまれている自身の暴走はとりあえず放っておく事にした。外に向けて一応の会話が成立するならば問題はなかろう。たとえ頭がいっぱいいっぱいだったとしても。

恐る恐る扉を開けば、音に反応してか母と昴君が同時にこちらを振り返った。

「あらあいやだ。千絵ちゃんたら彼氏の前でそんな気の抜けた格好でいいの？」

「……ジャージを見られてるのに何を今更取り繕う必要があるのか、いやない」

「結論まで自分で言っちゃうんだ」

あはは、と笑う昴君の隣に腰かける。ダイニングテーブルは父不在なのに三つの椅子が埋まり、なんともいえない気分である。ひとりが自分の恋人だというのが何より複雑な心持ちにさせるものだ。

「でも、今日はかわいい格好してきてくれたし、今の姿も僕はかわいいと思ってるよ」

「……ありがとう」

「ひゅーひゅー」

「やめろ」

なんともへたくそなぎこちない声で囁し立てる母に思わずつつこみを入れれば、母は悲しそうに瞳を潤わせた。

今にも泣き出しそうな母に、私は慌てて謝罪の言葉を告げる。ごめん、と言えば母は何事もなかったかのように満面の笑みになるので、思わず脱力した。昔からそうなのだ、この母は。一生かなわないのだろう、と齡17にして思わずにはいられない。

「……まあ、いいや。食べて良いかな」

疲れた声で私と言えば、にこにこ母がどうぞ、と言うので、昂君と一緒に手を合わせていただきます、と唱えた。

久しぶりの他人が作ったごはん。ありがたいと同時に美味しい。そして幸せだ。いつしか、私は母よりも家事全般が上手になってしまっていて、母は休みの日でもあまりごはんを作らなくなった。私の手伝いはしてくれても、彼女が舵取りをすることがあまりなくなっただ。

母いわく、台所はもう私の城なのだそうだ。そう言ってもらえるのは、嬉しいしくすぐりたい。色々なお家事情はあれど、私は今に不満などひとつもない。母がいて、父がいて、私がいる。

それぞれがそれぞれの役割をこなし、また、それぞれがそれぞれに感謝の念を抱き、言葉にするし、してくれる。それはどんなに尊く、幸せであろう。

とはいえ、母の手料理もやはり年に一度は食したいという気持ちもあるわけだから、単純に今日のこれは嬉しいのだ。咀嚼する久しぶりの味に微笑む。

「うーん、やっぱりちーちゃんの炒飯のが美味しいねえ」

「とっても美味しいですけど」

昂君の言葉にうれしい、と母がはしゃぐ。次いで私に感想を求めてくるので、口の中のものをきちんと胃におさめたあと、声を上げる。

「コンソメの量ちよつと少なかったんじゃないか。あと卵入れるタイミングが早すぎたかな、あと」

「もー、だめだしそれくらいにしてー。お母さん超へこむー」

「母よ、若者言葉を操るのは悪いとは言わんが良いとも私は思わな

い。美味しいよ、私はこれでじゅうぶん」

「うふふふ、そう？よかった」

後半だけ取って微笑む母は、嬉しそうなのでよしとすることにした。

わかめスープを飲む。うん、ちよつとごま油が多かったかな。美味しいけど。やっぱり私は、もはや母よりも料理が上手になったのだなあ。そう改めて実感するとなんと感慨深い。

「ねえ、それで、昂君と千絵ちゃんていつから付き合ってるの？」
「二週間ほどになります」

母の質問に、昂君が微笑んで答える。

もうそんなに経過したのか、そういえば。

というか、そういった話題は今までの会話で出てこなかったのか。そっちのがなんとなく驚きだ。今までどんな話をしていたのだろう。

昂君の言葉に、へえ、と母はきらきらと瞳を輝かせる。しかし、てつきり怒られるものとはかり思っていたが、この母は相変わらず読めない。

なんにも言われない事が逆に耐えられず、私はついにみずから質問を投げかけることにした。ああ、なんと弱い。

「お母さん」

「なあに？」

首を傾げる母に、私はごくり、と唾を飲み込む。

「怒らないの？」

「なにを？」

「親がいない間に彼氏を家にあげたりして。普通は怒らない？」

「うーん？千絵子のこと、私、信頼しちゃいけなかった？まだそこまでは早かったかしら？もっと監視下に置いてあげたほうがいい？」
「いやいや、もちろんそんなことはないよ。信頼を裏切るつもりはない」

「じゃあ怒らないよ」

いや、本当言えばその、いかがわしい事もしたりしなかったりなのだが、基本的にはまだ一線を越えていない、ので、セーフなのだろうか。いやしかし。

ぐるぐる考えても仕方がないのでそこは一旦置いておく。

それにしたって、親の居ぬ間に男連れ込むなんてあばずれのような行為じゃないのか。母には、そこらへんもっと怒られるものと思っていたのだが。私もまだまだこの母を把握していない。

「僕は、千絵子さんと結婚を前提にお付き合いさせていたただきたいんですが、かまいませんか？」

「あらー、もちろんよ。真面目で素敵だわ」

おい。ちょっと待て。色々と物申したいんだけど昂君。

このひと、今なんて言ったの？

混乱する私を他所に、ふたりの会話は進んでいく。手を叩いて頷いた母は、しかし次の瞬間ふ、と目を細めて私の知らない顔をした。

「それを事実にするかしないかはあなた次第よ」

「そうですね、僕と千絵子さん次第ですね」

挑戦的な視線を昂君に寄越した母に、昂君も同じような目で応える。

きっと、その言葉に満足したのだろう。ふ、と母の空気がやわらいだ。

「ええ、そうね。そうならすぐ素敵。いつか私に、昴君と千絵ちゃんの孫を抱かせてね」

「奈緒子さんてば、気が早いですね」

「あらあ、若いうちにおばあちゃんになるのちょっと夢なんだろう」

「ふふ、それじゃあ計画的に頑張りますね」

「昴君てばたのしいわねー」

いやいやいや。そろそろ会話のおかしさに気付け。

あまりの内容にどこからどうつつこみを入れたら良いのかわからずに、しかしその前段階ですでに私の思考は混乱の極みとなっている。

結婚を前提にお付き合い……？ 一体、どういうことなんだ。

昴君は、言った。同性しか愛せないと思い込んでいたけれども、異性を愛せるのかもしれないと。だから、私で試させてほしい、と。

昴君の好きな相手は、高柳奏。やなぎん。昴君の幼なじみ。

今心の中で反芻した情報は、なにひとつ間違っていないはずなのに。

呆然とした状態で、昴君をみつめる。昴君は、私の視線を感じて、少し首を傾げて微笑んでいる。私はわけもわからずに、席を立った。口は勝手にトイレ、と声を発していたが。

ああ、ごはん食べ終わってた。食器を下げよう。

ふらふらと、無表情のまま私は台所に食器を下げる。あまりにも覚束無い足取りだったのが悪かったのか、何もない場所で、私は派手に転んでしまった。

食器を持った状態で倒れた為、かばうこともできずに尻を床に叩きつけ、手にした食器はがちゃん、と床に散った。ぼんやりとみつめていると、割れたコップの破片が目の前できらきらと輝いている。私は何も考えずに、その綺麗なかけらへと手を伸ばした。

「千絵子！」

叫んだ昴君の声に反応して、私は慌てて触れようとしていた破片から手を遠ざけた。すんでの所で触れなかった指先は、流血の心配もない。

「なにやってるの、危ないな。触っちゃ駄目だよ怪我しちゃうから」

「……………」

「？ 千絵子」

何も反応しない私に怪訝な表情を向けて私の名前を呼ぶ。昴君が、私を心配して、私に寄り添っている。だというのに、遠く感じるこの距離は、なんだというのか。

「昴君も、不用意に触っちゃだめよ、危ないから。…………ええと、ちーちゃん。掃除機どこかしら」

「……持つて、くる。とりあえず、これ」

母の声に反応して立ち上がれば、私は食器棚の上にある小型のほうきとちりとりを渡した。これで大きい破片は拾ってもらおう。あとは……二重にしたビニール袋とどうでもいい広告を敷いてこの中に破片を入れてもらおう。

無表情のまま作業している私を、母も不思議そうな顔をしてみつめているが、特に何を言うでもなく私から受け取った道具で後始末をする。

私は、ふらふらした状態のまま廊下にある収納へと向かった。がちちゃん、と扉を開いて掃除機を取り出し、リビングへ戻ろうとする。けれども、足がどうにも動かなかった。

「忘れてた……」

ぽつり、と呟いた自身の言葉で、何かを忘れていたんじゃないかっ
たとすら思っていなかったさっきまでの自分に呆れて自嘲めいた笑
みを浮かべてしまう。

そうだ、起き上がった後から今まで、忘れていた。私が、意識を
失う直前に出した答えを。

『私は、昴君が、好き』

そうだ。

私は、好きになってはいけない相手を好きになったのだ。

男性を好きな男性に、私は想いを寄せてしまった。なによりも、
私を、利用する相手を、私は。

「……こうなるのが嫌だったから、時間を共有なんてしたくなかつ
たのに」

苦し紛れに笑ってみせても、心はちっともなぐさめられてなんか
くれなかった。

第12話

結局、掃除機を渡して、少しだるいと嘘を吐いた私は、心配顔する昴君と母を残して、早々に部屋へと引っ込む事にした。

玄関で見送った昴君の顔はやっぱり綺麗で、そう思う自分がとても哀しい。

「なんでこうなっちゃうんだ……」

というか。

単純すぎやしませんか、私。まだ一ヶ月と経過していないはずなのだが。

始まりは奇妙で、と奇妙の一言で片付けられる話ではないな。自分で言っておいてなんだが。

好きです、付き合ってください、と。その綺麗な唇がそう動いて、空気を振動させ、彼の透明な声が私の耳に浸透したとき、私は首を傾げた。

考えてみれば。その時から、彼の何かがひっかかっていたのかもしない。

いつからだったのだろう。ただの綺麗が、特別な綺麗にすりかわったのは。

そろそろ呻り声でも上げてしまいそうな勢いで、寝転がったまま考え込んでいると、部屋の扉を叩く音がする。私は無機質にどうぞ、と告げた。

ひよこ、と顔を出した母の奈緒子は、今年で47になるはずだが、見た目年齢がどうひいきしてみても30程度にしか見えない。さすがにそれは言い過ぎだろう、と思うが、時折男性から「姉妹ですか？」などと言われて、そのたび母は気を良くしている。

母は、一般的にかわいらしい女性で、父は、人によってはとても

好かれる容姿をしている。なんというのだろうか、一重のすつとした顔だ。

今流行の若手俳優が好きな人間からすればなんのひっかかりも持たない顔だが、割と中堅の俳優が好きである方々にはたまらない顔であると思われる。

なぜそんな客観的に分析できるのかといえば、何人かの友人に言われたからである。本当に、女性の評価がはっきりと割れるものだから面白い。

そんな彼らから生まれた私の顔は、どちらともつかない顔で、ひよつとすると普通よりいくぶん良いかもしれないけれど、個人的にはぎりぎり十人並みに躍り出ている顔つきだと思う。しかし、普段両親を見ているせいで目が肥えているのだ、とあかりにいつか言われたことがある。そうなのかもしれないが、冷静に自身の容姿をはかるのは存外難しいものではなからうか。

そもそも、そう発言するあたりだってとても美人なのだ。そう考えると、私はけっこうメンクイってやつなのかもしれないなかった。

顔で友人を選んだつもりは決してないが。

「ちーい」

「なんだね、飼犬でも呼ぶように」

「うふふ、今日はびっくりしちゃった」

母の含みのある笑いに、私は目を眇める。ちなみに、起き上がるのは億劫なので寝転んだままだ。なんなら本当にだるい気がしてきた。

にしても、この顔。何かがひっかかる。

「……母よ」

「はあい」

「なるほど、私はわかりました」

「千絵ちゃんは相変わらず面白い言葉遣いよねえ」

うふふ、と微笑みながら、ベッドの上に位置する机からキャスタ
ー付きの椅子を引き、私の傍らに座った母は、さらに、と私のおで
こにかかる髪を梳く。

心地よい手触りに、ついまどろみそうになるが、確認しなければ
ならぬことがある。

「昂君の存在、少し前から気付いていたのだね。だから今日、月曜
日まで帰らないと私に嘘を吐き、昂君と遭遇できるか賭けたんだ」

「ほぼ確信に近かったのよ？ なんだか頻繁に出入りしているみたい
だから、毎週末会ってるのかしらなんて思っていたくらい」

「残念。週末に会ったのは今回が初めてだよ」

「そう？ まあ、お付き合いして二週間て言っていたものね」

「……………お母さん」

「ん？」

「勝手に、男の子を家に上げたりして、ごめんなさい」

少しきまりが悪くて、ぼそぼそと私が呟くと、お母さんは目を丸
くしてそれからやわらかく微笑んだ。

酷く優しい笑顔に、なんだか泣きそうになる。

「そうねえ、あまり感心はしないけれど……でも変な子じゃなくて
よかったわ。お母さん、一目見て気に入っちゃった。少なくとも、
昂君が千絵ちゃんにベタ惚れなのはわかったもの」

母の言葉に、私は胸がずきりと痛む。歪ませた顔に何を思ったの
か、それを見た母は相変わらず優しい顔で笑う。

「別にこれからも、家に上げるなどはお母さんは言わないわ。ただ、

お父さんにもきちんと話すのよ」

あやすように頭を撫でられて、私は不覚にも涙腺がゆるんでしま
う。気付けば、言葉は口から飛び出していった。

「……もう、家には呼ばない」

「？ 千絵ちゃん」

「もう、二度と、昴君は、家には来ない」

震える声で話せば、目を丸くする母。けれど事情をすべて吐露す
るには、あまりにも絡まりすぎていて。なにより、なんとなくだけ
れど、母や父には言い辛い話だった。

その心境を察してくれたのか、これ以上にも話す気はなかった
私に、母は一言、そう、と相槌をうつと、椅子から立ち上がった。

「千絵ちゃん、熱が出るかもしれないわ。ゆっくり休むのよ」

言って、部屋の電気を落とすと、母は部屋をあとにした。

ぱたん、と扉が閉じる音を耳で確認した途端、私の涙腺は崩壊し
た。次から次へと、涙が溢れて止まらない。

もう、私は自分がどうしたいのかわからない。彼に、好きだと告
げたら、どうなる？

きつと昴君は、これからも付き合っていこうと言ってくれるに違
いない。何よりも、ついこのあいだ約束したのがそういう条件だっ
たのだから。

でも。

そんなものは、ほしくない。

そんなものは、いらない。

だって昴君は、私を好きじゃない。私が昴君を好きでも、彼の気
持ちは私にない。そんな状態で名ばかりの恋人を続けて、なんにな

るというのだ？

好きという気持ちは、きっと溢れて止まらなくなる。そうなら、今よりもっともつと苦しい。

私は、それに耐える自信がない。

傍にいたくないのか、と訊かれたら、それは、隣に立っていたいに決まってる。

けれども、同時に、やなぎんと仲良く喋る昴君を見なくちゃいけなくて。自分の気持ちを隠して、彼の隣に居れば、いつかは昴君が、私を好きになってくれるかもしれないけれど。

でもさ、そんなのって、辛いよ。

だって、わからないもの。君が私を好きになってくれるかなんて。何よりも、もしも好きになったと言ってくれても、私は昴君の言葉を信じられるかがわからない。

最初の言葉も、嘘から始まった。

昴君は、優しい。優しいが故に、残酷だ。

残酷な嘘に、いっしょにつきあってもらうのは、あまりに痛い。

ところが、きっとそのうち壊れてしまう。
だから。

「……さよなら」

私を、君から解放してくれ。君も、私から解放してあげるから。

昴君。

女の子のからだに触れるのだから、そのうち、やなぎん以外も好きになれるかもしれないよ。でもそれはきっと、私じゃないね。

あなたにとって、私はきっと、罪悪感から義務のように大切にしなければいけない女の子のはずだから。そんなのは、おかしいからおかしくなっちゃうから。

さようならと、言おう。

「おはよう」

「……おはよう。あんた、顔色悪いわよ」

大丈夫なの？と、眉間に皺を寄せながら言うあかりに、私は問題ない、と首を振った。

月曜日の朝に開口一番友から言われたせりふに、少し苦笑いを浮かべてしまう。

教室はまだ人もまばらな時間。相変わらず私もあかりも登校時間が早い。

「ちょっと熱を出して週末寝込んだのだけれどね。すっかり完治したよ。たくさん寝たし」

「そう。あら、風邪なんて珍しい」

苦笑しつつ、風邪と言うか知恵熱だろうけれどもね、と心の中で呟く。あんまりにも慣れない事を考えたもんだから、脳が許容量を超えてしまったのだろう。

「ねえ、あかり」

「なによ」

「……いや、ごめん、なんでもない」

「？ 言いかけてやめるなんて気持ち悪いわね」

やなぎんのこと、なにか印象は変わったか、と訊こうと思ったけれど、やめた。なんとなく、自分がずるい気がしてしまって。

訊いたあと、どうするつもりなんだろうか、私は。ひょっとしたら、昴君が失恋するかもしれない事態になったら、とか期待しているのだろうか。

そうになったら、私は、弱ってる綺麗な昴君をなぐさめて、どうするとか。

手籠めにでもする気か。いや、私は女だ。更に言えばどちらかというと私のがされたほうだ。そんな、その、ものすごく無理やりとかではなかったけれど、強引なものにはかわりはなくて、でもなんとか手馴れた感があつてなんか昴君でひよつとすると遊び人なのだろうかと疑わなくもない、じゃなくて。

とにかく。そういう行為はよくない。

なるべくならば、自分に誇れる恋がしたい。

思っただけで恥ずかしい。なんだこれは、まさしく青い春という言葉ではないか。というかうまいこと作るな、昔のひとは。

よく言ったもんだ、青春だとか思春期だとか。春というのは、そういうった不可思議な、なおかつ形容しがたい若い葛藤を端的に表すにはなんとも適した言葉である。

「あら、ちー。出入り口の所に佐藤君いるわよ」

ぼんやりとどうでもいいことなのか重要な事なのかよくわからな
いがとにかく考え込んでいると、あかりの口からとんでもない言葉
が聞こえてくる。

気付けば私は、勢い良く席を立っていた。

「！　ちよつと私ご不浄」

「は？　今時ご不浄って」

ぽかん、とするあかりを残し、私はちらと昴君が後方の出入り口
に立っているのを確認すれば、前の扉から走って教室を飛び出した。
廊下も、全速力である。

途中、叱責するような声が聞こえて、おそらく廊下を走るな、と
いう言葉だったと思うが、そんな場合ではない。私は、とにかく今、
昴君から物理的に離れなくてはいけないのだ。

「……っておい」

気付けば辿り着いたのは、四階にある女子トイレ。我々二年の教室は二階なのに、一体全体どこをどう走ってきたのやら。

いや、そもそもそういう問題ではない。重要なのは、昨日、さよならすると決めておきながら、話をせねばならない張本人から逃げてしまったという事実である。

しかもあんなにわかりやすく避けるとは。どういう了見なのだ。今から教室に戻って、釈明しなければあらぬ誤解を抱かれる。誤解。

でも、私が昴君から離れたがっているのは事実といえど事実で。いやでもこんなことをすれば昴君は疑問に思うに決まっている。優しい彼を困らす真似は、できればしたくない。

「……も、戻るか」

心に決めて、恐る恐る来た道に戻る。

ああ、なんだろうな。なんでこうなんだろう。肝心な所で、根性を見せられないだなんて。こんなに情けない女だったなんて、ちょっと自分にがっかりだ。

落ち込みつとぼとぼと教室まで戻ると、クラスには昴君とやなぎんがあかりを囲んで仲良く談笑していた。

「……やなぎん、昴君、おはよう」

力無くあいさつをすれば、ふたりが微笑んであいさつを返してくれる。しかしやなぎんは元気いっぱい、昴君は静かに微笑みつつ、であるが。

何人かのクラスメイトが彼らを囲っているが、その中のひとりが勢い込んで私に声をかけてきた。あまりのことに一瞬仰け反る。

「野田さんと横田さん、どうしてふたりと仲良いのかと思ったら！お兄さんとお姉さんが結婚するんだね！びっくり！」

「え、ああ、そうなんだ。その繋がりで、昴君ともなにかと話そうになって」

「そうだったんだねー。私達、てっきり横田さんと高柳君が付き合っていたのかと思った」

その言葉に、違います、と低い声であかりが囁く。不機嫌なのを感じ取ったのか、クラスメイト達は、ご結婚おめでとう、とどうでもいい祝辞を残しつつそそくさと席を離れた。

「……本当、君たちには感謝しないとね」

「別にあなたの為に私の兄も、高柳君のお姉さんも結婚するんじゃないのよ」

「そんなの当然じゃないか」

苛立ちをそのままに話すあかりと、それをやんわりとかわして微笑む昴君。うーむ、さしずめ虎と龍とでも言ったところか。

「そうだ、千絵子さん、体調大丈夫？」

「えっ、野田っち具合悪いの？」

「いや、週末に寝てすっかりよくなったから。ご心配ありがとう」

あはは、と笑う私に、昴君はよかった、と微笑む。やなぎんも、元気なのはなによりだよね！と彼らしい豪快さで笑った。

「あの、昴君」

「ん？」

「今日、お弁当作れなかったんだ、ごめん」

「ああ、そんなこと。全然気にしてないよ。購買で済ませるし」
「うん……」

少し視線をさまよわせる私に何か気付いたのか、昴君は一言出ようか、と告げると、席を立つ。私も慌てて後に続いた。

ざわつき始めたものの、かえって喧騒があるぶん会話は聞こえにくいだろう。それでも警戒心からか、私は声を低くして秘密の話をするかのように昴君に囁いた。

「しばらく、家に来るのを控えてほしいんだ」
「え？」

目を丸くする昴君に、私は慌てて首を振る。

「いや！ 変な意味じゃなくて。父と母もこれから少し帰りが早くなるんだ。お父さんはちょっと厳しい人だから、まず私から話をして一呼吸置いたほうが無難だし……それに、最近ちょっと家事がおろそかになって。だから、働いてる両親が快適に生活できるように、私もいつも以上に家の中を綺麗に保てたらと思って」

「……そっか。そうだね、ごめん。いつも僕があがりこんでるから、掃除とかもきちんとして来てないよね」

「あ、いや！ 迷惑だったわけでは」

「うん、わかってる。でも、謝らせて」

「……うん」

「それと、少し寂しいけど、わかった。しばらく我慢するね」

「ごめん、ね」

「もう、なんで千絵子さんが謝るの」

いやだって。

離れたいのは確かだけど、こんな風に言い訳みたいな、本当半分、

嘘半分みたいなこと言って。

勝手に口をついてでる言葉に私は内心、狼狽しっぱなしで。

けれど、どこかで酷く安堵している自分にも、気付いていた。

ごめんね、昴君。

第13話

お弁当も、父親にきちんと話して承諾をもらうまでは堂々と作れないし、忙しいから無理だと思うと告げた。昂君は、苦しい私の話にどこか納得いかなそうな顔もしていたけれど、優しく微笑んでわかった、と言ってくれる。

今日は帰りも別々で、いよいよ私は彼から物理的に離れる手段を取っているみたいだ。

みたい、というのは、口から飛び出た言葉の数々に、誰よりも驚いていたのが私自身だったからなのだ。頭の中で彼から離れよう、と思って実行したわけではない。それなのにこんなこと言ってしまったのは、きっと私が彼に別れを告げたくないけれど、一緒にいるのは辛いというわがままな感情を抱いたからに違いなかった。

そんな、少し破綻してる私の言い訳にも、昂君は優しくうなずくだけで。

まあ、そうだよな。

昂君にとつての私の存在なんて、そんなちっぽけなものなのだよな。あ、ちよつと落ち込んできた。このままゆるゆると距離を置いたら、私たちは関係ない他人になっちゃうのかな。

きつと、今の私はものすごく卑怯だ。自然消滅を狙うなんて、いちばん傷付かない遠まわしなやり方。でも、昂君が最後まで優しい人だったとしたならば、この方法はおそらくうまくいくんだろう。

不自然にならない程度に、徐々に、離れていけば。

きつとそれで、私たちはさよならになる。

「ただいまーつと」

誰もいない家の明かりを付けて、誰もいないはずの空間にあいさつをする。

普段は、慣れてしまっているから感じない寂しさも、今日はなにやら趣が違う。

「……面倒なもんだな」

苦笑して呟く。

なんだかなあ。恋をするって、好きなひとができるって、本当に色々と面倒なもんだ。

せめて、少しでも嘘にならないように、最近さぼってた各部屋の掃除を徹底的にやろう。あ、でも一気にやると途端に暇になって、また妙な考えに傾きそうだしなあ。うん、小分けしてやろう。

とりあえず今日は、リビング全体の掃除をやる事に決めた。

「今日はなんにするか……お父さんも帰ってくるしなあ」

出張から帰ってくるというつも和食というか、あっさりしたものを欲しがる傾向にあるからな。今日はそういったメニューにするか。ふむ。

あれこれと頭の中でメニューを浮かべていれば、部屋に無機質な電子音が鳴り響く。

驚いて持っていたハンディモップを床に落としてしまったではないか。ふいうちのように考え事しているときに鳴るとはなんと非常識な。

ぶつぶつと完全にやつあたり気味に愚痴をこぼしつつ、私はダイニングテーブルに置いてあった携帯電話を手取る。電話だ。着信を知らせる画面が、発信者の名前を表示している。私は思わず固まった。

昴君だ。

どうしよう、いや、出るべきなのだろう。電話に出なくなるのは不自然だ。彼が気になってしまう。

そうだ、あくまでも自然に距離を保たなければいけないのだから、露骨に避けてはおかしいことになるではないか。

7回ほど鳴ったベルの音にどぎまぎしながら、私はなんとか受話ボタンを押した。耳に電話を押し当てるのに、なぜこんなに緊張せねばならないのか。

「も、もしもし」

『千絵子さん？ごめんね、今忙しかった？』

昂君の声が耳元から響いて、私の心臓が不規則に揺れる。

前はなんにも感じなかったことも、恋というやつので、一喜一憂してしまうらしい。まったく、本当に面倒くさい。

私は内心ため息を吐きつつも、いいや、と昂君の質問に返事をした。

『あの、今日の話してくれたことなんだけど。放課後しばらく会えないのは仕方ないと思うんだけど、土日はどうかと思うって』

昂君の言葉に、までも心臓がおかしいくらいに跳ねた。

ああもう。彼は私の感情を揺さぶる天才だな。

それってどういう意味なんですか、訊いてもいいですか、理由を。なんでそんなに会いたがるの？昂君、何を考えているんだい。私とあなたは仮の恋人同士だろう。

君は、確かに仮とか考えたくないなんて言ったけれどもさ。でも気持ちはそうじゃないか。好きだからいっしょにいるんじゃないのだから。友達だから？ただの友達と、そんな頻繁に会ってどうするんだ。学校であれこれと話をすればそれで済むじゃないか。

「……あの、ごめん。土日もちよっと、あまり頻繁に会うのはきついんだ。この前体調を崩しちゃったのは、言い方は悪いけれど休日

も出かけたりしたからだと思う。家事が忙しいあいだは、家で休んでいたいから。申し訳ないんだけど」

『……そう』

「その、迷惑なわけでも、嫌だったわけでもないんだ。昴君と過ごした休日はなんというか、とても楽しかったし」

慌てて言い募れば、わかってるよ、なんて昴君はくすくすと笑う。ああ、なんか耳がすごいくすぐったい。

どんな顔して、今、彼は笑ってるのだろう。きっと、私の大好きな綺麗な顔なんだろうな。

ってだから。いかんよ、これじゃあ。いつまでも昴君を好きな気持ちを抱えたままでは、苦いものはいつまでも私の中に居座り続けるじゃないか。

楽になりたいのだろう、野田千絵子。ならば頑張りたい。

『そっか、わかった。じゃあ、また会えるようになったらすぐ教えてね?』

「ん、わかった。電話わざわざありがとう」

『とんでもない。僕が声を聴きたかっただけだもの』

ぬあ。

だからなんでそんな殺し文句を言うのだろうね、この男は。罪作りなやつめ！昴君め！君はあれか、スケを思うさまコマす性分なのかい。

無難に別れのあいさつを告げて、電話を切る。

大量に出たため息は、一体どんな成分が含まれていたのか。わざわざ考えずともわかることだった。

「あんたたち、落ち着いたのか冷めたのか、どっちなの」「は!?!」

頼杖を付いて世間話をする目の前のあかりに、私はすっとんきょうな声をあげた。

まだ教室内に誰もいないとはいえ、そんな通常の大ききで発している言葉なのだろうか、それは。

くそう、相変わらず鋭いな。傍から見たってわりと自然だと思っていたのだが。

「落ち着いたんじゃないのかね」

「ふうん？にしたって、一緒に帰るくらいはしてもいいんじゃないの？放課後に遊ばなくなたって」

「それは、そうかもしれないけれども。どうせ方向は反対なんだから、駅まで一緒に行くだけなのだよ？ならあまり意味ないじゃないか。15分程なのだし」

「あんたは良くても、むこうはどうなのかしらね」

あかりの言葉に少し首を傾げる。

別段、昴君は困っていないのではなからうか。だって、学校で会えば会話をするし、避けたりもしていないし。放課後は、まあ、なんとなく、並んで歩いたりしたくはないので、ちよつと足早に帰ったりもしているけれども。

でも、昴君も特に気にしてはいないようだし。何も言ってこないから、いいんじゃないだろうか。

我ながら、この作戦はうまくいきそうだ。徐々に前のような、少し遠い関係になりつつあるし、やなぎんは相変わらずあかりを訪ねてはくるけれども、お昼だって四人揃って食べていればそんなに彼を意識しなくて済む。

やなぎんと楽しそうにする昴君を直視するのは少し辛いけど、綺麗に表情を変化させる彼を見ていると、なんだか段々と潔くあきらめる決心もついてくる。

やなぎんは、あかりに夢中のようにだし、それはそれで、昴君にはせつないかもしれないけれど、私が存在した意味を、見出してほしい欲もあったから、昴君の想いが成就ではなく、今の私のように良い形であきらめる決心ができたなら、と思っていた。

私の存在、っていうのは、女の子とこの先お付き合いをしてくれたらな、という意味だ。

昴君と私の始まりの理由は、昴君が女性に対する苦手意識を払拭すること、まあ一応今もそれは続いているわけだが私の中ではもう終わりを告げているわけで一応過去形で語っておく、だったわけだが、つまりは、私が彼の中の女性全般の意識を変えられたきっかけだったのならば、嬉しいじゃないか。

少しでも、私を君の心の隅に置いてくれ。そうして、この先、女性を好きになったとき、私との日々を思い出してくれたらいい。

それで、たったそれっぽっちのことで、私はとてもとても嬉しいな、と思う。

叶わなくていいから。隣にいなくていいから。

忘れてしまってもいいから。時折、都度思い出してくれたら、嬉しいなって。

こんなことを思う私は、案外、女っぽい部分があったのだな、なんて感心する。いや、自分でそれを言っている時点でどうかとは思うのだが。

まあ、いいのだ。

恋をしたことで、私はひとつ、成長できたんじゃないか。自己完結気味なのがなんともいだけないが、案外、弱くなってしまうのも恋なのだと知ったから。

「次はまあまあ頑張ろう……」

「何を？」

視界に入った綺麗な顔に驚いて、椅子から転げ落ちそうになるか

と思った。実際は、多少仰け反ったくらいだったのだけれども。まさか、ずっと頭の中で想いを巡らせていた相手が目の前に現れるとは。

前の席に座るあかりも、ずいぶん早いよね、なんて目を丸くしている。

「千絵子さん、横田さん、おはよう」

にっこりと微笑んで昴君が発したあいさつを、私達もそれぞれ返す。それが終わると、何を考えているのか。

昴君が、座っている私の身体を立たせるように左腕を引っ張った。多少強引に腕を掴まれて、私はわけがわからず狼狽する。

「？ 昴君」

「ちょっと。部室に行こう、いいかな？」

「う、うん」

それならば、と鞆を掴んで、私は昴君にひかれて歩き出す。表情をうかがえば、怒っている様子はない。それとも、上手に隠してしまっているのだろうか。わからなくて、私は無言で彼に従うだけだった。

部室に入れば、当然だが密室で2人きり。簡単に是と頷いてしまったが、本当によかったのだろうか。今更後悔してももう遅いのだけれど。

ああ、せめてココアを買っておけばよかった。ポケットにチョコか飴なかったらうか。

そわそわと私が身体をまさぐっていると、昴君がどうしたの、と首を傾げる。私は慌ててなんでもない、と答えて、うながされるまま昴君と並んでソファに腰を下ろした。

「あの、どうしたの？」

「……もうすぐ、二週間になるよ」

え？なにが？

質問しようと口を開きかけて、やめた。昴君の顔が、先程とは打って変わって不機嫌に歪められていたからだ。

しまった。怒ってたのか。でも、何にたいしてなのかは今の私にはまだわからない。

「今日が木曜日。もうすぐ、千絵子さんの申し出を聞き入れて二週間になる」

「あ、ああ、そのこと。それがなにか？」

「なにか、って。僕たち、もう二週間も恋人らしいことしてないんだよ？」

いつもよりも多少低い声で話されると、なんだか艶っぽくてどきどきするな。とか、呑気に考えてる場合じゃないんだよね。

でも私は、昴君がなんでそんなに不満顔なのがちっともわからないんだ。

「別に、学校ではたくさん話しているし、お昼ごはんだっていっしょに食べてるじゃないか」

「そういうことじゃない！僕は、もっと千絵子さんといっしょにいる時間がほしいんだよ！」

「なぜ？」

私の質問に、心底苛立ったように昴君が眼光を鋭くさせれば、乱暴な仕草で私を彼のほうへと寄せるように引っ張れば、私はバランスを崩して上半身を昴君にあずけるように倒れこんだ。

ちよっと、この、膝立ちになった状態、不安定なのだけでも。

昂君の膝と膝の間に私の左足があつて、右足はソファに乗ってる状態だ。見上げる昂君の顔は、なんだか怪しく光ってる。

「……千絵子は、平気なんだ」

「え、なに……！」

なんとか密着しないように踏ん張ったのに、昂君が背中を思い切り押ししてきたから、私はぺた、と膝を曲げてしまった。正座しかかっているみたいな態勢は、昂君の太股がクッションになって完全には折り曲げられてない状態になった。しかし、先程よりも恥ずかしいことになっている。

「やっ！」

唇を塞がれて、私を苛むような昂君の接吻に、久しぶりというのもあるのか、気持ちを認識してからはじめての行為だからなのか、多分色々要素はあったんだろうけど、とにかく。

私は、前よりももっと反応を示してしまったのだ。

「前よりもなんだか反応が良いみたい？」

昂君の言葉に、私はかっとな熱が灯ったかのように顔を赤らめる。

耳元で囁かれて、そのまま耳全体をなぞられ、食まれる。背筋がぞくぞくするのを感じつつ、私が仰け反れば、昂君は離れる私の身体を抱きこむように、不安定だった体勢を変えようと膝立ちになっていた私の背中を引き寄せ、倒れこませればそのまま彼の上に座り込む形を取らされる。その間も、耳やうなじを触る動きは止まらない。

なにをされているのかよくわからずに、されるがままになっていた。

「僕は、寂しかったよ、触れられない間」

「す、ぼるく」

「そんな風に、潤んだ瞳で僕を見るくせに」

心はくれないの。

囁かれていた、その言葉に、私は反応を示せなかった。この時、自分の意識がどこにあるかも分からない状態だったからだ。でももし、このとき、私がきちんと彼の言葉を認識していたら、何か違ったのだろうか。あとから考えたって、それはただの後悔にしかないけれど。

「ねえ、千絵子。今度は、いつ会える？学校外でも会いたいって、わがままかな？そんなことないよね？恋人なんだから」

「そ、それは……」

「僕の事、嫌いになった？」

「！ そんなことあるわけ」

「じゃあ」

「あっ……す、昴君！」

耳を撫でられながら、昴君がうなじへと唇を寄せる。その行為にぞくぞくと背中が粟立って、あられもない声を上げそうになる。

「ねえ、二週間前に言ったことは、そもそも本当のことなんだよね？」

「あっ！」

「答えないと、これ以上のことをしちゃうよ？」

「！？」

言葉に、反応を示してしまった身体が、怖い。

自分で自分が、なくなってしまうそうで、怖い。
いやだ、やめて。

必死になって、昴君の言葉に答えようと頭を動かす。

「嘘じゃな…っ！」

昴君の愛撫から逃れようと必死に身体を振って、答える。涙があふれてきて、もう彼の顔が良く見えない。

大好きな、綺麗な顔が。

「それじゃあ、いつになったらまた会えるようになるの？」

「そ、それは、な、んで？」

「どういう意味？」

私がまともに受け答えできないとわかったからか、昴君の動きが止まった。私は呼吸を整える暇もなく、なんとかまた行為が再開されるより早く答えようと口を開いた。

「昴君と、私は、恋人かもしれないけど、恋人じゃない。好きって気持ちがない。なのに、どうして、会いたいとか、寂しいとか、そんなこと、言うの？」

「……つまりそれって、千絵子さんは僕と会いたくないってこと」

「そうじゃなくて、私は昴君がどういうつもりなのかわからないだけ！好きなんでしょう？やなぎんのこと。それに、これだけ私に触れるようになったんだし、私はもう必要ない！」

「！ 本物の恋人になろうって言わなかった」

「そんなの、無理。わかってるんでしょう？昴君にだって」

「……は？」

「……もう、いいじゃないか」

眉間に皺を寄せたまま、半ば固まったかのように動きを止めた彼を見て、私はだるい身体をなんとか叱咤して身なりを整える。

決して早くもなく、むしろのろのろとした動きだったけれど、それでも昴君が待ったをかけることはなかった。ただ、呆然としている。

「やっぱり、こんなの駄目だったんだ」

「！ 千絵子」

「やめよう。もう、昴君は女の子を克服した。これから先、好きになるのが異性でも、同性でも、私は応援する。だから、友達でいいじゃないか」

「とも、だち？」

「……それじゃあ、私は行くから。ちよっと、保健室に行って、寝てくる。昴君、申し訳ないけれど、あかりに適当に言っておいておくれ」

「千絵子、ちよっと待って」

近付こうとする昴君を、私は無言で腕の前にあげて制す。

昴君は、少し傷付いたように瞳を揺らした。

「頼む。後生だから、ここを踏み越えて、私に君を軽蔑させないでくれ」

目を丸くして息を呑む彼に、私は苦笑してうなずいた。

「恋人気分というのも、なかなか貴重な体験だった。ありがとう」

動かない昴君が少し心配だったけれど、私はそのまま部室をあとにする。

さよならは、結局言葉にできなかった。往生際が案外悪いな、私

も。

苦笑しつつ、私はふらつく足取りで一階を目指した。保健室ではなく、帰宅してしまおう。そう心の中で考えながら。

第14話

好きだと自覚してから苦しみしか待っていないというのも、少し寂しい。

はじめから、終わりがわかる始まりだったから、仕方ないのだけれど。

「おかえり、千絵ちゃん」

「……お父さん」

微笑んで、リビングのソファに腰かける父が、扉を開けた私に視線をやる。そうか、出張から帰ってくる日であった。本来ならば、先週の月曜日に母と揃って帰ってくるはずだったのだが。まあ、母は嘘であつたけれど、父は日数が延びてしまっただけなので、意図的なものではない。事実が発覚してからの母の落ち込みようはすごかった。いつまでも、両親は仲が良い。案外、一緒に過ごす時間が少ない方が恋人気分でいられるものなのだろうか。

色々と思い出して苦笑していると、新聞を読んでいた父が首を傾げている。私は、無言で首を振った。

「ただいま。父よ、出張中はきちんと寝てご飯を食べましたか」

「ちは、いつも同じ質問するなあ。少し不健康な生活だったけれど、無茶はしてないから大丈夫です」

「そうか。今夜は父の食べたいものを作ろうではないか」

私の言葉に、ついに読んでいた新聞をたたんでテーブルに置いた父は、先程の私と同じような笑みを浮かべて仕様がな、といった風情で頬杖を付く。

「体調が悪かったんじゃない、自主休校かい？」

やっと飛び出した父親らしい一言に私は微笑めば、父はため息を吐く。

ぽん、と隣の席へ座れと促すようにソファを叩いた父の手を見て、やがてそれに従った。

「もちろん、のっぴきならない理由があったから早退したのだよ」

「おやおや、それは穏やかじゃないね」

頭を優しく撫でる父の手の平が温かい。私は、不覚にもその感触に泣きたくなってしまった。弱っている時に優しくされると、簡単にこころが揺さぶられてしまうものなのだ。

「……お父さん」

呟くように呼んだ私の声に、父はやわらかい声で返事をする。母があわてふためくたび、この父はいつも正しいほうへと導いていく。私はそれをみるたび、この男のような人間になれたらどんなに素敵だろう、と思うのだ。

「私、ちゃんと恋がしたかったな」

呟いた言葉は、何も考えずに口をついて出たもの。父親がそれにぴくり、と反応を示していたが、私は気付かずしばらくと正面を向いていた。

「失恋するにしても、せめて、好きになっているあいだは、相手の気持ちかわからない状態にふわふわしていたかったなあ」

「……わかっていても、止められなかったんだね」

父の言葉に、私は無言でうなずいた。父が、微笑む。

「月並みな言葉だけれど、人を好きになるのは素敵なことだよ。今は、たくさん泣いて、たくさん休みなさい。だから今日は、もうおやすみ」

「でも、せっかくなのだし買い物をして父の好物をたくさん」

「今日くらい、ただの失恋した女の子でいいじゃないか。お家を切り盛りするしっかり娘の千絵子さんは、本当はただの女子高生なんだから」

「別に、私は特別に頑張っているわけじゃないよ？」

「そうだね。でも、お父さんもお母さんも、日々、君に感謝の念は絶えないし、たまには何もせずにぼんやりする日があってもいいとお父さんは思うんだよ。それとも、何かしていたほうが気が楽しい？」

何かしていたほうが、か。

正直、今の状態で何かを始めれば、それにのめり込んですごく疲弊してしまう気がする。やっている間はいいかもしれないけれど、やることがすべて終わったあと、疲れた身体に暗澹たる気持ちを感じ込め、私はどうなってしまうのだろうか。

なんだかぞつとしてしまい、私は身震いして首を振った。父が、くす、と空気を揺らした。

「じゃあ、おやすみ。少し休んで、ちーの目が覚めたら、いっしょにごはんを食べようね」

「……ありがとう。おやすみなさい」

立ち上がって、リビングの扉を閉める。普段は温厚な父の顔がこのときどんな様相を呈していたのか、どれだけ低い声でその言葉を

呟いたのか、とか、私にはわからなかったけれど。

「……俺と奈緒子の宝物を泣かせた馬の骨は、どこのクソガキだろうね」

ただ、その言葉が放たれたのは、どうやら事実のようだった。後々、その脅威を思い知るのであるが、それはまあ、もう少し先のお話だ。

リビングを出て部屋に入り、私は手の平におさまる青い音楽プレイヤーを握って、ヘッドホンを装着した。かちゃかちゃと手元をいじって、小さなおもちゃ箱におさまる音楽がすべて順番に流れるように、しかしその順番は不規則になるように設定する。

予期せぬ音が流れると、少しのわくわくと、それからしばらくして安心を感じる。

何が流れるかははじめわからないけれど、元々はそれをここに放り込んだ自分がいるのだから当然のように知っている音なのだとわかるから。

自分の好きという気持ちも、こんな風ならばよかったな。

最初は、わからないところに戸惑った。人を好きになるのがどういうことなのか、よくわからなくて、これがそうなのか、ちがうのかな、と柄にもなくどきどきした。けれどもそれが過ぎると、それまでの時間で築き上げた相手の色々な面を再確認して、ああそうか、そうなんだ、ときちんと自覚することができた。後は、流れる音楽に心地よさを感じるように、私も、彼といて心地よい空氣にずっとふわふわと漂っていたかった。

けれど。

思い知った。

昴君は、私を好きではないのだ。私が、彼を好きであるように、昴君も私を好きで、だからこそ恋人同士になったのだとしたら、ど

んなによかったろう、幸せだったろう。

昴君にとって、私は、すこしでも特別だったかい？すこしでも君の中に、私はいただろうか。

気が付けば流れる涙を、しかし無理に止めようとは思わなかった。泣いていいよ、と、父が言ってくれたから。

たくさん泣いて、また出直そう。

昴君といっしょにいるのはしばらく辛いかもしれないけれど、きちんと友達に戻れるように、努力しよう。

協力すると言ったのも、勝手に好きになったのも、すべて自分の責任だから。

せめて、優しい彼が私によって傷つくようなことはありませんように。

「……優しい、か」

はて。

ここで少しの疑問が頭をもたげる。

ヘッドホンをひっぺがし、私はプレイヤーの停止ボタンを押し、ベッドにそのまま投げ出すと、身体を起き上がらせて階下へと勢い良くおりていく。おっと、足を踏み外しそうになった。

リビング扉を力任せに開くと、父が驚きに目を見開いてかたまる。

私は無言で冷蔵庫まで辿り着くと、同様の勢いでそれを開いた。む、牛乳がない！

「……父よ、私はちよっと出てくる」

「え、千絵子」

「いつてくる！」

ばたばたと慌しくマフラーを適当に巻いて外へ出る。財布はもった。戸惑う父の声も無視して出てきてしまった、父よ、すまん。

とにかく糖分摂取しようと家を飛び出してきたけれど、どうしようかな。

せっかくだし、どこかお店にでも入ろうか。思案して、しかしあまりそういう気分にもなれない。ふらふらと歩いて、気付けば駅前近くの公園まで来ていた。

大きくも小さくもないそこは、いつか昴君と訪れた公園と少し似ている。遊具もないわけではないけれどそれほどあるわけでもなく、なんの変哲もない普通の公園。なんの因果か、時刻もちょうどあのときのように夕日がぽっかりと浮かぶ頃になっていた。

ため息を吐き、マフラーをしっかりと巻きつけた私は、自動販売機まで歩いてホットココアを購入した。派手に音が鳴って、駅まではもう少しあるから割と静かな環境のここは、余計にその音が大きく聴こえた。

騒音を出している気分になって小さくなりつつも、かしかしとひっかいて飲み口を開きながらベンチへ腰掛ける。

糖分を脳に届けると、気のせいでもなんでもとにかく活発に動いている気分になって、私は思考をめまぐるしく回転させはじめた。

「……やっぱり、ただの優しい人じゃないよね」

そもそも、けっこう酷い男じゃないの？ 昴君で。

あらやだ、今更気付いちゃった、この子！ではなくて。

少し混乱しているのか、興奮しているのか。とにかく落ち着いて今までの出来事を整理する。

「そもそもー、私を好きでもないくせに恋人にしてー、数々のセクハラ行為をしてー、最初は限定でお付き合いみたいなこと言ってたくせにやっぱり関係続けようって……もしかして女の身体に目覚めたんじゃないのか？」

むう。

眉間に皺を寄せて考えてみても、それがなんだかいちばんしくりくる。もしかしくなくても、私ってば途中から身体目当てみたいにされていたんじゃないのか。

そうだよ！

なんとなく、やなぎんの言葉と今までの昴君の手馴れた感じと端々の言動から察するに、彼は案外乱れた生活とやらを送っていたにちがいない。

女性と交際したことはなくとも、それなりに経験はあるのかもしれないし、男とはそれこそ大変な経験をしているのかもしれない。そう考えると、つまり後腐れない関係がベストで、しかしそうするには年上を相手にするしかない。

昴君は、同じ年の、しかも女の子に興味を抱いている所があったんじゃないだろうか。だからこそ、あんな提案をしてそれを飲み込むお人よしを探していた。

まんまとみつかった私は、ずるずると昴君とあんなことやこんなことをし……いやいや。

さすがにそこまで悪い男だと考えるのはこころが痛む。仮にも好きになった人なのだから。

やなぎんへの想いは、本当だとしても。女の子への興味も、やはり本当だったのかもしれない。だからこそ、私みたいに絶対に彼を好きになる可能性のない相手をみつけて、普通のデートみたいなことをしてみたかったのかもしれない。

「……ひょっとしたら、やなぎんと遊んだらこんな感じなのかな、とか、そんなこと思われていたんだったりして」

口に出して笑って、あまりにも大きい可能性にかなり憂鬱になった。そうか、私は、擬似恋愛の都合良い相手だったというわけか。その過程で、少しでも私に情をうつしてくれたら、可能性もあった

のかな。

なんて。私も往生際が悪い。

「でも、そうか」

なんだか、そこまで考えて、多少すっきりした。今度会ったときには、ちよつとした意地悪でもしてみようか、なんて気にはなるくらい。

そうだよ。昴君は優しかったかもしれないけれど、私を大切にしてくれていたわけではないんだ。そもそも、あれだけ好きに扱われて、優しいもないよな。そこに気付かないってちよつと盲目すぎたんじゃないのか、私。

思考が纏まった頃には、すっかり陽が傾いていた。

「言ったでしょう。千絵子はいませんよ」

「でも、今日、具合が悪くて早退したって」

「さあ、知らないな」

家路に着いた私は、もやもやとすっきりという両極端のこころを抱えながら、しかし部屋を飛び出す前よりは格段に精神が楽になったと感じていた。

その角を曲がれば家が見えてくる、というところで、聞き慣れた声が耳に届く。思わず足を止めた私は、そつと顔だけ出して様子をうかがった。

視認したそれに間違いがなければ、あれは。

昴君だ。昴君がなぜ家を訪ねてきたのだろう。十中八九、私に用事なのだろうけれど、門から出てきた父は、隙のない笑顔で腕を組みつつ昴君をみつめている。会話から察するに、家の前で押し問答をしているようだ。

ここで私は首を傾げる。だって、父が昴君を家にあげない理由が

わからないのだ。きっと昴君は、お見舞いに來た友人です、とか、そういうことを言ったに違いない。だったら、ありがとう、と言って家にあげるのが本来のはずだ。

私は、このままの位置でしばらく様子を見守ることにした。

「千絵子さんが、会いたくないと言ったんですか？」

「君は、千絵子に門前払いをくらう心当たりでもあるのかい？」

父よ、その返しはどうかと思うが。ああ、昴君が珍しくむっとしている。

「そんなことはありません」

「そう？ だったら私の言葉を疑う理由がないのじゃないかな？ お友達なら、携帯電話の番号くらい知っているんでしょう？ 連絡したらどうかな？」

「メールを試みたんですけど、返信がないんです。中で待たせてもらえませんか？」

「申し訳ないけど、私も少ししたら出かけなければいけないくてね。今日の所は、お引取り願えるかな？」

「……っまた来ます」

唇を噛んで、やっとあきらめたのか昴君がこちらへと歩いてくる。歩いてくる？

まずい、このままではみつかってしまうではないか。

あたりをみまわして、向かいの家の駐車スペースに目をつければ、私は素早く奥へと隠れた。息を殺して、昴君が通り過ぎるのを待つ。彼のうしろ姿が見えなくなるのを確認して、私は家へと向かった。玄関に入ろうとしていた父の背中へ声をかける。

「ただいま」

「！ おかえり。 ひょっとしてどこかに隠れていたの」

目を丸くした父は、次には優しく微笑む。私は、そんな父の目をじっとみつめた。

「……父よ、ありがとう」

「お礼を言われるようなことはしていないよ」

寒いからお入り、という言葉に、私はうなづく。

昂君。

どうして、去り際のあなたの表情は、哀しそうだったのだろう。まるで、何かの苦しみに耐えるみたいに。

私の言葉は、昂君のところにどう届いたのだろう。

考えても、もちろん私にはわからなかった。

第15話

次の日が金曜日というのもあり、休みたい、という気持ちは少なからずあった。けれども、露骨にさけたところで、いずれ顔を合わせる事実が変わらない。むしろ、色々と考えをまとめた結論は、変に逃げるべきではない、だった。

よく言うではないか。逃げる者を追いたくなる、と。それが昂君に当てはまるのかはわからないが、昨日から一転、私は自身の幸せを優先しようと決めてしまった。

開き直るの早いね、と自分に語りかけてしまったが、だって色々考えて冷静になってみたらそう思うじゃない、さんざんいかがわしいことをされたのだから。ではなくて。

まあ、つまり。

いちばん無難なのは、「良いお友達でいましょう」ということなのだ。そうすれば、変に距離が開くことはない。恋人としか出来ない行為をしない限り、彼の隣に立つのは、少し辛いかもしれない。も、いつか心穏やかに過ごせる時来よう。

私は、多少晴れやかな心持ちで、家をあとにした。いつもよりも登校時間が遅いのは、朝つかまりたくなかったというのは否定しない。だってさすがに、もう拉致されるのはかんべんなのだ。あれでけっこう押しが強い昂君は、怒ると怖い。昨日の父との一件もあるから、苛立っているかもしれないし。

なんだかんだ、理由を付けては彼と会う猶予を延ばしているのだと、私自身気付かないではなかった。けれどそれくらいは許してほしい。

色々考えて、気付いて、悶々と燻る想いはあれど、私は失恋仕立ての女なのだ。失恋相手に会うのは、どんなに凶太い人間だって、辛さはともなうものであろう。相手が、私を嫌いなわけではないのならばなおさらのこと。

たとえば。

昂君から、再度お付き合いをしたいと言われてしまったら、私は彼を今度こそ軽蔑するだろう。だから、笑ってほしい。これからは改めて、友人としてよろしく、と。そうすれば私は、辛い気持ちをしばらく引きずってしまっても、晴れやかに失恋することができるのだから。

好きになったからといって、勝手に理想を押し付けるのは、間違っている。本来の彼がどういった人間なのかも、きっと私は不足が過ぎるほど把握できていないのだろう。しかし、彼にこれまで触れた優しさが、すべて欲望に因るものであったとしたならばと考えると、新しく芽生えた私の中のなにかが蹂躪されてしまった気分になる。

すごく、身勝手なのはわかりきっている。けれども、もう、がっかりしたくないんだ。昂君を綺麗だと感じた私を、私に否定させないでほしかった。

まあ、全部結局は憶測で、実際問題、昂君が本当に女性の身体に興味を沸いたのかはわからない。どういう意図で私の身体に触れたのかも、いまだわからないのだし。さすがに、最初に話してくれた女慣れをするためというのは、どうにも無理がある気はする。だって、平気そうに触っていたし。

それとも、私は女性に値しない存在だったのだろうか。ペットというか。なんというか。それはそれで少し傷付くな。

まあ、あれこれ考えても仕方がない。とにかく、彼が友達を受け入れてくれたのなら、私も過去をうだうだ言うのはやめてしまおう。そう決めた。

思考をあちこちにとぼしつつ教室へ訪れた時は、遅刻の瀬戸際という時間で、どれだけゆっくり歩いてきたのだろう、と多少自分に呆れたのだった。

「野田っち、だいじょうぶなの？」

やはり、と言ってこちらに手を振るやなぎんに、私も手を振り返す。教室に入っただけで女子の注目を浴びるとは、相変わらず目立つ二人組だ。

「おかげさまで。昴君、父から聞いたよ、お見舞いに来てくれてたって？」

私が振り返って微笑むと、昴君は多少戸惑いを見せつつも微笑んだ。どうやら、私が普通に接しているのが意外なようだ。ちよつとにんまりしそうになる。私ってあばずれじゃなくて悪女なのかもしれない。ううむ、なんとも官能的な響きである。決して官能的な成分は含まれておりませぬが。

しかし、昼休みではなく間の休憩時間に来るとは意外だ。すぐ終わってしまうのにな、10分なんて。

「……お昼ごはん、いっしょに食べられる？」

「うん？もちろん。最近はそれが日課じゃないか」

訊ねる昴君に首を傾げて、なぜそんなことを問うのか、といった風情で言う。完全に面食らったのか、昴君はそう、よかった、と呟いた。

去り際、昴君がなにかの痛みを堪えるような顔をしていたのが少し気になったけれど、声はかけずにそのままわかれた。

「……ふうん」

「？ どうした」

「どうした、は私じゃないでしょ。ま、せいぜい頑張ることね」

「ありがとう」

「あんたじゃないわよ」

にやり、と男前な笑いかたをしたあかりが発したその意味が、私はまるで理解出来なかった。じゃあ誰が頑張るのやら。

というか、何を頑張るのやら？

「あかり、ちょっと良く女子が集う場所に行ってくる」

「……はいはいトイレね、じゃあ私は先に図書室で席取っておくわ」
「かたじけない」

四時間目が終わり、あかりは特に昴君たちを待つことなく、まあ彼女らしいが、いつも通り図書室へと向かった。寒いとんだかトイレに近い。女性は特に色々冷やしちゃいけない。女子高生が言うのもなんだけれども。

そうなんだよな。私は特別に足を出したいわけでもないのだけれど、こうしないと悪目立ちしてしまうのだよな。

よく、物語なんかで見かけるんだけど、目立たぬように優等生でいるように、とやたら校則に忠実な服装をする主人公がいる。けれども現実あれをやったら、目立って仕方ない。私立ならばまだ厳しい校則もあるだろうからちょっと真面目な子扱いでそれこそ済むかもしれないけれど、ここみたいな公立高校でそれをやってしまったら、生徒どころか教師からも妙な視線を超越されるのは必至である。

というわけで、没個性でいる為には結局、一般的な女子高生を連想する格好をしなければならぬのだよね。だからこういう姿に落ち着くのだけれども。

これは、私の中で惰性なのだな。いうなれば、家でのジャージといっしょ。楽だからこの格好なのだ。もしもこだわりがあって、確固たる意思を持っているならばそれに従った服装もしていたのだろうけどな。あいにく私は特別目立ちたいわけでもなく、特別こういう格好が好きやら嫌いやらもないので、まあ、平凡がいちばんと

この足を強制的に出す丈のスカートを履いているわけなのだがね。
と、そんなくだらないことをたらたらと頭の中でこぼしつつ、私はトイレへと向かうわけなのだけれども。ううん、廊下はなんとも冷える。

「昂ー」

「なんだよ」

トイレへの入り口である扉を開こうと手をかけた瞬間、廊下を歩く声が聞こえる。昂、という言葉に反応して思わず身体の動きを止めてしまった。

廊下側とは向かい合って水道が位置しているから、そこで手を洗っているふりをして少し屈めば、おそらく私の姿は見えない。このまま、盗み聞きすることも可能だ。

少しの葛藤があったものの、卑怯な自分が顔を出した。

「野田っちと、なんかあったでしょ」

「なにかって、なにかな」

「言葉遊びして誤魔化すのーしー。ひよっとしてフラれた？」

不機嫌な昂君の声と、笑い声混じりに響くやなぎんの声。廊下を歩いているのはふたりだけだが、教室内にはたくさんの生徒がいる。あの2人の会話って、なんとなく聞かれてしまいそうな気がするのだけれど、今の内容は大丈夫なのだろうか、と少しはらはらした。
やなぎんの質問の後に数秒の空白があり、やがて鈍い音が響いた。これは、ひよっとしなくとも昂君がやなぎんに暴力行為をしたのだろうか。あまり想像できない姿だ。いや、見えてないけれどもね。

「元々、始まってなかったんだよな」

ため息混じりの言葉に、私はどきりとする。同時に、胸が軋んだ。そうだ。私たちは、そもそも始まってすらいなかった。しかし当然ながら、昴君の発言にやなぎんは納得できずに、疑問を口にする。

「は? ……だってオツケーもらったから付き合ってたんでしょ?」

「……あれは、詐欺みたいなもん」

「はあ!？」

「だから、片想いから進展なんてしてないんだよ」

え。

ちよつとお待ちなさい。今なんと?

「おい、詳しい経緯ちゃんと教えてよ」

「まー、お前も巻き込んだみたいなんだし……そうだな、後で話すよ」

ふたりの足音と、話す声が遠ざかる。私は、何のためにここに来たのかも忘れて、その場に棒立ちになった。まるで根が生えたかのように動けない。

今の会話の意味は、一体、どういうことなのだろう。

ちよつと、と、非難がましい声が耳に届いて、私はやっと手洗い場から身体を動かした。すみません、と小さく不機嫌な女生徒に謝罪する。

用も足さないまま、ふらふらとトイレの出入り口から廊下に数歩移動して、私は間抜けな顔で壁に背中をあずけた。

片想いつて。

昴君、そう言っていたよね。

「知ってたの……?」

私が、彼を、好きだということを、知った上で、私と、付き合っていたの？

いつから？ ひょっとして、私が自覚する前から？ それとも。

ああもう。そんなことどうでもいい。

私は、恥ずかしかった。なぜなのかわからないけれど、恥ずかしくて、顔を真っ赤に染め上げながら、ぼんやりと涙が滲んでくる。

悲しくて、恥ずかしくて、でも悔しくて、私は唇を噛んだ。

からかっていたのか？ だから、私にあんな行為を？ 弄ぶように、あざ笑っていたの？ 私が信じた彼の優しさは、すべてがまやかしかなかったのだろうか。

ひどい。

ちがう。

でも、それでも。

勝手に期待して、勝手に失望して。ばかみたいだと、わかっているよ。でもさ。

どうして、現実をそう突きつけるのさ。せめて、優しい君の幻想を信じていたかったのに。少しでも、やなぎんを好きだと苦しんでいる昴君の誠実さは、本当だと、信じたかったのに。ひょっとして、苦しんでさえいなかったの？ おもちゃを探していただけだったの？ わからない。ぜんぶわからないよ、昴君。

「ちーちゃん？」

目の前が暗くなって、しまいには座り込みそうになった私に、知った声が降りてきた。反応した私は、ゆるゆると顔をあげる。

「……まー、くん？」

涙が滲んできているからか、視界がぼやけてみえないけれど、確

かにそこに立っているのは、まーくんだ。

高木正浩たかぎまさひろは、私の従兄弟である。母親の兄の息子が、まーくんだ。中学に上がってから交流がなくなっていたけれど、同じ高校に入学したとき、改めて私たちは言葉を交わすようになった。時折、家にも遊びに来る。

彼は、父と似ている。というか、おじさんも父も同じように性格が穏やかだからだろう。血筋といえるかもしれない。あと、女性には優しくするように、というのが父とおじさんの教育方針であるらしかった。

でも、おじさん。彼は、罪作りの男に成長しようとしています。私のことを好きなのかもしれないと期待する女子が彼の周りには多すぎるのだよな。と、そんなことに思いを馳せてどうする。今はものすごく関係ない。

でも、驚いたことに思考はそんな彼のプロフィールを長々と紹介していたくせに、私の涙は止まらなかった。むしろ、身内に会った気安さからか、必至で食い止めようとしていた涙があふれてきてしまったのだ。

「ちーちゃん、大丈夫？ね、歩ける？」

「だい、じょぶ。まーくん、ごめん」

「……具合悪い？どこか痛い？」

首を傾げながら私を覗き込むその姿が、ひどく優しく、父を思い起こしてしまって、よりいっそう甘えるような心が芽生えてしまう。いけないとわかっているのに、ついには嗚咽までもれはじめてしまった。これじゃあ、まーくんが私を泣かせているみたいな図になってしまう。

私は、ここから立ち去つてと言おうとしたけれど、それより先に、彼が行動に出た。

ふわり、と。

私の身体が地面から浮いた。

「とりあえず、保健室行こう？無理に涙は止めなくていいから。恥ずかしかったら、俺に顔を隠してていいよ」

「まーくん……ごめ」

横抱きにされた状態で、近くなった彼の顔をみつめながら涙を流せば、まーくんが困ったように笑った。

「こんなちーちゃんほっとけるわけないんだから、謝らなくていいの」

すっかりつかまってね、というまーくんに、私はうなずいた。

最初はそのままの状態だったけれど、恥ずかしさが増して、結局少し移動したら私はまーくんの服に顔を埋めてしまった。周囲からの視線はきつとすごいことになっているに違いない。

まーくんは、昴君や、やなぎんのようにすぐ目立つ人ではないけれど、熱心に好きだと言う女の子はいつも一定の数いて、高校に入学してからそういう人々に従兄弟だと認知してもらうまでが大変だった。

今回、こんな目立つ行動をしてしまって、まーくんにそれこそ迷惑をかけなければいんだけれど。

ぐるぐると色々と考えていたら、まーくんに声をかけられる。

「ちーちゃん、携帯電話は持ってる？あかりちゃんとお昼ごはんとするつもりだったよね？鞆の中なら先に保健室へ運んだあと、俺が鞆を持って来ようか？」

顔を上げると、教室の前だった。トイレからまだそのくらいの距離しか歩いていなかったのか。

私は大丈夫、と声をかける。

「というか、少し落ち着いたから、下ろしてくれていいよ、ごめんね、まーくん。鞆、今取ってくる。……あの、ついでにちょっと甘えてもよいかな」

少し、混乱しているから第三者の意見を訊いてみたくなって、私はまーくんへと視線をやる。微笑んで、もちろん、と言ってくれる彼は、今から包容力たっぷりだ。きっとまーくんの彼女は幸せなのだろうな。

「千絵子！」

まーくんの腕の中から出て、私がきちんと自分の足で立った瞬間だった。廊下中に響くのではないかというくらい大きな声で名前を呼ばれた。

前を向けば、そこにいたのは、昴君だ。なぜかものすごい形相でこちらを睨んでいる。

「……まーくん、鞆を取ってくる」

「わかった。でも、彼はいいの？」

「今は、いい」

「そっか……うん、わかった」

昴君の存在を無視して教室に入った私を、彼は追いかけようとした。しかし、私が鞆を取って振り向いた時には、昴君がまーくんに待ったをかけられていた。

にっこりと微笑んで、まーくんが昴君にゆっくりと声をかける。

「そんなに怖い顔をしたら、逃げられちゃうよ」

「！　ごめんね、ちょっと今余裕がないんだ」

「そうだね、そうみたい」

どちらかというと同系統の柔らかい顔、物腰のふたりが並ぶと、
眼福だといえなくもない。

しかし今はそんなことどうだっていいのだ。

「まーくん、お待たせ。いこう」

「うん」

「千絵子さん、僕らとお昼を食べるんじゃないの？」

昴君の言葉に、私はなるべく無表情にならないように頑張って微笑んだ。

「ごめん、ちょっと彼と話したいことあるんだ。あかりにも伝えておいて、まーくんといっしょだって言えばわかるから」

「……まーくん？」

眉間に皺を寄せて繰り返す昴君に、呼ばれた本人のまーくんがにっこりと微笑む。その表情が気に入らないのか、昴君はますます不機嫌そうな顔をした。

私は、まーくんの手を取って、昴君にじゃあね、と声をかける。

「ちーちゃん、本当にどこも具合悪くないの？」

「大丈夫だとも。私にお昼を抜かせと言うつもりなのかい？」

「いや、そんなことはないけど」

笑い合う私たちのうしろ姿を、昴君がずっと睨んでいる。

振り返って見たわけでは決してないけれど、間違っていない気がした。

第16話

「ちーちゃんって、佐藤君と付き合ってるの？」

腰を落ち着かせたのは、写真部の部室。ここは鍵が四六時中解放されているのだが、いいのだろうか。部員であるまーくんは、大丈夫だよ、と柔らかに微笑んでいた。

文芸同好会よりは幾分か広いものの、ここもそこまでの規模ではない。部員数がぎりぎり部として存続できる人数であるから、扱いはそこまで変わらないのである。

そしてパイプ椅子に向かい合って座り、長机に弁当を広げたところで、冒頭の質問を投げかけられたわけであるが。

私は一瞬思考がかたまり、全身に緊張が走った。

強張った全体をほぐしたのは、校庭から響く喧騒だった。

我が同好会にあてがわれた部屋と決定的に違うのはこれ、窓があることだ。四階であるため不便といえばそうだが、閉塞感と比べればこちらのほうがやはり良いと感じる。豆粒ほどの生徒をながめ、真冬だというのにサッカーやらバスケットやらをする彼らをみつめ、元気だな、と呑気に呟いた。

それから。

私は横に向けていた顔を真正面へと戻す。少し真剣な顔をしているまーくんと、目が合った。

「……付き合っていないよ」

「ふうん？でもそういう雰囲気だったじゃない？」

「？時にまーくんはわからないことを言う」

「わからないのはちーちゃんだよ」

くすくすと笑うまーくんに、私はますます首を傾げると、次に彼

はため息を吐く。それは、誰に向けたものなのか。この場合、やはり私なのだろうか。私の何に呆れたのだ、まーくんは。

いいかい、と言って、まーくんは自身の瞳を指し示した。私はその仕草につられて、彼の瞳に何かの答えが隠されているのかと思っ
てじっとその奥を探ろうとする。

「佐藤君の、俺たちをみつめる目。どんな風だったか、覚えている？」

まーくんの言葉は予想外で、しかし答えの知りたい私は、素直に先程の昴君を反芻してみる。思い出した次の瞬間、怖くなってぶるり、と身震いした。

私の反応だけでじゅうぶんだったのか、目の前のまーくんが微笑んで頷いた。

「わかったでしょう？ 完全にあの瞳は俺をほってその男とどこへ行くつもりなんだ、っていう目だったじゃない」

「……だって、でも、昴君とはもう、恋人でもなんでもないのに」

「もう、ってことは、やっぱり付き合っていたんだ？」

「うーん……付き合っていたと、いうか」

私は、悩んだけど、まーくに話す事にした。ただ、体の関係の部分はさすがに省いて。女性というものがどういった生き物なのか。それを知りたくて、時間を共有しているのだと、そんな風に説明する。

最後まで話終わって、昼食も食べ終えた頃、まーくんは微笑んでいた。

笑みが強すぎて、少し怖い。

「……馬鹿なことを」

「え？」

何を言ったのかよく聞こえずに、訊ねると、まーくんはなんでもないよ、と首を振る。

「ちーちゃんは、佐藤君が好きなんだね」

「……うん。だから、傍で見ているのが辛くて、さらに不毛だと思って、終わりにしたんだ」

「賢明だね。流されなかったのはえらい」

手を伸ばして私の頭を撫でるまーくんは、私は複雑な表情で返した。

ほめられるようなことをした覚えはまるでない。結局、最後まで彼の面倒を見きれずに投げ出したのは私だし、最初から彼を受け入れなければこんな捻じ曲がった関係は出来上がらなかったはずだ。しかしまーくんは、もっともらしく、彼がそんなややこしい提案をしなければ良かった話だ、と指摘する。

確かに、昂君はややこしいかもしれない。ややこしいし、案外素直ではなくて、私は彼の本音が、いつも薄皮一枚のところまで止められてしまっている気がした。きつと、いちばん肝心な部分は、いつもはぐらかして答えてくれなかった。だからこそ、彼の真実を知りたいのにわからなくて、でもわかったらと思うと怖くて、私はあきらめてしまったのだ。

「ちーちゃんは、この機会に彼を客観的にみつめる必要があるんじゃないかな」

「客観的に……みつめる？」

「ほら、たとえば。なぜ佐藤君は、俺とちーちゃんを睨んでたんだと思う？」

「……お昼をいっしょにとるはずだったのに約束を反故にしたから

「？」

私の言葉に、まるでナンセンス、といわんばかりにまーくんが首を振る。彼の背景からはやれやれ、という文字が見えそうなくらいわかりやすい身振りである。

いや。

自分でもこの答えはないよなあ、って思うのだけれどもね？だって他になにがあるのだろうか。

もっと予想外な何かなのだろうか。

「……まーくんが好みのタイプだったのかな」

「……いや、うん、いいけど。彼はそんな浮気性なの？」

呆れを通り越して戸惑いすら見せているまーくん。いや、わかってるってば、これもないよね。

それでも一応、まーくんの言葉に答える。

「わからないけど、やなぎんの話では軽いお付き合いを幾度もしているようだった。昴君自身、いっしょに過ごすことには慣れているみたいだったし」

「軽薄な男だと、ちーちゃんは思うの？」

私は、無言で首を振る。

そもそも、そんな風に移り気であるならば、昴君が時折見せるあのせつなそうな、何かに耐えるような表情は、見せないと思う。きっと、傷付いているから、あの綺麗な顔を歪ませるのだ。

私は、わかる。

恋を知って、今、わかったのだ。あの意味が。

昴君には、大切な存在がある。そして、叶わない想いを少なからず抱いている。私はそれが、やなぎんに対するものだろうと思って

いるから、だからこそ、辛い。

叶わないのだと、私もまた、痛感してしまうから。

またひとつ、整理してみると彼の中を知れた。そうか、あの顔は、そういう意味で、間違っていない。きっと。

「わからないのは、私なんだよ」

「？　ちーちゃん」

呟いた言葉に、まーくんは首を傾げる。

「私の存在って、昴君にとってどれほどの大きさなんだろうって、ずっと考えてるけれど、わからない」

「……それは、むずかしい問答だね」

「きつと、そんなに小さいものではないと、思うんだ。希望的観測でもあるかもしれないけれどさ。でも、彼にとって、私は逃げ道なのかもしれないから」

「逃げ道？」

「昴君、言ってた。やなぎんは異性としか恋愛できない男であるから、万に一つの可能性もないって。だから、疲れたって。忘れさせてほしいって」

頬杖を付いて、無意識に外の景色を眺める。

冬の空は、空気が澄んでいて、とても綺麗だ。

気付く。

私はまだ、昴君以外のものを綺麗だと思えるのだと。こうやって、私のなかの気持ちは、少しずつ消化されていくのだろうか。いつか、特別じゃない、綺麗という言葉を、彼にむかって放てるのだろうか。私がぼんやりと眺めている窓の外を、まーくんも同じように見やる。ふたりでしばらく青空と流れる雲をみて、やがてどちらからともなく立ち上がった。

「まーくん、ありがとうね」

「俺は何もしてないよ」

「ううん、色々助けてもらった。うれしかったよ」

「ふふ。ちーちゃん、近付きすぎたら、色々見えないかもしれないけれど、ちょっと離れたら、きっとわかるよ」

「ああ……さっきの、話の続き」

客観的に、というやつだな。それが冷静にできればいいのだけれども。

むう、と眉間に皺を寄せれば、まーくんは声をあげて笑いつつ、私の頭を撫でてくる。

まーくんの手はあたたかくて、心地よい。けれど、ときどきしない。

人のところというのは、不思議なものだ、と、改めて感じた瞬間であった。

自動販売機でココアを買いたくなり、教室へとむかうまーくんとわかれた。

昼休みもあと10分ほどで予鈴が鳴ってしまうから、急がなくては。

少し早足で階段を下りようと足を踏み出した時、一瞬だがたちくらみのようなものが起こり、身体が僅かながら傾いだ。

「? どうしたんだろ……」

ひよつとすると風邪を引いたか、はたまた知恵熱でも出たのだろうか。考えたら、ここ最近ずっと考え事ばかりしている。普段あまり使わない脳みそを思いのほか酷使していたのかもしれない、私はそんな自分に苦笑してしまう。

今度は少し慎重に、一階の自動販売機まで歩く。階段を踏み外したら、それこそ洒落にならない。平坦な道になったところで財布の中身をちらりと覗き見しながら、小銭がちょうどあることを確認すれば、私は俯いていた顔を上げた。

目的地はすぐ目の前。あと数歩進めば、糖分が摂取できる。

だというのに、私の足はこれ以上進んではならない、と強制的にその動きを止めた。脳が、本体へと危険信号を送ったのだ。

「……ココアでも買いに来た？」

にっこりと微笑む昴君は、男性だというのに実に艶やかな表情を作ってみせる。あまりに整いすぎたその美しさに反応したのか、私の背中に一筋の電流が走った。

その身震いは、決して恐怖からではなかったが、どうやら昴君は状況的に私が竦んでいると判断したらしい。まあ、間違っではないだろう。だって、私は無意識下で彼にこれ以上近付くのは危険だと思ったのだから。

昴君は、くつ、と今までにない皮肉じみた表情で笑うと、ゆっくりとこちらに向かってくる。

あ。

だめだ、なんでかわからないけれど、怖いや。

たら、と額から滑り落ちた汗に、私はやっぱ怖がってるんじゃないか、と脳内で自分に言ってみる。いやしかしだね、これはつい数秒前の昴君の腹に一物あるかのような笑顔をみたらじゃないのかね、いやいやしかし元々どこか怖がっていたからこそ歩みを止めたのじゃないやいや今はそんなことどうでも。

そう、考えている場合じゃなかった。

がし、とつかまれた私の左手首。昴君の右手が、食い込んでぴりりと痛みが走った。それに反応して顔を歪めせると、昴君がますます笑みを深くした。

「もっともらしいことを言って。本当の事を隠すだなんて、ずいぶんじゃないか」

いつもより数段低い声音ではなれた言葉。その意味がわからずに、私は困った顔で彼をみつめる。昴君は、苛立ったように舌打ちしてみせた。

こんなに露骨な彼を、はじめてみる。一体、どうしてここまで怒っているのだろうか。

「まーくん、だっけ？幼なじみなんだってね」

幼なじみ？まあ、昔から仲良くしている人間だという意味では間違っていないけれど。私は、まあ、と小さく返答する。

「彼のこと、好きになったんでしょう？僕と付き合ってて、自分の本当の気持ちにでも気付いた？だとしたら、僕はとんだピエロだね」

さつきから何を言ってるんだろう、この男は。

確かに、まーくんは私にとって大切な存在である。しかし、従兄弟というのは、案外、近すぎる距離であると、あくまでも私達個人の意見であるが、そう感じているところがあるし、周りもそれで納得してくれる事が多いから、やはり多かれ少なかれ、そんな風に育つ関係に該当するのではなかろうか。

私とまーくんは、割と幼い頃からそういった対象としてお互いを排除している傾向にある。

そもそも、兄妹のように近く育って、父と似た雰囲気を持つ彼を、どうして私が恋愛対象として見れるのだろう。お風呂に入ったこともあるし、高校生になってから並んで寝た記憶だってある。もちろん、何も事件は起きていない。

昂君は、そういった背景をまったく知らないのだろうか。あかりから、こういった風にまーくんの話聞いたのかはわからないが、さすがにありえない誤解である。

早々に否定したほうがよいだろう。まーくんにも色々と迷惑がかかる。

「あのね、昂君。まーくんとは」

「うるさい」

「！ え」

「そんな風に他の男を呼ぶな！」

激昂したように叫ぶ彼に驚いてかたまれば、次には柔らかいなにかが触れた。

唇の感触だと気付くまでに、それほど時間はかからなかった。複雑であるが、昂君によって馴らされた体は、それを十二分に覚えていたのだ。

「ん……っふ」

苦しくて少し開いた唇の隙間を、奪うように昂君が埋める。無遠慮に割り込んだ舌は、最後にした接吻のときよりも熱かった。

やがて響く水音に、理性が崩壊しそうになる。やめて、と。身体を押して否定の意思を伝えても、正直な本能は彼を求めているのだから、まるで説得力がない。

なかなかきちんとした抵抗ができずに、昂君の舌に、唇に、翻弄される。

「……淫乱」

「！」

「他に、好きな男がいるくせに、俺で反応してる」

浅い呼吸を繰り返し、涙を眦に溜め、彼をみつめれば、実に冷ややかにこちらを見下ろしていた。

瞬間、私のところは凍りつく。

今、まちがいではなければ、昴君に軽蔑されたのだ。私は、女として、彼に、侮辱された。

事実が突き刺さると同時に、冷たい彼の手が私の頬に触れる。

たまらず身震いすれば、ほら、と昴君は小さく笑いつつ、耳元で囁いた。

「キスだけで、そんな反応するくせに。まーくんにも同じような顔をするの？」

「や、おねが、やあっ！」

「大声を上げると、誰か来るかもよ？見られてもいいの？」

酷い言葉の数々に、私は大粒の涙をこぼす。

どうして、昴君。そんな、酷いことばかり、言うの。

これ以上、私を抉るような事を言わないで。どうしてなの、何がそんなにあなたの怒りに触れたの。

わからなくて、涙を溜めた目で彼を見れば、ぞっとするくらい冷やかな顔で私を見下ろしていた。綺麗なその顔を、今は視界に留めることすら望まない。

だんだんとぼんやりしてきた頭の芯を意識しながらも、口角を歪に曲げた彼の顔を認識すれば、私はまた悲しくなった。

「ねえ。教えてあげようか？まーくんに、千絵子は首が弱いんですよって」

「ひど……い」

悲鳴に近い嬌声をあげながら、なんとか呟いた一言。それに反応

した昴君は、一瞬動きを止めた。

「……どこにも、行かないで」

「え……？」

昴君の言葉に、私は逸らしていた視線を向ければ、真っ直ぐに彼の瞳をみつめる。

涙こそ流していなかったけれど、はつきりとわかった。

今、彼は泣いているのだと。

「はなれていっちゃ、嫌だ。最初から、卑怯だってわかってた。間違ってるってわかってた！」

「昴君……？」

「でも、しょうがないじゃないか。どうしたって手に入れたかったんだよ、千絵子を！」

何を、言っ、るの？

昴君。

昴君、昴君、昴君。

おねがい、あなたの思ってることを、全部聞かせて。

なんだっていいんだ、どんな些細なことだってかまわないから。

君の、隠していたほんとうを、教えてよ。

「千絵子……やだ、別れるなんて、言わないで」

「え……？」

お願い、どこにもいかないから。逃げたりなんてしないから。

「千絵子、好きだ。俺以外のところへ行くなんて、許さない。いかせない」

「昂君……?」

泣かないで。そんな苦しそうな顔をしないで。させているのは、私なの? ねえ、昂君。

なぐさめたくて。泣く必要なんてないんだよ、と伝えたくて。手を伸ばしたいのに。

「……千絵子さん」

あなたにとって、私は、どんな存在なの?

「……………好きなんだ」

きつく抱きしめられても、夢の中をたゆたう私には、そのぬくもりをはっきりと感じることができない。

不自然に荒くなった私の呼吸に気付いたのか、先程まで冷静さを失っていた昂君が、驚愕に目を見開いた。

「千絵子!??」

焦ったような声に名前を呼ばれて、朦朧とする意識の中、大丈夫だよ、とだけでも伝えたくて、私は微笑んでみせる。

何度も名前を呼ばれながら、昂君にとって私がどんな存在なのか頑張っと思って考えてみたけれど、やっぱりわからなかった。

ねえ、心配してくれるの?

もしそうだとしたら、ちょっと嬉しいんだけどなあ。

第17話

目覚めた瞬間、その顔を探してしまったけれど、軋むベッドの音につられてやってきたのは、当然だけれど保健の先生だった。

しかし私、どれだけ失神すれば気が済むんだろう。昴君と会ってから毎回のように意識朦朧としてたら危ないじゃないか。いやまあ、病気じゃない事とかでも意識持たてられてるけれどもさ。いや、そこは考えないようにしようじゃないか。

阿呆な事をあれこれと思っていれば、心配顔の先生は、先程よりも不安そうな顔をしていた。どうやら、ずっと何か質問していたらしい。私は無言でぼんやりしてしまっていたので、頭でも強く打ち付けたのかと勘違いしたようだ。

私は、大丈夫です、と慌てて声をあげる。

保険医である国松先生は、可愛らしい顔で安堵の息を吐くと、それから普段の彼女らしからぬ表情を見せた。いや、おそらく生徒用の顔から少しだけくだけた表情なのだろう。

少しいやらしい笑みといえなくもない。あどけない顔なので余計えげつなくうつるのだろうか。さっきから失礼な事を思ってしまったているが。

とりあえずそんな顔のまま、国松先生は声をあげる。

「それにしても、細身かと思ったら案外すごいねえ」

「? どういうことですか」

何をさしているのかわからずに私が首を傾げつつ訊ねると、国松先生はそのかわいい顔には到底似合わない笑みをますます深める。

「佐藤君よ、決まってるでしょう。あなたのことお姫さま抱っこしてここまで連れてきたんだから」

楽しそうに弾んだ声でそんなことを話す先生に、私は目を丸くする。

彼が原因で私はこうなってしまったのだし、もちろん置き去りにされてしまったら大変困る。困るけれども、それでも昴君がここまです私を運んで来てくれた事実は意外だった。

「あなた達、喧嘩でもしているの？」

「え？」

「佐藤君、ずいぶんせつなそうな顔であなたをみてたわよ」

「……………」

「あ、そうだわ、野田さん。熱はかっておいてね」

国松先生がはい、と私に体温計を渡して、私はそれに従う。一応は言われたことだけはやっているけれど、けっこう頭がいっぱいっぱいである。

私は、とにかく混乱していた。ぐるぐると、昴君と私の今までが駆け巡っている。自分でだって、感じていないわけではない。

別れを告げてからの、昴君のあの表情。自惚れだとわかっているけれど、私が彼に向ける表情とすごく似ているのじゃないか、と思ってしまった。でもそれって、昴君が私を好きみたいだ。でも、そんなことはありえない。だって彼は、私の気持ちを知った上で、知らないふりで私を翻弄したのだから。

「ああもう！わからん！」

私は、思わずがばり、とベッドから起き上がった。と同時に、ぴぴ、と体温計が計測を終えたことを知らせる。国松先生はあまり気にしないお方のように、先程話したいことをぜんぶ話してしまったからか、私の奇怪な行動にも慌てることなく体温計を取りに来ると、

平熱ね、と呟いてデスクに座り仕事を再開した。なかなかどうして、生徒に人気のある保健医である。

ていうか平熱？ あれ、さっき私、たぶん熱のせいで倒れたと思うんですけど。

国松先生は多少高いけど37℃までいかないから大丈夫だろうと言っていた。本当だ、平熱だ。びっくり。

と、今はそうじゃなく。

ここ数日の私といったら！

無駄に真剣に悩んでしまって。暗い思考をずるずると引きずって。悲劇のヒロインになったかのように、詩でも詠んでいるかのように心は饒舌ときてる。なんと情けないことであろうか。

好きじゃないのだ。

同じ事をずるずると悩み、同じ所をぐるぐると回り、同じ壁の前で立ち往生なんてことは。はつきりさせたい。この、悶々とする心と、決着を付けたい。

「先生、お世話になりました」

「あらもういいの？」

「はい」

「ちようど間の休み時間だから、今からなら六時間目は出れるわよ」

「じゃあ、出ます」

「本当に大丈夫？ 今は下がったみたいだけど、あなた熱で倒れたんですよ」

「問題ないです、身体もすっきりしてますし」

腕時計を確認しながら国松先生が言った言葉に、私は頷いて答えた。先生は、少し心配顔をしたけれど、やがて気をつけるのよ、と言ったあと、ふ、と微笑むと、引き出しからごそごそと何かを取り出した。

「あげるわ」

「！　ありがとうございます……」

「あら、嫌い？」

複雑な表情をした私は、渡されたそれが嗜好と合わないからそんな顔をしたのではない。慌てて首を振れば、再度お礼を言って鞆を提げて保健室をあとにした。

「……ペロペロチョコ」

棒に丸いチョコレートがくつついた、例のあれだ。

昂君といい、やなぎんといい、どうして先回りして糖分摂取をさせるのか。私はペリペリと包装を剥くと、ごみを鞆に突っ込んだ。教室で捨てればいい。

ぱく、と口の中に入ると、安っぽい味が口いっぱいに広がった。

「おいし」

安っぽいけど、なつかしい味。なつかしさは、なぜやさしさまで想起させるのだろう。

信じられないことに、棒付きチョコレートをくわえたまま、私は少し涙してしまった。

教室に戻って、席に着けば、あかりは特別何かを探るでもなく、ただ大丈夫なのか、と訊ねてくるだけで、相変わらずの彼女の優しさが嬉しかった。

単に、他人に興味ないというのもまあ、あるけれどもね。

一時間授業を受けて、本日の学業はおわり。一仕事終えたかのような気持ちで息を吐けば、私は鞆を持ってあかりにそれじゃあまた明日、と告げる。あかりは、ひらひらと手を振るだけだった。やつ

ぱり彼女は他人との線引きがしっかりしているひとだ。苦笑して私はうなずいた。

「失恋していないのがいけないんだ」

そう。先程考えていた事。

昂君は、確かに色々と卑怯なのかもしれない。なにかは確実に隠しているし、ひょっとすると私のことを馬鹿にしているくらいなのかもしれないし。

けれどもだ。

私は、逃げたじゃないか。

ゆっくりと、時間と共に消滅するのを、待とうとした。

それが、時には良いこともあるだろう。告げたら誰かが不幸になる想いは、胸にしまっておくべきだ。けれども、私の場合はそんなことはない。

楽になりたいのだろう。すっきりしたいのだろう。

ならば、はつきりさせてしまえ。

先程のチョコレートで、糖分もじゅうぶん。さあ、いざゆかん。

と、足を一步踏み出した所で、私は固まった。

くるり、と振り返って、教室へと舞い戻る。

「あかり」

「なによ、怖気づいた？」

にやにやといやな笑いを湛えつつ私に問いかける彼女に、私は渴いた笑いをもらした。

「……昂君で、何組？」

あかりが呆れを通り越して絶句したのは、いうまでもない。

「昂君」

仕切りなおしてやってきた、昂君とやなぎんが在籍しているクラスの教室。近くも遠くもない微妙な位置だったのだな。私は出入り口にて彼の名前を呼ぶと、目を丸くした昂君が、声に反応してかたまった。

なんでそこでかたまる。

周囲の女子は、ひそひそと何事かを囁いていたが、やがて、ああ、と納得している様子だったので、噂は思惑通りに進行しているらしい。やなぎんとあかりに感謝だ。正確には、ふたりの姉と兄だけだ。

やなぎんは、微笑みながら大きく手を振っている。私はそれに同じように返す。

やがて我に返ったのか、昂君はやなぎんを軽く蹴り上げると、つて、蹴り上げる？ なにしてるんだ、昂君。

面食らってかたまりつつも、出入り口に立つ私の元へと歩み寄れば、昂君はどうしたの、と首を傾げている。ああ、やっぱり好きだな。綺麗な笑顔だ。

「……ちよっと、話があつて。今日用事がないならば付き合ってほしいのだけれども」

「いや、それはいいけど！ 大丈夫なの？ だってさっき」

昂君は眉を八の字にして、今にも泣き出しそうな顔を私に向ける。こんな顔ははじめてかもしれない。新発見だ。

「ああ、熱は下がったみたいだから」

私が笑って言うと、昂君はものすごく驚いたのか、目を見開いて

かたまってしまった。いや、まあそうですね。私も自分の回復力に驚いていますとも、ええ。

でも、今日はまた見たことのない彼を発見できたから、倒れて心配かけてしまったけれど、ちょっと良かったかもしれない、なんて現金なことを考えてしまった。

新しい彼をみつけるたび、綺麗だと連呼してしまう自身の貧困さに呆れなくもないが、他に私は表現の仕方がわからなかった。とにかく、これがいちばん強い感情として思考に浮かぶから仕様がないうちよつと眺めていたかったけれど、仕切りなおして私は昂君におうかがいをたててみる。

「じゃあ、部室。で、いい？」

につこりと微笑みながら話す私に、昂君は多少の戸惑いを覚えずとも、はい、と緊張した様子で頷いた。なんだか、翻弄されっぱなしだったから、こんな彼を見るのは少し楽しいなあ。

と、いかん。

私は別に、彼に復讐したいとか、そういうのじゃない。恨んでいるわけでもないのだし。

とにかく、告白して、きれいにフラれる。今の私の最重要課題である。

やなぎんとあいさつもそこそこに、私と昂君は無言のまま、部室までの廊下を歩いた。気まずい重苦しい空気が流れて、たださえ緊張してしまう私はよりいっそうこころがかたまってしまいそうだったけれど、なんとか踏ん張って堪えた。

部室の扉を開いて、私と昂君が足を踏み入れる。扉の閉まる音は、やけに大きく響いて、私の心臓が変な動きをみせた。

深呼吸をして、私は奥のソファに腰かける。昂君には、向かいに座ってもらうようお願いした。隣では、あまりにも距離が近すぎる。

それに何かを感じたのか、昴君は一瞬動きを止め、しかしわかった、と告げて腰を下ろした。寂しそうなその表情は、どんな意味があるというのだろうか。

しばらくその意味を読み解けるかとながめていたが、さっぱりわからず、やがてあきらめた。

さあ。いよいよだ。

ごくり、とたまった唾液を嚥下する。すると口の中がひどく渴いてしまつて、今すぐにでも自動販売機に走りたくなった。

そわそわとする私の様子に昴君は心配気な顔をみせる。

これではいかん。私は姿勢を正した。昴君も、それにならつて背筋を伸ばす。

「あーの、さ」

「……ねえ、話つて、さっきのことだよね？」

私が口を開いた瞬間、昴君がフライングのように先に話し出してしまった。少し狼狽したが、とりあえず彼の話に耳を傾けようと首を傾げる。

さっきの話とは、一体なんぞや。

頭に疑問符を浮かべる私が氣にくわなかったのか、昴君はむ、と眉を顰める。

「だから、まーくんだよ！どこの誰か知らないけど！」

「ああ、まーくん。が、なんだって？」

「あいつが好きになったから、僕と別れたいんでしょ？」

「はあ？なんでそうなるの。まーくんは従兄弟だよ？」

そういえば、そんなことを言っていたな。というか、それが原因でなにかあんなことになったのだったけ？

あまり思い出したいくない記憶だったので、私はとりあえず深く考

えるのをやめた。

目の前の昴君は、私が先程言った言葉を理解できていないのか、咀嚼するのに時間がかかっているのか、ぽかん、と口を開けたままかたまっている。

私は、補足説明も必要かとさらに話を進めた。

「兄妹みたいに育ったし、雰囲気は父に似すぎてるし、まーくんのこと家族として好きだけど恋愛対象としてはちょっとみれない。まーくんもいっしょだよ」

「……………じゃあ」

「まあ、好きなひとができたのは、本当だけど」

暗い雰囲気を負っていた昴君が、みるみるまにきらきらと輝いた瞳を見せる。けれども私が続けて放った告白に、彼はその大きな瞳をさらに見開いた。

わかりやすく、傷付いた、という顔をしている。けれど、それがなぜなのか、私にはわからない。

首を傾げつつ、つづきを話そうとすれば、昴君が言った。

「いやだ」

「え？」

「好きなんだ」

好き。

ああ、昴君がやなぎんを？そんなことは言われなくともわかっています。

私がそう告げると、昴君は違う、と声を高くした。今度は、私が驚いて目を見開く。

「俺は、千絵子が好きなんだ！最初に告白したのも、単純に、君が

好きだからそう告げただけなんだ！」

「……………は？」

「俺は、ゲイでもなんでもない。異性が好きな男だ。何人かの女と、付き合いの真似事みたいなものもした」

昂君の告白に、私は思考がついていかずに、かたまったまま彼をただみつめていた。

綺麗な顔が、真剣に私を射抜いている。それをみるだけで幸せで、別にこういった展開を望んでいるわけではなかった。

というか、ふられることしか想定していないのだ、こっちは。

私が大混乱を起こしているのもしらずに、昂君の告白は続く。

「でも、心から欲しいと思ったのは君だけだ。真剣な交際ってやつも、今までしたことがなくて、どう繋ぎとめたらいいのか、わからなかった。なにより、あのまま普通に告げていれば、君は俺をふるだけだったとわかっていたから」

「……………」

「だから、ごめん。こんな面倒な嘘を吐いたんだ。君に、振り向いてほしくて、本当の恋人になりたいくて」

ええと、とりあえず。昂君が異性愛者なのまでは理解しました。

あとは、えっと、なんだっけ？

ええと。

「千絵子さんが、好きだよ。どうか僕と、本当の恋人になってください」

真剣すぎる双眸が、私を真っ直ぐとみつめている。視線だけで、私の心臓はおかしいくらい高鳴っている。

どこまでも私を混乱させるこの男は、いま、なんといった？

「好きです、付き合ってください」

まるで最初からすべてをやり直そうとしているかのように、私と彼が邂逅を果たしたあの日を、昴君は寸分変わらず再現してみせた。

第18話

ぐるぐると、彼の言葉が頭の中で巡る。今、昂君はなんと云ったのだろう。

真っ直ぐとこちらをみつめる彼の瞳をみつめ返せば、吸い込まれそうになる。理解できない言葉に、私は感情をどこへ持っていけば良いのかわからない。

無言でかたまる私に、昂君はしびれを切らしたのか、再び声をかけてきた。

「千絵子さん、さっき好きな人がいるって言っていたよね。僕には、可能性は1%もないのかな」

昂君の言葉に、やっと覚醒した私は、かたまっていた身体をやっとほぐせば、なんとか先程の言葉を咀嚼する。

信じられないけれど、告白をされたらしい。

らしい、と客観的に語ってしまうのは、私がまだ現実を受け入れられないからだ。

だって。そもそも、私と彼は接点がない。一体、なにがきっかけで彼は私を想うようになってくれたんだろうか。

物言いたげな私の表情を察してくれたのだろう。昂君はふ、と苦笑いのような、自嘲するかのような微笑をみせて、やがて口を開いた。

「いつだったかなあ、たまたまその日は奏が学校を休んでてね。あいつは人一倍声が大きいし人が寄ってきやすいタイプで、いつもその流れのまま教室でお昼を食べてただけど、その日はゆっくり食べれるな、と思って、教室を出たんだ」

人と話すのが嫌というわけじゃないけど、という昴君の言葉に、私は頷く。

彼の言いたい事はよくわかる。やなぎんのように、大勢でわいわいやりながら食事をするのだって楽しいけれど、毎日それだと疲れる時だってあるだろう。昴君も柔らかい性格だから話しかけやすいかもしれないけれど、いっしょに騒ぐという意味では近寄り難いかもしれないし、事実、本人もそんなに騒ぐのが好きというわけでもないのかもしれない。

「それで、図書室に行ってみたんだ。覚えてないかな？ 席がいつぱいで、同じテーブルで食べさせてもらったんだけど」

昴君の言葉を私は反芻してみたけれど、どうも思い出せない。お昼時はけっこうそういうことがあるのだ。特に私とあかりは2人組だから、テーブルは6人座れる構造なわけで、ひとつ席を空けて座ることもできる。だから、私達はよく同席を求められるし、断ることもしなかった。

私が覚えてないと申し訳なく告げると、昴君は別に気にしていない、と首を振った。

「そのときにね、千絵子さんが言ったんだ。ずいぶんと綺麗な顔をしてますねって」

「えっ」

そ、そんなことを私は言いましたか。驚いて思わず声をあげてしまった。昴君は、思い出しているのだろう。くつくつと楽しそうに笑っている。

「あんなに真っ直ぐ言われたの初めてだよ。しかも、全然色っぽくないんだ、言い方が。ああ、この子は純粹に、綺麗だと思ってくれ

たんだなあって。まじまじと僕を見てさ、まるで絵かなにかを褒めるみたいに、そう言ったんだ」

「……それはそれは」

ということは、私が昴君を綺麗だと思ってるのすでにわかってるっていうことか。なんだろう、ものすごく恥ずかしいです。

「僕がありがとうとお礼を言ったらさ、千絵子さんいつもの調子で、いいえどういたしましてー、なんて言ってそれからまた食べるの再開しちゃって。横田さんなんか、何言ってるのよって呆れた顔してたけど、それにもマイペースに、あれそうか失礼なんだっけこういうのごめんなさい、なんて僕の方引き直して返してて、笑い堪えるのに必死だったなあ、あのときは」

「……それいつのこと？」

「んーと……2年の最初のほうだったかな。そこから目で追うようになったんだ、千絵子さんのこと」

にっこりと微笑んで言う昴君に、私はそうですか、としか言えなかった。

そんな事実は覚えていないし、そもそもそれで私に惚れる要素なんてないだろう。ともすればちょっと失礼じゃないのこの子、なんて思われててもそんなに変ではないだろう。

多分、その時の私は、どうしても本人に伝えたくなくなってしまったんだろうな。それは、すぐわかるけれども、でも、やっぱりそんな風に一方的な会話をしたことさえ覚えていなかった。

でもひょっとしたら。

その時初めて、昴君を認識して、佐藤昴という有名人を知ったのかもしれない。

「……………」

でも。

どうしよう。どうしたらいいのだろう。

彼の言葉を聞き終わって、途方に暮れる私がいた。

「千絵子さん？」

呆然としている私を覗き込むように、昴君が声をかける。びくり、と肩を揺らして彼を見れば、心配そうな顔がこちらをうかがっていた。

ああ。昼休みのこと、少しは気にしてくれているのかな。そう思ったら、少しところが温かい。それなのに、どこかが冷えていくのはどうして？単純に、この部屋が寒いからなのか。それとも。

「……嘔吐き」

「え？」

「私のこと、好きなんて嘘でしょ」

あれ。

気付いたら飛び出していた言葉に、私自身も驚いたけれど、もっと驚いたのは、他でもない昴君だろう。目を最大限見開いて、かたまっている。

でも、私の口は堰を切ったかのように止まらない。

「好きなら、あんなこと出来るわけじゃないじゃないか。今日みたいなことだって、初めてじゃない。私の身体を好き勝手触って、嫌だと言ったらやめてくれる約束だって、守ってくれなかった」

「それは、千絵子が他の男が好きだと思ったら我慢できなくて」

「それ以前にも、私の身体に触れたじゃない！騙すみたいに始めたのはそっちのくせに、今更都合の良い嘘言わないでよ！」

「……っ」

私は、言っててじんわりと涙が浮かんできた。だって、こんなのおかしいじゃないか。掌を返すかのように、私が好きだなんて。

それじゃあ、廊下の会話も、片想いって、昴君のことだったの？でも、やっぱり信じられない。だって、普通に告白してもフラれるって思ったからなんて、理由にならない。私に恋人がいない限り、昴君のチャンスは潰えるわけじゃないし、なによりこんな風に画策する彼が、本当に私を好きだとしたら、告白したって諦めるとも思えなかった。

だからきつと。昴君は私のこと好きじゃない。私とどうして別れたくないのかわからないけれど。やっぱり、カモフラージュとか。やなぎんにたいしての。

どうしても、そっちに思考がいつてしまう。最初の話が、強烈だったからなのかもしれない。

「耐えられなかったんだよ、これ以上、千絵子さんに触れられないのが。普通に告白してフラれて、そこから付き合えるようになるまで、どれくらいかかるか。一生叶わず終わるのか。考え出したら止まらなくなって、周りの男共に渡すわけにはいかないって考えたら、手段を選んでいられなかったんだ」

「また適当なこと言わないでくれたまえ」

「千絵子さん！」

「私、信じたんだよ。苦しかったんだよ。昴君がやなぎんを好きなんだと思うたび、あかりのことを好きだって言うやなぎんの気持ち、昴君が知っているんだって考えるたび、苦しかったのに！」

私の言葉に、昴君が口ごもる。二の句が継げないのか、昴君は声も出せずにそのまま黙り込んだ。

「……とにかく、私は昴君とどうこうなる気はないから」

言って、私は立ち上がる。もう話したい事はすべて言い終えた。本当は、告白してフラれるつもりだったのだけれど、この状態で言えば、じゃあ付き合おう、と言われるに決まっている。正直、今の段階でそんな風になるのは無理だった。私は、昴君を信じきる心を今は持てそうにない。

「昴君、出よう」

「……………」

「晩ごはん、作らなきゃいけないから」

私の言葉に、座り込んでいた昴君は渋々と言った様子で立ち上がる。2人揃って部屋をあとにすれば、私はしっかりと施錠した。

歩き出そうとした矢先、昴君が思わぬ行動に出た。

「……誰？」

背後から私を抱きしめるように身体を寄せ、その両腕できつく自身のからだを囲われる。

保健室での、国松先生の言葉を思い出した。確かに、細く見えて案外がっしりしている。男女の違いももちろんあるのだろう。

現実逃避なのかなんのか、ぼんやり思考をあちこち飛ばしていれば、昴君が苛立ったように名前を呼んできた。耳元で囁かれるとくすぐったくて、私は身体を振るけれど、離してはくれない。

ああ、もういやだな。

好きだと思う気持ちはもちろんそのままだから。そうじゃなくともきつと恥ずかしいのに、よりいっそうこころが揺さぶられて、きつと私の顔は今、真っ赤になっている。

「好きな奴って、どこのどいつなの」

昴君の質問に、私はどきりとする。

誰って。

今私を羽交い絞めにいるあなたです、とはもちろん言えるはずもない。

「……別に、誰だっていいでしょう」

「話ってそのことだったんでしょ？」

「それは、まあ、そう、だけど」

昴君に告白しようとしていたのだから。どもるように私が答えれば、昴君はじゃあ、と声をあげる。

せめて、耳元で喋るのやめてくれないだろうか。

「話すつもりだったんじゃないか、教えてよ」

「……やだよ、もういい。嘘吐きな昴君に、本当の事言う必要ないじゃないか。不誠実に誠実で返すなんて、理不尽もいいとこだ」

「っ俺が千絵子を好きなのは本当だって言ってるだろ！」

「……っもういいってば！」

聞いていると、苦しい。好きな人に好きだと言ってもらえているのに悲しいなんて、こんなのは嫌だ。

どうして、こんなこと言うの。ぜんぶ、ぜんぶ嘘なのに。

たまらなくなって身体を離れた私は、そのまま走り出した。後ろから名前を呼ばれたけれど、私は止まる事なく走り続ける。

今は、どう接したら良いのかわからない。昴君はやっぱり、私の気持ちを知っているんじゃないのかな。だからこそ、あんな嘘吐くんじゃないのかな。

信じたいよ、本当なら。

私も好きだって言って、昴君と笑いたい。

でもさ、できないじゃないか、そんなのは。こわいよ。もしそれすらも嘘だったら、私はもうぺしゃんこになって、二度と立ち直れない気がする。

「あれ、ちーちゃん。まだ帰ってなかったの？」

昇降口で靴を履き替える私に、後ろから声をかけてきたのはまーくんだった。笑って、こちらへと駆け寄ってくる。

「まーくん……は、どうしてこの時間まで」

「ん？たまにはと思って部屋に顔を出してたんだよ。ちーちゃん、は、なんかあったんだね」

苦笑して、私の瞳に溜まる涙を指先で拭ってくれる。ああ、また心配かけちゃったな。

「まったく、こんなに泣かせるなんて、何を考えているのやら」

「いや、ちょっとこれは、うん。色々とわけわからなくて」

「そう？あ、ちーちゃん、今日遊びに行ってもいいかな、最近行っ
てなかったし」

「あ、本当？今日は母がいないけど父は早く帰ってくるし、喜ぶよ」
「ほんと？久しぶりだなおじさんに会うの」

会話をしていたら、やがて涙は止まっていた。靴を履き替えた私
とまーくんは、そのまま歩き出す。

「千絵子！」

「！ 昴君」

怒鳴るような声で名前を呼ばれ、驚きに目を見開く。先程は苦しそうな顔をしていたけれど、今はまるで般若のような形相をしている。怖い。

そういえば、般若って怒った女性の顔がモチーフなのだったっけ。そうすると、昂君は女性的な顔立ちでもあるわけだから、まあ、この例えでも間違っていないのではないのだろうか。いや、今はそんなことどうでもいい。

とにかく、目の前の彼は怒っている。間違いなく、怒っている。

「……本当にただの従兄弟なのか」

「しつこいな、そうだって言ったよ」

睨む昂君を、私も睨み返す。昂君は、ますます怖い顔をした。

「ちーちゃん、ここは逃げずに話したほうがいいみたいだよ？」

「！ まーくん」

「思うところがあるなら、そのほうがいい。お家に行くのは、また今度で」

「……」

救いを求めるようにまーくんをみつめても、彼はただ笑うだけ。

ああ、これはだめだ。

私があか、道に逸れるような行為をすると、いつだってまーくんは微笑んで押し留める。もっとも、今の自分の行動が間違っただけで、私は思っていないんだけどな。

「佐藤君」

「……何かな」

「僕は、ちーちゃんのことを実の妹のように思ってる。だからこそお願いしたい。無理強いしたり、傷付けるようなことはしないでく

れるかな」

まーくんの言葉に、昴君は少し先程までと顔付きを変える。怒っている雰囲気はいまだ変わらないけれど、少し冷静さを取り戻したようにみえた。

「約束する」

「ありがとう」

短いやり取りを終えれば、まーくんはあやすように私の頭を撫でて、やがて行ってしまった。なんとも薄情である。いや、そうじゃないとはわかっているんだけど。

これ以上、彼と何を話したらいいのかなんて、わからない。

少し気まずくなり、私と昴君はまーくんが完全に立ち去ったあと、どちらからともなく視線を逸らして無言になっていた。しかし、いつまでもこのままではいたって仕方がない。

先に声をあげたのは、昴君だった。

「どうしたら、信じてくれる？」

「え？」

「わかってる。全部僕が悪いって。でも、本当なんだよ。本当に千絵子を好きなんだ。僕のことを好きになってくれとか、今すぐよりを戻してくれとか言わないから、それだけ信じてもらうには、どうしたらいい」

「……昴君」

真剣な彼を見て、私は困惑する。

本当なの。嘘じゃないの。どっちなのだろう。

わからない。人のところなんて、目に見えないものを、どうやって信じられるかなんて、わからないよ。

「今は……混乱している、から、ごめん。でも、努力はしてみる」

私の今のせいっぱいは、ここまでだ。告げると、昴君は少し悲しそうではあったけれど、それでも、わかった、と頷いた。

「あとさ、好きな人って、やっぱり気になるんだけど。付き合ったりするの？」

付き合ったり。

「……わからない。私ひとりの問題じゃないから」

「……そう」

「……うん」

また気まずい沈黙がおりて、そろそろ本当に帰ろうかな、と思った時。

ふいに昴君が、私の腕をぐい、と引っ張った。

すっぽり真正面から抱きしめられて、私の心臓が変な動きを見せる。

「好きだよ、千絵子さん」

耳元で囁かれた言葉に驚いて、私は目を見開く。

今日は、別々に帰ろう。そう言って、昴君はもう言いたい事をすべて伝えたと思ったのか、足早に靴を履き替え去って行った。

私はついに、その場にへなへなとくずおれると、唇が少し触れた左耳を、手でおさえる。

「……卑怯な」

真っ赤な顔で呟いた言葉は、なんとも情けない響きをもっていた。

第19話

どこか寂しさもあるのか、私はひとりきりのリビングではたびたびテレビをつけている。信じられない、なんて感情的に叫ぶ女の子を、どこか不可思議にみつめていたりした。テレビドラマなんているものは、家事の合間になんとなくテレビをつけている時くらいしか見ないけれども、頻度としてはそこまで少なくもないと思う。

今日も家の電話が鳴り、父親から残業になってしまったと連絡が入ると、私は頷いて受話器を置く。ため息をひとつ吐き、作ったごはんにラップをかぶせて冷蔵庫へ。こんなこともしよっちゅうだから慣れているけれど、今日はあまりひとりになりたい気分ではないな。考えすぎてしまう気がして。

結局ひとりでもそもそとごはんを食べて、食器を洗って、ソファに腰かけながらテレビを見ているのだけだ。

ううん、こうして客観的に見ると、やはり首を傾げてしまうなあ。

『私のどこが好きだっていうのよ!』

そんなもの、気付いたら好きになってたし、明確な理由なんてなかなか言えないもんである。

『本当に私のこと好きなら、ちゃんと証明してみせてよ!』

どうやってそんなもんしろっていうんだ。目に見えないんだぞ。

切り取ってはいって見せられるならとつくにそうしてるわ。
って。

「……今日まったく同じようなこと、昴君に言ったじゃないか」

深いため息を吐く。

いやあ、だってでも。このお嬢さんとは事情が違うよ。私はほら、その、騙されていたわけですし。

そんな風に自己弁護してうんうん、と頷いていれば、感極まったのか、可憐な女優さんからほろりと涙が零れた。名前はわからないけれど、演技はともうまい方なのだな、と見入ってしまう。

『この前までナギが好きだって言ってたくせに！いつから私を好きになったって言うのよ！』

あまりのことに私は飲んでいたココアが気管に入ってしまったのか、飲み込んだあと変な感覚になりむせこんだ。

げほげほと思い切り情けない咳をしつつ、私はたまりかねてテレビを消した。無音になると孤独感もあるけれど、それ以上になんともいえない気分なのだから仕方がない。

「……恋はハリケーン、とかいうやつか」

気付いたら、好きになるのなら。なにかのきっかけで終わりを告げて、また、始まるものなのだろうか。でも昴君の場合、これとはちょっと違う、のか。結局、やなぎんとはなんでもないんだもんな、本人いわく。しかし、噂を逆手に取り今日まできたというのならば、なかなかにしたたかである。

まあ、本性みたいなものは垣間見えていたけれどね。

「やっぱり昴君で、腹黒いんだなあ」

そうなるとやっぱりますます信用できないんだけど。それこそ私は、あんな理不尽な要求をするつもりなのだろうか。好きならば証明してみせて、なんて。そんな困った屁理屈のようなんだをこねら

れたってたまったものじゃないだろう。

でも、まてよ。

いっそ、無茶振りをして愛想尽かされるのを待つのもいいのだろうか。いや、性格的にそういったものはむいていないな。要求された相手方があまりにも不憫に思えてしまう。実際問題、そんな痛々しいことできるはずもない。

結局、好きなんだよな、いまでも。

そう。

私はあなたが好きなのだよ、昂君。

その綺麗な顔が、歪んでいくさまを見ると自分のことのように胸が痛い。笑うと嬉しくなり、微笑みは安心を覚える。

昂君は、他ではどうかわからないけれど、あまり活発には動かさなくとも、色々と細かな差異で表情を変える。なにより物を言うのは、瞳だ。

怒った時なんて、真っ赤になってるんじゃないかと、錯覚するくらい。

そう、彼の顔は、他の人よりずっと感情がにじみ出る。それが、すごく綺麗だ。だから私は、私をみて穏やかに笑うあなたに、安心をもらうんだ。

「……本当は、信じたいんだけどな」

素直に、私も好きだと、言えれば良いんだけど。

なんだか、釈然としない。素直になりきれない。信じきれない。

そんなことを言っていて、そのあいだに他の誰かと付き合ってしまったら、それこそ笑えない。でもやっぱり、怖い。

好きになって、しっぺ返しをくらうのは、怖い。普通に別れを告げられるのだってきついだろうに、やっぱり全部嘘でした、なんて言われたらと思うと、怖いよ。

私が好きだと思った彼の表情ひとつさえ、嘘だったらどうしよう。

今はそんなことまで思ってしまった。

ああ、結局うじうじと考えてしまっているではないか。なんだろうな。もっとすっぱりと、決断できたらよかったのに。

「……昂君のどあほう」

呟いた言葉は、思わず飛び出たものだったけれど、それで気が晴れるわけでもなかった。

冷蔵庫にあった晩ごはんは綺麗になくなっていて、私はそれに微笑む。テーブルにはありがとうのメモ。帰って来たのはとても遅かったのに、出るのは私よりも早いなんて、本当に大丈夫なのだろうか。今日も無事に朝食とお弁当も持って行ったな、よしよし。父は早い時は会社で食べる人だから、基本的に夜の時間が合わない、弁当といっしょに朝食も持って行けるものを作るのだ。

ごはんとおかずを弁当箱に詰め込むのは、いつも両親がみずからやっている。前はそこまでやって手渡ししていたのだけれど、それだと私が睡眠不足になる、と両親が今の方法を提案してくれた。別に私はかまわないのだが、そう言ってくれる彼らの心配気な顔を見るとなかなかどうして強くは出れない。

私は苦笑しつつ自分用のおかずを取り出す。今日はごはんをおにぎりにするべく、昨日混ぜ込みごはんを作っておいた。内容はたることしらすである。

朝はパンにしておこう。おにぎりを作ってお弁当箱におかずを詰めて、私は牛乳を取り出した。マグカップに注ぎレンジにつっこむ。温めているあいだ、棚から取り出した食パンをトースターに放る。

ひとりきりだから、適当でいいや。

自分以外の誰かが居るならば、これにサラダやら卵料理やらも付けるけれど、どうにもやる気が起きない。あくびをしつつ、あんずジャムを取り出してぼんやりとトーストが出来るのを待った。

そのときだ。家中に呼び鈴の音が鳴り響く。

私は驚いて思わず頬杖をついていた手の平から顎をかくん、と外してしまい、間抜けにもうわあ、と声を上げてしまった。

柱時計に目をやると現在時刻は朝の7時。こんなに早くから一体誰であろう。私は慌てて席を立ち、玄関でサンダルをつっかけると扉を開いた。

「だめだなあ、千絵子さん。インターホンがあるんだから、きちんと確認してから扉を開けないと」

「えっ」

変質者だったらどうするの、と首を傾げるその顔は、そんな綺麗な変質者がいてたまるか、とつつこみをいれたくなるほど、端正な顔立ちの男だった。

というか。

「昴君……？」

呆然と私が小さく名前を呼べば、にっこりと微笑む昴君。勝手に我が家の門を開き、入ったら門を閉め、ご丁寧にありがとう、つかつかと玄関先までの数メートルを歩いてくると、半開きの我が家の玄関扉をぐい、と開いた。

「千絵子さん、まだ準備中？」

「え？ なんの……」

「登校。まだする時間じゃない？」

ああ、もう制服は着ているけれど、エプロンをつけているからだろう。ちらりと私の姿を確認して、昴君が言った。

「朝ごはんを、食べるところ」

多少うわずった声で言うと、昴君はそっか、と頷いた。

「じゃあ、早く来すぎちゃったね。ごめん」

お邪魔しました、とお辞儀をされて、私は展開についていけずにいえいえ、とお辞儀を返せば、昴君はそのまま来た道に戻ろうと踵を返す。

何しにきたのかわけがわからずに、ぼんやりと彼をみつめていたけれど、小さく手を振って昴君は歩き出してしまった。

なんだったんだ、一体。

私は白昼夢でも見ている気分になえ陥って、それでもしつかりとトーストにジャムを塗り、温めた牛乳にインスタントコーヒーを入れてカフェオレにし、それらを食べ飲み干した。こういうところが食欲娘といわれる所以である。

食器を洗ってエプロンを外し、歯を磨いて鞆を持つ。いつものように戸締り確認をして、最後に玄関に鍵をかけ、私は家を出た。

しばらく歩いて駅前に着いた時には7時40分頃。私の家から学校までは電車で10分くらいなのでかなり近いといえる。中には1時間かけて登校してくる生徒だっているのだから、お疲れ様でございます、と言いたくなってしまう。

「千絵子さん！」

どうでもいいことを考えつつ駅前のコンビニを通り過ぎたとき、先程聞いたのとまったく同じような声が響く。さらに私の名前を呼んでいたような。

私はきよろきよろと辺りを見回すと、コンビニのほうから走ってくる男が視認できた。

ていうか。

本日二度目の昴君!?

あまりのことに混乱する私に、満面の笑みでいっしょに行ってもいい、と昴君が話しかけてくる。

「……ええーと、昴君?」

「なあに?」

「君、我が家を先程、訪れなかったかね」

「うん、行ったよ。ごめんね、突然押しかけちゃって」

迷惑だったよね、とうなだれる昴君に、私は慌てて首を振る。というか、そこはどうだっていい。別に迷惑だとは思っていないのだし。そう告げると、ぱっとその顔が喜びからなのか華やいだ。やめてください、かわいいです。

いや、だから、そうじゃなくて。

「7時に我が家を訪れ、現在時刻は7時40分。まさか、私を待っていたのかい」

「コンビニで立ち読みしてたら、けっこう時間過ぎちゃって」

さすがに昨日の一件があるから、私はこれをすんなりと受け入れられない。そもそも、自惚れでもなんでもないことくらい、わかりきっている。

私はあまりのことに、憤慨した。

「そんな健気な乙女みたいな言い訳が通用すると思っているのかね! 昴君、ずっとコンビニで私に来るのを待っていたんじゃないのかい!」

「だって僕健気な恋する男の子だもん。乙女じゃないけどね」

怒鳴る私をもともせず、微笑む昴君。せりふもさることながら、その表情。

「やめて、かわいい」

あ、いけね、口に出しちゃった。

私が思わず心の呟きを声にすると、昴君がきょとん、と目を丸くした。

しかし次には眉を顰めて、昴君が私の名を呼ぶ。返事をすれば、彼の口から息が吐き出された。うわあ、白い。

「綺麗、の次は、かわいい？」

「いや、その」

「千絵子さん、僕を無害な男だとはもちろん思っていないよね」

「思っていないよ！そこまですかぽんたんな頭じゃないよ！」

「あははは。いまどき言わないよねえ、それ」

ならいいんだけど、と笑う昴君は、やっぱり綺麗だし、かわいいと思う。でもそれは別に、彼の事をなんの実害ももたらさない小動物のようなもんだなんて、さすがにもう、そこまで鈍い事は思っていないつもりだ。なんなら手酷く咬まれたわけだし。

なにか響きが卑猥だ、やめよう。

そして、いいかげんにしてくれ。話を逸らされ続けているではないか。

「昴君。いつしよに登校したいと、なぜ一言そう言ってくれなかったの」

「……嫌がるかと思ったから」

「だったら先に行けばよかったじゃないか」

「…………でもいつしよに登校したかったから」

えええ。

昂君の言動が、いちいちかわいい。なんだこれ、なんなのだろうこれ。

いや、お待ちなさい。腹黒い、と昨日評価をくだしたばかりだ。これも計算なのかもしれない。あれだ、小悪魔というやつだ。ほだされるな、私。

でも。

寒かったろうし、眠かったろうに。昂君の家が、どこなのかは正確に把握していないけれど、少なくとも我が家よりは学校から距離がある。そもそも、私と昂君は駅が反対方向なのに。わざわざ学校を通過して来てくれたのだと思うと、計算だろうがなんだろうが単純に胸が締め付けられてしまった。

なんだ、結局は思う壺ではないか。

でも、でもな。

しばし葛藤して、目の前でしおれる彼をみつめて。私は大きくため息を吐いた。

「……昂君」

私の声に、昂君は黙って私をみつめる。

「いっしょに行くのはかまわない。けれどこういうのは、今日限りにして」

「！ やっぱり」

傷付いた様子の彼に、慌てて首を振った。なんなんだ、いちいちそんな顔されたら、こちらが悪い事をしてしまっている気分になるではないか。

「迷惑ではないけれど、外で待たれるのは心苦しいし、昴君が定期外の我が家までたびたび来るのは忍びない」

「……僕が、毎日千絵子さんに会いたいだけなんだ」

「学校で会えるでしょう」

「それだけじゃ足りない。放課後は、前はいつしよに居れたけど、今は無理だし」

せつなそうな顔をしないでくれ。ついでに私の髪をつまんでちょこちょこいじるのやめてくれまいか。何がしたい。ああ、私が抵抗しないとわかると、今度は頭を撫でるのか。なんなのだ、やめてください、こちよいです。

あーあ。

あーあ。

もう。

「……わかった」

「！ えっ」

「そのかわり、私は今の時間に登校することもあれば、これよりちよっと早い時もあるし、遅い時もある。だから、毎日同じ時間ではないし、昴君が来るまで待ったりしないよ」

「そんなのかまわないよ」

「あと、外で待たれるのは嫌だから、もしも昴君が早く来ちゃったら先に」

行ってくれ、と言おうとして、昴君は無言で首を振る。だから、そのせつなそうな顔やめてほしい。こっちが泣きそうになる。

昴君が、苦しそうな表情のまま、私の頬へと手の平を滑らせる。ぴったりとくっついた手は、冷たい。

「……………もしも早く来ちゃったら、心苦しいのでリビングで私の

支度が終わるまで待っててください」

「！ 千絵子さん」

ぱ、と輝く瞳で私を見る、嬉しそうな顔。

あーあ、やっぱり。こういう顔させたいと思ってしまいうや。だめだな、私。

しかし、ふいに先程までの無邪気な顔をひっこませると、昴君は私の耳元に唇を寄せ、囁いた。

「俺の好きを、信じて、千絵子」

好きだよ、と囁くその声に、ときどきしないわけがない。

こいつ、耳が弱いつてわかってやってるのではないだろうな。

疑いの眼差しを向けつつも、結局私たちは仲良く学校までの道を歩き出した。

第20話

どうしたらいいのだろう。

頭を抱えつつも、結局私は、なんの答えも出せずにいる。

「千絵子さん、おはよう」

「……おはよう」

ため息混じりに言えば、昴君は満面の笑みで玄関へと足を踏み入れる。ちよつとまだ入っていいとは言っていないですよ。いや、入っていいのだけれども。

「ねえねえ、千絵子さん」

「はいはいはい、なんですかー」

「そろそろ僕のこと好きになった？」

またそれか。

ダイニングテーブルに肩肘をつき、にこにこ笑う彼に、私は呆れの表情を見せつつ、朝ごはんを食べる。昴君も、美味しそうに私の作ったごはんを食す。これがまた地味に嬉しいとはこれいかに。

今日は和食である。卵焼き、納豆、焼き鮭、みそ汁。定番もいいところでちよつと面白い。お昼は真逆にサンドイッチだ。

最初は、ひとりでごはんを食べていたのだけれど、あの日から毎日我が家を訪れる昴君は、何故だか私ごはんを食べる時間にやってくる。狙っているのかどうなのかは定かではないけれど、とにかく、そうするとなんだか申し訳ない気分になってきてしまつて。数日後には自ら彼を食卓へと誘ってしまったのだ。それからというもの、こうして朝からきちんとしたものを作り、昴君と向かい合つて食べるようになったというわけだ。

私は、今更ながらふと疑問に思ったことを訊いてみる。

「昂君は、その、恥ずかしくないのかい」

「？　なにが」

「す、好きとか、そういうことを言うの、が、さ」

だんだん尻すぼみになるのは、好いた相手の前でする質問じゃなかったと自覚した為だ。そうだ、昂君は私に好きだと言ってくれているわけで、私はけれどそれを受け取る事はなく、いつも素通りするふりをして。本当は、心臓がいつもおかしい動きを見せるというのに。そうじゃなくとも、単純に、好きという単語を口にするだけで緊張してしまった。

だって、昂君に告白しているような気分になってしまう。

きつと羞恥心で顔が赤くなっているだろう。私は俯いて無言になれば、朝食を口に運ぶことに専念しようと決める。

目の前にあるごはんだけに視界をいっぱいにしていたからか、私はすぐ傍まで来ていた気配にまるで気づかなかった。

ふ、と耳に何かに触れて、私は思わずお箸を手から滑らせる。かしゃん、とダイニングテーブルに落ちた音が響けば、私は自分の身体がかたくなっているのがわかった。

昂君が、私の隣にしゃがんで、耳に髪をかける。それだけで終わらずに、彼の手の甲が私の頬をゆっくり撫でた。私はそれに思いのほか驚いて、びくん、と肩を揺らす。

声がうわずったけれど、このまま無言でいるよりはいいと思って、私は口を開いた。

「……何をしていらっしゃるのだろうか」

すぐ横で空気が揺らいだ。昂君が、笑ったのだ。

「ん？かわいい顔もつと見たいのに下向いちゃうから」

「なにを」

「ほら、真っ赤でかわいい。今すぐキスしたい」

「はっ!？」

あまりの言い様に私は混乱して、思わず立ち上がる。がたん、と椅子が倒れたが、そんなこと、今はどうだっていい。

昂君は、私に合わせてゆっくりと立ち上がると、微笑んだ。

「そんなに警戒しなくても、何もしないよ。本当はしたいけど」

「どっちなの!？」

「うん、だからしたいのは本当なんだけど。あと、恥ずかしくないよ」

言葉の意味を理解できずに私が首を傾げれば、昂君はさっきの質問、と声をあげる。私はああ、と頷いた。

「僕は、言いたいから言うんだよ。好きだって気持ちも、かわいいなキスしたいな、って気持ちも、思ったから言った」

「すすす昂君」

「でも、しない。千絵子が、僕のこと好きになってくれるまでは」
「!」

真剣な瞳に、吸い込まれそうになる。

本当はキスしてほしいとか。心に過ぎる私の浅はかさが、心底恥ずかしくて。自分でもどうしたいのだろうとわからなくなってしまった。

「…………ご、ごはん、食べてしまおうか」

「……………そうだね」

へたにも程がある私の誤魔化し。
くす、と苦笑いした昴君の優しさに、私は胸中で感謝した。

どうにもこうにもいかないまま、私は答えを出せないままに今日も昴君と歩いている。ちらい、と私が彼へと視線をやれば、気付いて微笑みかけてくれる。それがとても嬉しいのに、ちくりと胸が痛んでしまう。このまま、信じられないとばかり思っていたって仕方がない。それこそ、私が彼を弄んでいるようにも思えてしまう。

いつまで続くんだろう。こんな曖昧な関係。

もしも、昴君の言葉が本当ならば。

私と彼を隔てるものはなにもないのに。

「また今日も仲良くご登校だったわけ？」

「……まあ」

「段々、噂になってきてるみたいよ。あんと佐藤君」

おはよう、と声をかけて席に着いて早々。あいさつもそこそこに無表情で頬杖をつくあかりに、私は肩を竦める。

まあ、そうだよなあ。

学校で話すのは許容範囲内。たまたまいっしょに帰るのも許容範囲内。

でも。

毎朝いっしょに登校するのは、確かにあかりとやなぎんとの関係性だけでは説明できない行為だ。

「まあ、なるようにしかならんね。もしもそれで何かされたとしても、私は甘受しようと思う」

「……あんたねえ」

「別に、逃げたってどうともならないだろうし。対抗する術もない

んだし。となれば、腹括るしかないじゃないか」

呆れるあかりにそう告げれば、彼女はため息を吐き、呟いた。

「まあ、あの男がなんの手も講じることなく何かさせるわけもないわね」

「？　なんか言った」

「なんでもないわよ、この鈍感娘」

ぎゅ、と鼻をつままれ、私は間拔けな声をあげた。

とにかく、時間はあまり残されていない。昴君と恋人になるか、ならないか。なるべく早いうちに決断しなければならぬのだろう。彼の為にも、私自身の為にも。

わかつてはいたが、信じきろうという潔さも、信じられなくともとにかく好きだから突っ走るといふ真っ直ぐさも私には持てなくて、ただただ昴君を好きだという事実が心に閉じ込められたままだった。

「ちーちゃん、恋する乙女だね」

「まーくんは、恋してないのかい」

「うーん、そうだね、今はないなあ、そういうの」

「そっか」

ため息を吐く私とまーくんは、何故か写真部の部室に並んで座っていた。

下校しようと教室を出たら廊下でばったりと会ったので、せっかくだし、ということになった。もう少ししたら我が家にいっしょに帰るつもりだ。せっかくの週末であるし、泊まっていく運びになりそうである。遅めに帰宅するのは、今日も両親の帰りが遅いが、いっしょに比べると早めなので待ってしようという話になったからだ。た。晩ごはん作りは19時をまわったあたりから始めればちょうど

良いだろう。

「表面上だけ見れば、ちーちゃんと佐藤君はなんの問題もなく、恋人になれるのにね」

「……まあ、そうだよ。昂君の言葉が本当ならば」

「まだ、信じられない？」

「なんだかあまりにも言われすぎちゃうと……昂君にとって、好きって言葉は軽いんだろうか、とかわけわからないことばかり考えちゃってさ。さすがにそれは失礼だろうとわかっているのだけれどもね」

「まあ、最初に嘘を吐いたのはむこうだものね、信じるのが怖いのは仕方がないよ」

私の言葉に、まーくんはうなずく。

結局、ほとんどのことを彼に話してしまっているから、私はとても気が楽だ。でもあまり甘えてしまうと迷惑にもなってしまうから、愚痴はなるべくしまっておきたい。

会う前はそう思うんだけどな。

目を見て、話してしまうとだめなのだ。どうにもお兄さんのような彼に、頼ってしまう。

「でも」

「ん？」

「あまり迷っていると、さらわれてしまうよ」

「まーくん」

「ちーちゃん、素直になった時、相手がまだ隣にいるかはわからない。それだけは肝に銘じておいたほうがいい」

「……はい」

神妙な面持ちで頷く私に、いいこだね、と優しい手つきで頭を撫

でてくるまーくん。温かいぬくもりは確かに嬉しいのだけれど、やっぱり、昴君とは違う。これって、本当に不思議だね。

私がじつとまーくんをみつめていると、何故だか彼の顔付きが変わった。さっきまでは優しく微笑んでくれていたのに、今はじ、と目を細めて片眉を上げている。

なんだろう。

私が首を傾げると、まーくんは私の額をぴん、と弾いた。やめてください、痛いです。

あう、と間拔けな声をあげる私に、まーくんはだめだよ、と眉根を寄せる。

「俺相手ならなんの問題もないけれど、他の男の子相手にそんな行動を取らないように」

「？ なにか粗相をしたかい」

「至近距離でじつとみつめるの、ちーちゃんの癖だね。いけないよ、そんなことをしちゃ」

「まーくんは、いいのか。他人の男性にしてはいけないということだね」

「そうだよ」

「じゃあ、昴君は」

「絶対にいけません」

そうなの、と首を傾げる私に、まーくんはそうです、と繰り返す。私はよくわからなかったけれど、頷いておいた。まーくんは、満足そうにいいこだね、と言ってまた私の頭を撫でる。うん、全然まったくわからない。

とりあえず、昴君にはしてはならない、ということを頭の中に深く記憶として刻んでおいた。

そろそろ出ようか、という言葉で、私とまーくんは部室をあとにする。晩ごはんをどうしようかと話し合っていると、昇降口に人影

が見えた。

遠目には誰だかわからないが、一組の男女が向かい合って、楽しそうにおしゃべりをしている声が響く。邪魔をしたくはなかったが、靴を履き替えねば帰れない。私とまーくんはすぐに退散しよう、とお互いに頷き合って、それぞれの下駄箱へと向かった。

靴を履き替え、さあ出よう、という時。

じろじろとそちらを見るのはいけないと思いあまり視界に入れなかったのだが、ようやく気が付いた。昴君だ。昴君と、見知らぬ女性がなにやら楽しそうに話している。

驚いてかたまる私の肩を、ちーちゃん、と言ってまーくんが叩いた。私はそれに反応して返事をする。そこでやっと、昴君が私達に気付いたのか、こちらへと顔を向けた。

しかし、私もあれだよな。

うしろ姿だったのだよ、昴君。それなのに、気付いてしまうとは。どれだけ私は彼のことが好きなのだろう。苦笑して、それから前を向く。

ってあれ。

なにあの怖い顔したひと。誰？昴君だと思ったのは勘違いであつたのだろうか。

引き攣った笑みでくいくい、とまーくんの腕付近の制服を引っ張ると、まーくんが、不思議そうな顔をする。前を向いた彼もまた、やっと昴君の存在に気付いたらしい。

私はどう考えても気のせいだとは思えない昴君の冷気が恐ろしくなり、思わずまーくんの後ろにささ、と身を引く。まーくんはほんわかとした声で、それ火に油の行為だと思ふなあ、なんてわからない事を言う。いいから助けてください。

「やあ、千絵子さん、と」

「自己紹介はそういえばまだだったかな？高木正浩、ちーちゃんの従兄弟です」

「高木君。佐藤昂です」

にっこりと微笑むふたりを見て、大丈夫そうか、と私はまーくんの背中から顔をそろり、と出す。しかし笑った表情であるはずなのに、昂君がやっぱり怖いと感じるのは気のせいであろうか。

私はまーくんの腕をがっしりと掴んだまま、昂君にやあ、と声をかける。

昂君は、満面の笑みだ。

「千絵子。それ、どういう意味？」

「へっ」

「なんで、君は、僕の目の前で、まーくんの背中にすがっているのか、と訊いてるんだけど」

ひいひいっ。

昂君が怖いからです、と言いたいけど、言ったらもっと怒りそうである。とりあえず、まーくんの後ろにいれば安全だろうとよりいっそう彼にぴたりと張り付いてみた。

ちーちゃん、と呆れた声をあげるまーくと同時に、昂君はもはや笑顔を消し、はつきりと私を睨みつけければ、つかつかとこちらに歩いてくる。

「俺の目の前で俺以外の男といちゃつくとかありえない」

「い!？」

べり、という効果音が出そうな勢いで、昂君がまーくんの背中から私を引っ張れば、その反動で昂君の腕にすっぽりと閉じ込められた。

ええと。なにこれ、どういう状態。

ぎゅ、と抱き込まれた所で、ふと気付く。

あれ、そういえば、忘れていたけれど。

「うわあっ！」

あまりの事に叫んでしまい、私は思い切り昴君を突き飛ばすと、さささ、と彼から距離をとった。一応、まーくんにはもうくつついていない。

いちやついているわけじゃないけど、その、要するに、昴君はあれだよ、私とまーくんがひつついてるのが気に入らなかったってことですよね、なんですかそれ、照れる。

じゃなくて。

先程、私が声をあげてしまった原因。近寄ってきたその女性に、私は恐怖心を抱く。

だって、あのひと。

ものすごい双眸で私を睨みつけていた。

綺麗な長く真っ直ぐな髪は、ほどよく茶色い。いかにも染めた、というような色ではなく、あくまでも自然な髪色だ。色白で、くりん、とした瞳の彼女によく似合っている。

身長は、私より少し高いくらいか。昴君と並ぶと、すごく綺麗で、お似合いである。

お似合い。

自分で思っておいて、それにひどく胸が痛んだ。

「昴君、お友達？」

「ああ、ごめんね話の途中で。井上^{いのうえ}さん」

「ううん、いいの。ちえこ^{しおり}さん、って言うの？」

「あ、ひょっとして副会長の井上詩織^{しおり}さん？」

私の言葉に、昴君と井上さんが同時に頷く。私は、どうも、と頭を下げた。ついでに自己紹介しておく。友達、という言葉を使うと、

なんだかちよつと胸が痛むとか、勝手だよな。

微笑む井上さんは、先程の視線が気のせいだったのかというくらい愛らしい。

「昂君には、いつも本当にお世話になってるわ。正式に生徒会役員として働いてもらいたいのだけど」

「それは勘弁してくれって、おじさんにも言ってるよ」

「あら、つれないのね」

くすくす笑うふたりは、なんだかとても仲が良さそう。私は、心がどんどん冷えていくのを感じる。

本当、この身勝手さどうにかしたい。恋ってやつは厄介なものだ。

「まーくん、いこう。晩ごはん、そろそろ支度しなくちゃ」

「そうだね」

本当はまだ余裕があったのだけど、察してくれたのだろう。まーくんは肯定して、私の手を取った。

私はそれが頼もしく、同じように握り返す。

「おふたりって、付き合ってるの？」

目を丸くする井上さんに、私は違います、と否定する。しかし井上さんは、その言葉にますます驚いたように声を上げた。

「そんなふうに手を繋いだり、いっしょにごはんを食べる相談をしていけば、そう見えるわよ？　とっても仲が良さそうなもの。ね、昂君？」

「……………そうだね」

微笑む井上さんに、同じように笑みを返す昴君。なんだよ、そんなに綺麗に笑うのか、君は。

「俺たちは兄妹みたいなものだから、これが普通なんだよ」

ね、というまーくんの言葉に私はぎこちない笑みでうなずいた。理不尽な怒りをぶつけないように、とにかく否定だけして、私は再度行こう、とまーくんを引っ張った。まーくんは、困ったように笑っている。

短くさようならを言い、私はまーくと並んで歩く。

「そういえば久しぶりだけど、俺の着替えてどこにある？」

「ん？父のクローゼットにいっしょにあるはずだよ。別にすぐお風呂はいるわけじゃないんだし、ゆっくり探せばいいじゃないか」

「それもそうだね」

その場をなごませてくれる為に、無理やりでも会話をしてくれるまーくんの好意がありがたく、後ろから、鋭い視線を寄越している男がいるなんて、このとき私は当然気付かなかった

第21話

どうしてその人ではないといけないのか、考えれば不思議なものだ。いや、世界中のうちのひとりに会えたとか、すごい確率の奇跡だとか、そんななかいかい事は思わないのだけれどね。だって、世界中の人に会いに行ったわけじゃないから、昂君以上に綺麗なひとだって、きつとたくさんいるのじゃないかなあ。だから、彼以上はきつとみつからないだろう、とか、そんな確信めいた事は言えない。ただね。

私のせまっちよろい世界の中で、いちばん綺麗にうつるのは佐藤昂君というお方で。

ただ、それだけのことなのだよ。
今のところはね。

「あら、まーくん」

「おや、来てたのかい、正浩」

「おじさん、奈緒子^{なむこ}さん、久しぶり」

微笑むまーくんに、両親が同じように久しぶり、と応える。

奈緒子、と母を名前で呼ぶのは、母がおばさんと呼ばれるのを嫌うからだ。いつか私にもその心理がわかる時がくるのであろうか。

まーくんは、昂君と違って手際が良い。料理も元々やっているから、まあ違って当たり前なのだけれども。どうにも細かい所で比べてしまうのは、あれこれと思い出してしまふからなのだろう。

ああ、いやだ。

私も父と母におかえりと告げ、料理を並べる。今日はちよつと頑張ったごはんである。

本日の主役はさばの味噌煮。和食の定番だ。それに豚の角煮と、きんぴら大根、ごぼうとキュウリのサラダに、白菜の漬物。おみそ

汁は具沢山である。というか、残りものの野菜を突っ込んだだけ、とも言える。

どうしても外で食べる機会が多くなると、和食に飢えるらしく、両親のリクエストは毎回決まったものだ。だから私たちが久しぶりに食卓を囲む時は、必然的にこうしたメニューになる。

時間はもう21時近い。本来ならばこんな時間にごはんをかきこむのは勇気を要する行為ではあるのだが、まあ、たまにのことなので大目に見ようではないか。なんせ家族の団欒なのだから。

今宵はまーくんも囲んでの楽しい晩ごはん。

父と母は浮き足立って着替えと手洗いうがいを済ませれば、皆そろったところでいただきます、と手を合わせた。

「あー、角煮も美味しいけど、この煮卵もおいしーい！さすがーちゃんねえ」

「千絵子、さばもとても美味しいよ」

父親と母親が顔を綻ばせて言うものだから、私も笑ってありがとう、と返す。こうやって作ったものを、美味しいと言われるのは単純に嬉しい。毎日当たり前のように出てくるごはんだからこそ、こういった言葉は忘れがちになるけれど、それを怠らずに声に出してくれる両親が、私は本当に好きだし、大切だ。

「ごぼうサラダ、ずいぶん味がまろやかだね」

「ん？ ああ、それね、みりん入ってる」

「へえ、なるほど。今度俺もやってみよう」

さすがまーくん。料理をあまりしない両親とは目の付け所が違うものだ。下ごしらえなどはほとんどやってくれるものだから、本当に助かった。改めて感謝を述べると、別にたいしたことしてないんだから、とまーくんは笑う。

相変わらずの優しさに、私も微笑んだ。

「……ねえ、千絵子」
「ん？」

呼びかけられて私が返事をすれば、お茶を流し込んだ父がこほん、とひとつ咳払いをした。一体なんであろう。

「正浩とはどうなんだい」

「父よ、もう少し具体的に言ってはくれまいか」

「……君たちが兄妹のように育ってきたのはわかっているけれど、少しは新しい何かも芽生えたりはしないのかな、とね」
「んん……？」

具体的に言え、と先程伝えたばかりなのに、まるでなぞなぞのような父の言に、私は眉を顰める。新しい何か、とは。一体なんなのだろう。

ふうん、という呟きが聞こえてくる。隣に座るまーくんがあげた声に反応した私は、そちらに視線をやった。

「おじさんは、それを望んでいるの？」

「いいや。そうだね、少し無粋だったかな」

「そうかも」

「焦っているんだよ、きつとね」

苦笑する父に、父と同じような表情で、ああ、と呟くまーくん。男同士でわかったような会話をされて、そのまま終了してしまったからか、なんともすすきりしないまま晩ごはんを終えた。

「あ、まーくん。お風呂先入る？」

片付けを終えて、皆が思い思いの過ごし方をしていた頃。リビングにてテレビを見ていたまーくんに、風呂が今しがた沸いた事を告げると、まーくんは首をかしげた。

「あれ、おじさんと奈緒子さんは？」

「さっき寝てしまったから。明日はふたりして休みみたいだし、そのままにしておいた」

今廊下を歩いてきたのも、2人の寝室を覗いてきたからだ。どうやら揃って疲労がたまっているらしい。扉を叩いて返答がないのを訝り開いてみれば、相変わらず仲の良い両親は揃ってすやすやと穏やかな寝息をたてて眠っていたというわけなのだ。

私がそう説明すれば、まーくんはうなずく。

「そっか。ならちーちゃん先入ってきたら？」

「いいの？私も一応女子であるから、それなりに時間はかかるけれども」

「明日はお休みだから急ぐ理由もないし、そんなに気は短くないよ。一番風呂、入っておいで」

くす、と笑うまーくんの言葉に私は甘えることにした。着替えを取って来ようと部屋に戻り、そこで机に置きっぱなしになっていた携帯電話へ視線をやった。暗闇でちかちか何かが光っているのかと思ったら、着信を知らせるランプが灯っていたのだ。

私はスウェットを取り出してそれを小脇に抱え、携帯電話を開きつつ階段を下りる。あまりのんびりしすぎるのもまーくんに悪いし、急ぎではなければあとも良いだろう。そう考えて、着信内容を確認する。

電話ではなく、メールが届いている知らせだった。開けば、そこ

にはどきり、とする文字。

昂君だ。

メールの内容を見てみれば、特にとりよめのないもので、帰り際に会えて嬉しかった、とか、また月曜日にいっしょに登校しよう、とか、そんなことが書かれている。

微笑んでリビングの扉を開けば、私はダイニングテーブルに携帯電話を置いた。

「まーくん、それじゃあお先に入らせてもらうね」

「ゆっくり温まってくなよ」

急がなくていいんだからね、という言葉にはいい、と笑って、リビングを出ようとする。

しかし。

まさかのタイミングで携帯電話が無機質な音を響かせ、その着信からメールではなく電話だということがわかった。さすがに出ないわけにもいかずに、一旦椅子に着替えを置いた私は、まーくんの視線を感じつつも携帯電話を開いた。

おお、昂君。

心の中で呟きつつ、通話ボタンを押す。

「はい、もしもし」

『千絵子さん、こんばんは』

「……こんばんは」

あいさつから始まった第一声に戸惑いつつ、私は落ち着かない気持ちでそわそわと視線をさまよわせた。その様子に、きつと合点があったのだろう。まーくんは私に向けていた視線をテレビへと戻すとぷつん、と電源を落とせば、すぐ近くにあった雑誌へと手を伸ばしていた。

申し訳なさに内心でごめんよ、と謝りつつ、私は昴君の続きを待った。

『今なにしてたの？』

「ん？特になにも」

本当はこれからお風呂に入る所なのだが、それだと手短に電話は切られてしまうだろう。耳から聞こえる心地良い声を、もう少しだけ聴きたいと思えば、私は電話口の昴君にちよつとごめん、と断りを入れた。

「ね、やっぱり先入って」

「ん？長引きそう？」

「んー、わからないけど」

「そっか。じゃあ、それなら先にいただこうかな。なんだかちーちやんに気を遣わせちゃうのも悪いしね」

「ごめんねまーくん」

「いいよ」

眉を下げて謝れば、まーくんがくしゃり、と私の頭を撫でた。人が居る気配って、やっぱり温かくて好きだ。独りは、慣れはしても平気にはならない。

私はしみじみとそんなことを思いつつ、まーくんの背中を見送れば、待たせていた昴君との会話を再開した。

「ごめんね昴君おまたせ。で、どうしたの？」

『……今、誰と会話してたの』

あれ。なんだろう、この声。ものすごく低い。

先程まで心地良く浸透していたその声が、今は耳にちくちくと刺

さる棘のようで、それに小さな恐怖心を覚える。一体、どうしたと
いうのだろうか。

「あの、昴君？なんか、怒って」

『質問の答えをもらってないよ。今、誰と、会話をしていたの？』

区切って強調する昴君の声音が更に怖い。

あれれ、そういえば。

思い出すのは、今日の別れ際。そういえば、昴君は、私に、その、
あまり他の男性と仲が良いのはあれなのじゃないか、みたいなこと
をおっしゃっていなさった。

うわあ。

今絶対に顔が赤いぞ。見えなくてよかった。

ってお待ちなさい。

これ、真実を伝えて良いのでしょうか。いや、でも嘘を吐くのも
変な話というものですよ。だって、それじゃあまるで昴君が好きな
のに他の男を呼んで浮気紛いな行為をしているあばずれのようじゃ
ないか。私はなんなら、まーくんのことを実の兄くらいにさえ思っ
ているし、何かが起きるなんて事ももちろん思っていない。それな
らば尚更、嘘を吐くのはなんだか違う気がした。

男として意識している、と思われるのは、さすがに心外であると
感じてしまったから。

それもまあ、勝手な話だけでもね。

「昴君、そう怖い声を上げないでくれよ。まーくんが我が家に来
るのは日常茶飯事なんだから」

落ち着いた口調でそう話せば、電話口から何も聴こえなくなり、
しばし沈黙がおとずれた。

数秒程してから、昴君の声が私の耳に届いた。

『……同じベッドで寝たりしないだろうね』

「え？ああ、別にしないこともないけど」

『はあ！？』

「いやいやいや、今は滅多にしないってば。今日だって眠るのは別々の部屋だし、父と母もいるよ」

慌てて言い添えれば、電話口からは深いため息が聞こえてきた。

『千絵子』

「！」

切羽詰ったような響きにどきりとして、思わず電話を落としそうになる。私は返事をしたかったけれど、喉の奥が震えているみたいになって、筋肉が強張っているからなのか、声を上げることができなかった。

『ねえ、千絵子にとって、今の俺ってどんな存在？友達？それよりは上かな？』

「……昴君」

かすれた声でやっと名を呼べば、まだまだせつなそうな声が彼から漏れてくる。

『苦しい。千絵子のこと、好きすぎて辛い』

「！なに」

『今すぐちゃんと確かめたい、千絵子に触れたのはまだ俺だけなのか』

「確認もなにも、すっ昴君だけだよ！」

あれからそんなに経ってないでしょ、ばかやろう！と叫んでから、相当恥ずかしい事を言ってしまったのだとわかった。私はどんな顔が赤くなる。

昂君は、いくぶんか気が済んだのか、声が和らいだ。

『僕もね、不安なんだよ』

「昂君……？」

『だからね、声が聴きたかったんだ、千絵子さんの。ごめんね、電話なんかして。また月曜日にね、おやすみ』

「あ、の、昂君！」

このまま電話を切るのだけは、すごく嫌で。でもどうしたらいいのかわからないまま、何を言えば良いのかわからないまま、私は気付けば彼の名を呼んでいた。

おそらく電話を切ろうとしていた昂君は、私の声に気付いてくれたのだろう。一瞬沈黙があり、次にはどうしたの、と声をかけてくれた。

私はどうしたものかと思いをあちこちにやったが、具体的に何を言うべきか思いつかずに、結局は本能のままに伝えたいことを伝えてしまえ、と半ばやけくそになった。

「昂君に、与えられたものは、ぜんぶ、嬉しかったよ」

『え』

驚きの色がありありと見える声を電話口であげられてしまい、居た堪れなくなった私は、もう限界だ、と先程自ら止めたくせに、思わず別れのあいさつを叫んでいた。

「お、おやすみっ！」

『え、ちよっと千絵子！今のどう』

ぶつん、と押した電源ボタン。ついでに長押しして、携帯電話そのものの電源を落としてしまえば、私は安堵の息を吐いた。

脱力した私は、そのままずると床にへたりこめば、足に伝わるひんやりとした冷たさに、心地良さを覚えた。ということは、身体がそれだけ火照っているということだ。

昴君は、ずるい。

言葉ひとつで、私をあちらこちらへと翻弄してしまうのだから。

狙ってやっているとしたならば、彼は相当な悪魔であろう。

「……って私も何を言ったんだろうか」

そうだ。

きつとあの瞬間、本当ならば私は好きだと伝えたかったんだろうと思う。でも、それができなくて、あんな、ともすればいやらしい響きにも聞こえかねないことを言ってしまったのだ。

なんとなく、悪女になった気分でもある。だって、昴君と私はかりそめの恋人であったのに。それなのに嫌じゃなかったどころか嬉しかったなんて。尻軽女みたいだ。

あの言葉に、昴君は何を思ったのだろう。ひょっとしたら、私の気持ちは全部ばれてしまったかなあ。

ぼんやりとしている私の耳に、あがったよ、という声が届くまで、私は床に座った状態のままあれこれと色んな事を考えていた。

呆れるまーくんの視線は、ちよっとなんともいえなかったです。

第22話

月曜日にね。

そう言っていたはずなのに、昂君は月曜日、我が家にやっては来なかった。頑張って作った朝ごはんが少し悲しいけれど、仕方ない。寝坊をした、というけれど、本当なのだろうか。ひよっとすると、煮え切らない私の態度に、愛想を尽かしてしまったのかもしれない。そう思えば、暗い塊が胸に落とされたけれど、温かいものが頭に触れると、それは思いのほか軽くなった。もやもやは、少しだけ残ってはいるけれど。

「残念だったね、一生懸命作ったのに」

「お弁当を作る手間が省けたし、いいよ」

並んだ洋食の朝ごはんは、三人分。

無駄になったオムレツにため息を吐きつつ、私はそれをお弁当のメインにする事にした。下ごしらえしていた他のおかずは夜にまわせばいい。

「あ、じゃあ、それ俺がもらうよ、お弁当に」

「え？でも、まーくんの分もちゃんと用意してあるのに」

「だから、それはちーちゃんが食べてよ」

「でも」

「いいから。ね、きまり」

微笑んだお兄ちゃんのような存在の男は、とことん私を甘やかす。金曜日に我が家へ泊まって、ずるずると月曜日まで家に居てくれたのは、きつと不安定な私の心をわかっていていたからなのだろう。

様子が時折おかしくなる私に、両親は訝りつつ、けれど事情を訊かないように、と止めていてくれたのはまーくんだった。優しさに、ありがとうと言いたくなるけれど、口にするのとたんによそよしくなりそうで、私は心の中でそれを伝えるに留めた。

はりきって作ったごはんの数々は、こんなことしかできなかったけれど、一応、感謝のしるしである。

そういう事情もあったから、まーくんに残り物を押し付けるのは少しためらいがあったのだけれど。本人がそう申し出てくれたのならば、あまり拒否するのも失礼になる。

謝罪して、私はまーくんの分のコーヒーを渡した。

「おじさん達、珍しくまだ寝てるんだ」

「うん、最近はいつものに拍車をかけて忙殺されてたみたいだから」

「ああー……もうすぐ年末だものね」

「今日は遅くから出勤して良いみたい。母は休みだから、父に合わせるって」

「そっか」

相変わらず仲良しさんだね、と言うまーくんは、そうだねえ、と私も応える。こんな風に、今日も昴君と食卓を囲みたかったのだけどな。一抹の寂しさが過ぎて、しかし目の前に居るまーくと目が合えば、私はどうにかそれを隅っこに追いやった。

「今日は高木君といっしょなのね」

「泊まってたから」

「……そう」

並んで登校して、じゃあね、と言ってわかれる。教室に入ったらいつも居るあかりは、最近いつもこの時間には登校しているようだ。私もそうだけれど、平均すれば早い時間に登校してはいるけれど、

大なり小なり差は生じる。だから、私が来るのが早いことももちろんあった。それが、最近は毎日のように私より早い。自分のことで手いっぱい、なかなかまわりに目を向けることもできずにいたが、ふうむ。

「……ちよつと、自動販売機にいつてくる」

「私、コーヒーでいいわ、ブラックね」

それは買って来いということか。

有無を言わさぬ迫力にため息を吐き、私は鞆を一旦置くと、財布だけ取り出して一階にある自動販売機を目指した。

あれ、ひよつとして私がお金を出すのか。……まあいい、なんだかんだ、色々話を聞いてくれていた。それでいて、突っ込むこともしない。あかりは良い友人だ。日頃の感謝を込めて、これくらいならおごってあげようではないか。

寒さに丸まりながらも、自動販売機でまずココアを押す。そんなに差異はないだろうけれど、なんとなく、あとから作ったもののほうがまだ冷めにくい気がした。

ことん、とカップが落ちた音がする。できあがりの機械音がピーピーと鳴り響いて、私は取り出し口の扉を開いた。

さて、次はあかりのコーヒーか。しかしブラックとは。なぜ糖分をとらないのだ。糖分をとらねば、いざというときに思考が鈍るというのに。いや、個人の自由ではあるが。

ぶつぶつと無意識に口に出しつつ、私はお金を入れてブラックのボタンを押す。

しかし、考えてみればあかりの思考は私の三倍は働いていそう。糖分を摂取せずとも働く頭は、なんともうらやましい。私はお腹がすけばなんにも考えられなくなるし、執拗に糖分をとらねば、と思いつ込んでしまうフシがある。これもある種の癖なのだろうが、そういったスイッチがなければどうにも上手い具合に物事を精査できない

のだ。

……いや、精査できていないのかもしれないが。

自嘲の意も込めたため息をひとつ吐き、私はできあがったコーヒーを取り出す。

両手が塞がっているのです、こぼさないように、なおかつ転ばないように、多少慎重に教室へと戻る道を歩き出した。

「昂君たら、本当にそんなこと言ったの？」

「そのくらい言っても罰は当たらないと思うなあ。だって身内だって理由でひどくない？」

「まあそうよね。今度なにかお礼をもらえばいいじゃない」

「お礼？たとえばどんなもの？」

「そうねえ」

弾む会話。楽しそうな笑い声。

誰も入れないような空気を醸しつつ、なんともお似合いのふたりが、昇降口から廊下への1歩を並んで踏み出していた。

ああ、なんで自動販売機って食堂の横にあるんだろうか。そもそもなんで我が高校は、食堂が離れみたいに校舎から外れてるのか。敷地内に自販機を置いてくれれば、わざわざこの昇降口の前を通る事もないというのに。

笑いながら歩く2人のうしろ姿を、私は無言でみつめる。

彼らと向かう先はいっしょだけれど、なるべくならば気付かれたくはない。冷めないようにと、早足で帰るつもりだったのに。

他の登校している生徒たちと混じりつつ、一定の距離をとりつつ、私は先程よりもっと神経を尖らせながら、歩き出した。

昂君。なんで？なんでそのひとといっしょに登校しているのさ。

ひょっとして、私に寝坊したっていうメールは嘘で、彼女と待ち合わせをもっとしていたの。

井上詩織さん。

花のように笑う、とても綺麗なひと。

昂君と並んで歩いていると、2人から極上のなにかが香ってきてそうなる。雰囲気にあてられて、思わず赤面してしまいそうなる。

私は、赤面なんてしないけれども。眉間に思い切り皺が寄ってる。わかってる。

『がっかりだ……』

ああ。

自分にすぐがっかりだ。なんなら失望している。

金曜日のときよりもはつきりと、どろどろとした悪感情が私の中に渦巻いている。こんな醜いもの、知りたくはなかった。

嫉妬、しているのだ。彼女に。

井上さんに、私ははつきりと不快感を抱いている。

馬鹿だな。そんな権利もないくせに。

いまだ彼の言葉を、こころを信じられずに、返事を渋って、ある種弄ぶようなことをしておいて。それなのに隣にどこぞの女が並べば、気に入らない、と私は唾を吐こうというのか。なんて女だ。なんて嫌な女なんだ、私ってやつは。

こんなの、間違っている。いや、そもそも、もう答えは出ているんじゃないだろうか。

私との毎朝の逢瀬。

「……逢瀬って、おかしかろう」

ふ、と自嘲の笑みを浮かべて、私は足を止める。遠ざかっていく2人のうしろ姿を眺めて、目を細めた。

毎日の約束を反故にして、彼女を選んだのだ、昂君は。

私ではない女性を、選んだのだ。

「さようなら」

口に出したら、泣けてしまいそうで、私はなんとか堪えた。

「……遅かったわね」

「ごめん、ちょっと」

片眉をあげて訝るあかりにコーヒーを渡す。一口飲んで、つめた、と呟いた彼女に、再度謝罪の言葉を告げる。

席に着いて私も一口飲み込めば、中途半端に冷えたココアが流れ込んでくる。同時に別のなにかが身体中に浸透してゆく気がして、甘いはずのそれがとてつもなく苦い飲み物に思えてしまう。

思わず眉を顰めた私の顔を、あかりは覗き込んでくる。

「なにかよくないものでも見た？」

「……あかり」

ふ、と苦笑する彼女は、声に出さずとも言っている。仕方ないわね、と。

泣き出しそうな自分を叱咤して堪えれば、あかりが腕を勢い良く引っ張った。ぎょっとして目を見開き狼狽したが、あかりはおかまいないしに私の腕をぐいぐいと引っ張る。

辿り着いた部室の前で鍵を開錠すれば、あかりは無言で私を中へと導いた。抵抗する理由もないので、私はおとなしく誘導されるままになる。

「で？」

カップを傾けて冷えたコーヒーを飲みつつ、あかりが端的に口を開く。ソファに座り足を組むそのさまは、なんだか妙に貫禄があっ

た。本当に17歳のおんなのこだろうかと思いたくなる。

「……今日は朝、いっしょじゃなかった」

「そうねえ。あんた高木君といっしょだったものね」

こくん、とあかりの言葉に頷いて、私も同じようにココアを飲む。少し甘さが戻っている感覚があったけれど、ずきずき痛む胸は変わらない。

「終わった」

「は？」

「なんもかんも、終わったんだ。私は、永遠に欲しいものを逃したらしい」

「……………だから？」

「昴君とはもう、関わらないことにする」

「オトモダチにも戻る気はないってこと？」

質問に、再度頷く。

次の瞬間に飛んできたのは、いつのかわからない先輩が作った冊子であった。頭におもいきり当たって、しかもそれが角であったものだから、ものすごく痛い。

なんという破壊力であろう。痛みに悶絶して額を押さえていると、あからさまに苛立った声が前方からもれた。

「ここまで馬鹿だと思ってなかったわ」

「！ あかり」

呆れにも似た声に戸惑いを覚えつつ、涙目になりながら彼女の続きを待つ。はっきりとその綺麗な双眸で睨みつけられて、私は息を呑んだ。

美人が怒ると、ほんとうに怖いのだ。

「あんたと佐藤君が、なんかしら事情があるってのはわかってたわよ。2人が付き合っていないことも。佐藤君があんたに片想いしていることも。どうしてだか今はあんたも彼が好きなんだってことも」
「……………」

「でも、なに？今のあんたの発言は。要約すれば、自分かわいさに尻尾巻いて逃げるってことじゃないの」

あかりの言葉に、おもわず違う！と叫んだ。叫んだが。
言われて気付いた。まったくもってその通りであるということに。
愕然と目を見開きかたまる私に、あかりはため息を吐く。

「気付いてすらいなかったわけ？ほんっと呆れるわ」

「…………でも、今更」

「ちー」

ぎろ、と睨まれて、私は肩を竦める。次の瞬間、あかりの顔付きが、がらりと雰囲気を変えた。

せつなそうに目を細めて、私ではないどこか別のものへと想いを馳せているのがわかる。

「言えるじゃない、あんたは」

「あかり」

「好きだって、ふられるかもしれないだって、堂々とそう言えるのは、幸せなことよ。はつきりふられることも出来ないで、ずるずるどうしたらいいかわかんないで同じ所ぐるぐるしてるより、ずっと建設的じゃないの」

あかりの言葉に、すべてを悟った。

やっぱり、彼女は、好きなのだ、と。

「……まあ、諦められるのはあの人のおかげね。完璧に負けたと思える人で本当よかったわ」

「じゃあやっぱり、彼氏って」

「そうよ、兄のこと。本当は彼氏でもなんでもないのに、告白された男に恋人がいるって断る瞬間だけは、本当にそうなのかと錯覚できる瞬間だったわ。いつそ血が繋がってないとかドラマティックな展開があればよかったのにね」

馬鹿みたいよね、と笑う彼女に、私はなにも言えなかった。

そうか。最近、ずっと登校するのが早かったのは、なるべく家に居たくなかったからなのだな。

「なーんか、家の中がお祝いムードでね。兄さんもちょこちょこ家に帰ってくるし、まあ色々打ち合わせとかあるんでしょうけど」

「……そう」

「相手の、高柳君のお姉さん。良子さんりょうこって言うんだけど。ほんとに名は体をあらわすじゃないけれど。良い人すぎて困るのよね。嫌味も言えやしないわ」

むつつりと口を尖らすあかりが、少し子どもっぽく思えてくる。

きつと、彼女の大人びた表情は、いつも兄を追いかけていたからなのだろう。追いつきたくて、隣に並びたくて、色々頑張ったに違いない。けれども叶わない、叶えてはいけないというジレンマに、どれだけ苦しんできたのだろう。

「どうしても辛ければ、いつでも来たらいい」

「！ 千絵子」

「家はいつだって歓迎する。父も母も、そうお堅い人間じゃないか

らね」

「そうね。どうしてもものときは、そうする」
「ん」

微笑んで頷く。

でも、ずっとこういうこと何も言ってこなかったのに。ひよっとして、ふっきれたのは、やなぎんのおかげなのかもしれない。

そう考えると、少し嬉しくなる。やなぎん、あかりの傷、存分に癒してくれ。潔い彼ならば、この親友を任せることができるだろうと、心から思った。

ほんわかしていると、急な痛みと共に思考を中断させられた。

でこぴんは、地味に痛いからやめてほしい。間抜けな声を上げたのち、さすさすと額を撫でると、やった本人は悪びれることもなく私をじと目で半ば睨むようにみつめてくる。

だからその顔やめてくれないかね。

「とにかく。あんたはきちんと佐藤君と向き合うこと。いいわね？」

「う」

「返事」

「……はい」

「よろしい」

半強制的に交わされた約束は、しかしひどく心強いものだった。

失ってからでは、遅い。いや、もう失ったのかもしれない。傷付くだけだとしても、今更ずるいと罵られたとしても、それでも。

あかりが言ったように、自分を守る為だけに思いを閉じ込めるのなら、そんな真似はみつともない以外のなにものでもない。

そうだ。もう、このどす黒い正体はわかりきっている。だったらもう、言うしかないじゃないか。

好きだと、昴君に、告げる。

心の中で唱えたにもかかわらず、私の脈拍はやたら速くなった。
……今からこれでは、多少どころかなり不安であった。

第23話

好きだと告げるのは、すごく難しいことだって、わかっている。けれど、まーくんやあかりに背中を押して、正確にはあかりには叩かれる程の威力であったが、もらって、気付いた。

あふれるものを、止める術はないのだという事実。醜い心で覆われて、そこから逃げ出そうとしたって、結局ついてまわるのだということ。それならば、と。腹を括ったのだ。

私は、佐藤昂君が好きなのだ。信じる信じないを、もうどこぞへ放ってしまってもかまわない程度に。

心の中で唱えたら、なんだか妙にすっきりした。

放課後を待つて、私もあの日からやり直そう、と決意した。昂君のクラスに行つて、彼を呼び出す。話したいことがあるのだ、と。場所はもちろん部室だ。

そういった状況に頼るのは情けなくもある。あの日を再現して、やっと伝えることができる小心者の自分。今度こそ碎けてしまうかもしれない。

でも。

伝えないよりはずっとましなんだ。

もやもやと傷付きたくないといじていた時の己が、嫌で仕方がなかったのだから。私は、私を誇りたい。だからこそ、こそこそと消滅させるよりも、当たって砕けたい。そうして改めて、私は私をなぐさめてやれるだろうから。

ふう、と短く息を吐く。担任が全工程の終わりを告げて、我々は学生の本分をまっとうした。いよいよもって、待ち望んでいたのか、永遠にこないでほしいと願っていたのか、複雑な放課後が始まるというわけだ。

当然だか、私は緊張した面持ちで席を立つと、鞆を右肩にひっか

ける。気を落ち着かせよと、深呼吸をした。

ふ、と吐き出した息がすべてなくなれば、私は少しだけ混乱していた頭がすっきりとした気分になる。

「千絵子」

いまだ座った状態で、私の前にいるあかりが振り返りつつ名を呼ぶ。何も言わずとも伝わってきた。しっかりしろ、と目が訴えている。

私は頷いて、いってくる、と多少うわずった声で教室をあとにした。ああ、結局しまらないもんだなあ。

あの日と同じように、昂君の教室へ向かう。うるさい鼓動は耳を塞いだところでどうにかなるわけもないので、放っておいてそのまま無言で廊下を歩いた。

「あの、野田さん？」

おや。

まっすぐに教室へと向かうはずであったのに、私は早くも再現を失敗させてしまったらしい。声をかけられて思わずため息を吐きそうになったけれど、高くも低くもない耳に心地良い凜としたその音に、私はすぐさまその感情を堪えた。

目の前にいるのは、井上さん。今朝、昂君の隣に並び可憐な笑い声をあげていた女の子。

私から、永遠に昂君を奪ってしまうかもしれないひと。

いや、奪う、は凶々しいな。元々、彼は誰のもんでもないだろうに。

そんな事を考えてしまい、ついつい苦笑をもらした私の表情を訝りつつみつめる彼女に、私は小さく謝罪をいれれば、どんな用向きかを聞こうと改める。

「……昴君のところへ、行くんでしょ？」

「それは……あなたに言わなければいけないことなんだろうか」

探るような視線でそう投げかけられ、私も思わず応戦してしまう。ほろりと出た言葉は、きつと本音そのもの。つつけんどんとまではいかずとも、友好的とはいえないその態度に、井上さんはくりくりとした黒目がちな瞳をす、と眇めてみせる。

初めて対峙したときに垣間見た表情を思い出し、私は一瞬身を強張らせたが、なんとか弱気になっていく部分を見せずに済んだ。

しかしそんな私の心境などどうでもいいかのように、先程の少し陰のある表情を引っ込めれば、彼女は困ったように眉根を寄せた。そんな姿も綺麗である。昴君のはなつそれとは違い、純粹に容姿が綺麗だという話だが、いずれにせよ、やはり私よりは隣にいて見栄えすると思えてならなかった。

ああ、だから。

そんなことでいちいち落ち込んでどうするのだ。

「野田さんて、昴君のこと好き、なのよね？」

あまりにも直球すぎる物言いに、私は素直に不快感をあらわした。眉間に皺を寄せ、無言でいれば、井上さんはそれだけで確信を持ったのだろう。心得たように頷けば、悩ましげな息を吐き出した。

「あのね、この土日のあいだで、私たちお付き合いを始めたの」

「！ それって」

「もちろん、私と昴君よ」

そんな。

声に出そうとしたけれど、私は面白いくらいに動揺していて、ひ

ゆう、と空気が振動するのみで、喉から音が発せられることはなかった。

私の反応に心底申し訳なさそうな、悲しそうな顔を井上さんは向けてくる。

次には何を言うつもりなのかと、黙ってみつめれば、なぜか井上さんは私に頭を下げた。

「……井上さん？」

「ごめんなさい、勝手だっただけわ。恋愛は、誰が誰に想いを告げようと、自由なもの」

息を呑む。

彼女は、わかっているのだ。これから私がなにをするのかを。

「やっと叶ったの。やっと私、彼の隣に並べるようになったわ。だからお願い。奪わないで、私の居場所を」

「でも、私は」

「あなた、一度彼をふったらしいじゃない」

「！ どうして」

「昴君が教えてくれたの。失恋して弱っている彼につけこまなかったといったら、嘘になるわ。でも、なりふりかまっていられなかったの。それほど彼を好きなのよ！」

下げていた頭を上げた瞬間に見えたのは、潤んだ瞳。大粒の涙を今にも零さんばかりの彼女に、私は何を言えればいいのだろう。

かたまってそのまま話を聞くしかない私に、井上さんはたたみかけるように声を上げる。

「今あなたが告白すれば、きっと彼はあなたを選びたいって思う。けれど、昴君は優しいから、私とあなたとのあいだで板ばさみにな

って苦しむと思うの」

「……そう、だね。彼はそういう男だ」

力無く頷く私に、今度こそ彼女は涙を落とした。

「これ以上、私の大切なひとを苦しめないで。最初にふったのは、あなたでしょう？もう、これ以上刺激しないで、そっとしておいて！何より、私はずっといっしょにいたい。昴君の隣にいたいんだよ！」

顔を覆って泣き出す彼女を振り切つてまで、告げる勇氣なんて、私には。

当然なかった。

何よりも、彼女の言葉はいちいち正論すぎて、胸に突き刺さる。

昴君は言いふらすような人間ではないし、彼女の事を信頼しているからこそ、私と昴君のあいだに起こった出来事を話したのだろう。だからこそ井上さんは、私を昴君に近づけたくないのだ。

一度ふいにしてしまった大切なもの。

『あまり迷っていると、さらわれてしまうよ』

ああ。

『ちーちゃん、素直になった時、相手がまだ隣にいるかはわからない。それだけは肝に銘じておいたほうがいい』

ああ。

本当だね、まーくん。

そのとおりすぎて、びっくりしてしまったじゃないか。

「全然勝手じゃないよ。私が、都合が良すぎた。ごめん、もう、彼には何も告げない」

「野田さん」

苦笑して、私は踵をかえす。しかし、まだ用事があったのだろう。慌てた様子で私を呼び止めた井上さんに、私は多少苛立った。

正直、もう井上さんをあまり直視したくはなかった。だってやっぱり、少しは、いや、だいぶ、辛いから。けれども必死で堪える私の心情を知ってか知らずか、彼女はさらに言い募る。

「昴君の番号、知っているんでしょ」

「え？」

「携帯の番号よ」

一瞬意味がわからずに聞き返した声をとぼけているのだろうと勘違いしたのか、少し苛立った声で彼女が繰り返し訊ねてきた。私がやっと意味を理解しああ、と頷くと、井上さんはみるみるうちに怖い顔で私を睨んだ。

「消して」

「え？」

「今ここで、昴君の番号とアドレスを消して。出来れば、あなたもアドレスを変えてほしいんだけど」

はい？

なぜそこまでせねばならないんだ。

あまりの言い様に私は呆気にと取られていたが、未練を残したら彼がかわいそうでしょう、などと言われて、後から考えればそのとき私は多大なる絶望の最中にいたからか、まともな判断がついていなかったのだと思う。その場で、彼の携帯番号を消し、メールアドレス

スを消し、ついでに私のアドレスまでも新しいものに書き換えた。
その様子を見てやっと安心したかのように微笑んだ井上さんは、
ありがとう、と告げて、私とは反対方向へと軽やかな足取りで歩いていった。

私は、最後の彼女の微笑みが歪んで見えて、そんな風に思ってしまった自分の心にとてつもない嫌悪感を抱いていた。

終わった。

本当になにもかも、終わってしまったんだ。

呆然と立ち尽くして、しかしいつまでもそんなことをしていても仕方がないと思った私は、鉛のように重くなったような感覚の足を引きずりつつ、ゆっくりと帰路に着いた。

「なんだよ、けっこう切り替え早いんじゃないか」

発した声が震えている。自分を笑いものにして元気を出そうと思ったのに、これじゃあなんの冗談にもならない。目からはぼとぼと涙が溢れて、視界が歪んで見える。

なんだよ、とか、ちきしょう、とか、そんなことを小さい声で呟きつつ、私はなんとか家に帰った。

晩ごはんを作らなきゃいけないのはわかっていたけれど、とてもじゃないけれどそんなことできそうもなくて、しかし運が良いのか悪いのか、この日は両親とも帰って来ない日だった。

ひとしきり涙を流して、喉がひどく渴いていた。

ベッドに潜ってシーツに顔をぐりぐりとこすりつけていたけれど、少しだけ頬も痛い。

あまりにもわかりやすく泣いていたと思われるのも嫌だから、明日はきちんと顔を普通の状態にして登校しなければならない。

私は重い腰をあげてベッドから起き上がると、洗面所の前まで向かう。

大きな姿見にうつる女の子は、お世辞にもかわいいとは言いがたい様子で、腫れぼったい瞳でこちらを睨みつけている。

私はこんな顔ではまずいな、と思えば、冷水で顔を洗い流す。瞳のまわりを水で冷やしてタオルで拭くと、先程よりは見られる顔になった。これならば朝にはなんとかなっているかもしれない。

リビングまで向かって時計を見てみれば、時間はまだ19時で、ずいぶんと流れるのが遅い。帰ってきてから3時間程は経過していたけれど、こんな日にひとり寂しくうずくまっていなきゃいけないのが、辛かった。

しばらくどうしたものかと思案して、私は部屋へと引っ込むと、鞆に入れっぱなしにしていた携帯電話を取り出した。

特に着信は入っていないくて、どこか期待した自分に嫌気がさす。ため息を吐きつつ操作して、とある人に電話をかけた。

『もしもし?』

優しい声が耳に届いて、私はそれだけで泣きそうになった。けれどもなんとか堪えれば、名前を呼ぶために口を開く。

「……まーくん」

『ちーちゃん、どうしたの?』

もうすでに涙が浮かんできそうになっている。何度も自分にいけない、と繰り返して、私は努めていつものような声音で話を切り出した。

「あの、今日はそっち行っちゃだめかな」

『どうしたの?』

「父と母がそろっていない日だから、その、晩ごはんも味気なくて今日の朝までまーくんがいたから、なんか、その、急に寂しくなっ

ちゃったというか」

笑いながらそこまで話したけれど、電話の向こうからはなんの反応もない。おりた沈黙に気まづくなって、私は無理ならいいんだ、と電話を切ろうとした。

しかし別れの挨拶を告げる前に、まーくんの声が耳に響いた。

『いまから俺がそっちにいくから、家を出ちゃいけないよ？約束できるか？』

「え？いやでも」

『いいね？』

「は、はい」

厳しい口調に思わず応えれば、まーくんはよろしい、と言って電話を切ってしまった。どうやら、全然誤魔化すことができなかったらしい。

否定の言葉を強く言うほどには今強くなれなくて、誰かにそばにいてほしかった。

家族の誰かに、どうしてもそばにいてほしかったのだ。

ほどなくしてやってきたまーくんの顔を見て、私はもう我慢なんかできなくなっていた。

困ったように笑って玄関扉の鍵を閉め、素早く私の手を握ったまーくんは、靴を脱いで手を繋いだままりビングへと私を導いた。

ソファに隣合って座ると、まーくんは何も言わずに私の身体を引き寄せる。

彼の肩に置かれた私の頭から、まーくんの優しい体温が流れ込んでくる。

「暖房も付けずに、ここでもぼんやり待っていたの？」

「……………」

ため息混じりに素早くリビングの温度をあたためるように機械を操作するまーくんに、私は何を応えるでもなく身体をあずけていた。そんな私に、まーくんはいつもの優しい笑顔をむける。

「何も訊かないよ。すべて出してしまえばいい」

「……う……」

ゆるゆると私の頭を撫でる彼の優しさに胸がいつぱいになり、私の瞳は止まっていたはずの涙をまた流しはじめた。声を押し殺すこともせず、子どものように泣いてしまった私は、いつしか泣き疲れて、やがて意識を手離した。

すやすやと穏やかな寝息を立て始めた私の横で、誰かが何かを呟いている。

「俺の大切な妹に、ずいぶんと無体な真似をしてくれたものだね」

大きな力で抱え込まれるのがわかる。ふわふわと、私の身体が宙に浮いて、どこぞをさまよっている。着地点は暖かくてふかふかの何かだ。一瞬だけ寒気がしてふるり、と身を震わせたけれど、やがて暖かい何かが身体にかけられて、私は再度眠気に襲われれば、どんどん意識を沈ませてゆく。

「……おしおきは、どんなものがいいかな？ 佐藤昂君」

撫でられる頭のここちよさに、私はすっかり安心していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1799z/>

【全年齢版】好きです、付き合ってください。

2012年1月5日22時52分発行